

社会福祉法人聴力障害者情報文化センター

平成 27 年度

聴覚障害者の精神保健福祉を考える研修会 2015

聴覚障害者の発達障害と適応障害
～障害への理解と支援のヒント～

【報告集】

港区障害保健福祉センター ヒューマンぷらざ

住所：〒105-0014 東京都港区芝1丁目8番23号

日時：平成 27 年 8 月 29 日（土）10 時 00 分～16 時 30 分
30 日（日）10 時 00 分～12 時 00 分

主 催

社会福祉法人聴力障害者情報文化センター

後 援

東京都

協 力

公益社団法人日本精神保健福祉士協会

一般社団法人東京精神保健福祉士協会

一般社団法人日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会

公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構

東京都聴覚障害者連盟

特定非営利活動法人東京都中途失聴・難聴者協会

社会福祉法人東京聴覚障害者福祉事業協会

東京手話通訳等派遣センター

たましろの郷

特定非営利活動法人東京盲ろう者友の会

東京都盲ろう者支援センター

港区聴覚障害者協会

社会福祉法人友愛十字会東京聴覚障害者支援センター

社会福祉法人トット基金トット文化館

社会福祉法人東京愛育苑金町学園

目 次

開会挨拶	P 1
来賓挨拶	P 2
基調講演「発達障害を有する聴覚障害者の困難と支援」 東京学芸大学 特別支援科学講座 教授 濱田 豊彦 氏	P 3
ミニレクチャー「成人聴覚障害者の適応障害・発達障害に向きあって 心理的支援の実践をもとに」 九州大学基幹教育院 キャンパスライフ・健康支援センター 特任助教 臨床心理士・精神保健福祉士 甲斐 更紗 氏	P 2 1
実践報告 (1) 「ろう・難聴の子どもたちにスクールカウンセラーができること」 東京都教育委員会派遣スクールカウンセラー 臨床心理士・手話通訳士 賀屋 祥子 氏 (2) 「精神障害雇用トータルサポーターとして感じていること」 日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会 会長 社会福祉士・精神保健福祉士 稲 淳子 氏 (3) 「実践例報告 精神保健福祉相談支援事業の取り組みから」 聴力障害者情報文化センター 施設長 精神保健福祉士・介護支援専門員 森 せい子 氏	P 2 9 P 3 4 P 3 9
講評	P 4 3
閉会挨拶	P 4 5
資料編	P 4 6

会場からの発言は、個人情報保護のため一部割愛、要約させていただいております。
ご了承くださいますようお願いいたします。

【開会挨拶】

**社会福祉法人聴力障害者情報文化センター
理事長 中村 吉夫**

皆様、おはようございます。聴覚障害者情報文化センターの理事長を務めております中村と申します。どうぞよろしく願いいたします。

今年もここに全国から 154 名の方々のご参加をいただき、聴覚障害者の精神保健福祉を考える研修会 2015 を開催する運びとなりました。皆様のご熱意に心からの敬意を評します。また、日頃、当センターへご支援・ご協力をいただきますことに心より感謝を申し上げます。

平成 23 年に当センターが初めてこの研修会を開催して以来、今回で 5 回目になります。この間、国連の障害者権利条約の批准を契機として、国内においては、障害者保健福祉に関する法律・制度が条約の主旨に沿って整備されてまいりました。また、全国の自治体では、手話言語に関する条例の制定や手話言語法制定に向けた議会決議が行われるなど、聴覚障害者の情報保障のための取り組みが各方面で進められております。

このように、共生社会の実現に向けた様々な取り組みにより聴覚障害者の日常生活、社会生活上の環境は着実に変化しているということが、徐々にではありますけれども、実感できるようになりました。しかしながら、精神や発達に障害のある聴覚障害者の支援については、依然として多くの壁や課題があり、日々、対応に苦慮しているというのが、皆様の実感ではないかと思えます。

本日の研修会は、日頃、皆様が直面する多くの課題の中で発達障害の理解と支援をテーマに取り上げ、ご案内をいたしましたところ、手話通訳者・施設職員・介護関係職員・ケースワーカーなど幅広い分野から多数のお申し込みがありました。改めて、この問題への皆様に関心の高さが感じられるところで、発達障害者支援法が、平成 17 年 4 月に施行されて 10 年が経ちますが、発達障害のある方々への医療的介入や生活支援において、聴覚障害者はどのように扱われているのか、このような問題意識のもとに、本日は聴覚障害児・者の発達障害や適応障害についての理解を深め、関わり方の工夫を皆様と一緒に考えてまいりたいと思っております。

終わりになりますが、この研修会の開催にご支援・ご協力をいただきました専門家の先生方、関係団体など関係者の皆様に心より厚く御礼を申し上げます。

本日の研修会がご参加の皆様にとって、有意義になりますよう祈念し、開会のご挨拶とさせていただきます。皆様、今日 1 日よろしく願いいたします。

【来賓挨拶】

東京都聴覚障害者連盟 会長 栗野 達人 様

皆様、おはようございます。ただいま紹介いただきました、公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟の会長をしております栗野と申します。今回、皆様が全国から聴覚障害者の発達障害を学ぶ研修会に集まり、また、私も参加できることを本当に喜ばしく思います。

先程、理事長からお話があったように私達も運動をいろいろとしております。昨日、一昨日は国会議員に、東聴連と全日本ろうあ連盟の皆と一緒に手話言語法の条例制定をお願いし、また、手話は言語であるということを強くアピールしてまいりました。

昨日は少し雨が降っておりましたが、500人近く集まりデモ行進をしてきました。私達は聴覚障害者のために、社会保障も含めた権利をきちんと保障できるよう運動しております。

本日、皆様も発達障害、聴覚障害についていろいろな面で研修をされるとと思います。今回の研修で学んだことが活かされることを期待しております。皆様、これからも共に頑張ってください。よろしく願いいたします。

日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会 会長 稲 淳子 様

おはようございます。紹介をいただきました一般社団法人日本聴覚障害者ソーシャルワーカー協会の会長をしております稲淳子と申します。今回、5回目の開催ができたことは非常に嬉しいことだと思っております。何故かと言いますと、現場で様々な悩みや、実際に支援をしている人達がぶつかる壁を共有し、勉強しながら話し合える場があることは、非常に喜ばしいことと思うからです。年に1回、七夕みたいな感じで、毎年開かれることを期待しております。

ソーシャルワーカー協会は、設立してまだ若い団体です。全国の現場でソーシャルワーカーとして、特に発達障害を重複した聴覚障害者に会う時は、どう解決すればいいのかを考えることが本当に多いと思います。私達は、基本的に聞こえない人、また、他の障害も併せ持つ聞こえない人達が地域の中で安心して暮らせるようにサポートしていく、本人も楽しい時間を安心して過ごせる、そして、亡くなるまで安定して過ごせるということを支援していきたいと考えております。

発達障害を併せ持つ聞こえない人達は、特別な人、支援が難しい人という話をよく聞いております。しかし、私は特別な人とは思っておりません。同じ社会人、そして仲間として、今後も付き合っていきたいと思っております。

今日は専門の方が大勢いらっしゃいますので、是非、いろいろな意見を出していただいて勉強したいと思います。簡単ですが、挨拶と代えさせていただきたいと思っております。

港区聴覚障害者協会 会長代理 事務局長 平井 壽子 様

皆様、おはようございます。ただ今、ご紹介いただきました港区聴覚障害者協会事務局長の平井壽子と申します。本当ならば、会長の平井伸治が挨拶すべきところですが、所用のため、代わりに挨拶させていただきたいと思っております。

本日、5回目の研修会が開かれること、本当におめでとうでございます。港区のひゅーまんプラザを使っていただいて、本当に嬉しく思います。簡単ですが、これで挨拶に代えさせていただきたいと思っております。ありがとうございます。

【基調講演】

「発達障害を有する聴覚障害者の困難と支援」

濱田 豊彦

東京学芸大学 特別支援科学講座 教授

業績・経歴等

三重県津市の出身。父は盲学校教員、母はろう学校の教員。障害児教育がやりたくてという理由でなく、ただ東京に出たいために大学に行く。やっと入った博士課程を中退。東京都心身障害者福祉センターに拾われる。そこで聴覚障害者の更生相談を担当。

その後、東京学芸大学で教鞭を執る。現在 NPO 大塚クラブ代表。その中で発達障害のある聴覚障害児とその保護者を支援する「学習活動ダンゴ」を 10 年前から主催。

皆さんおはようございます。僕は今、東京学芸大学で、将来、ろう学校や難聴学級で先生になりたいという学生の養成をしています。その前は、東京都の福祉局ですね。心身障害者福祉センターという所で聴覚障害の方の更生相談（リハビリ相談）を7年くらい担当させていただきました。今日のタイトルは「発達障害を有する聴覚障害者の困難と支援 聴覚障害者の発達と適応障害を考える」と入れさせていただきました。適応障害というのは簡単に言うと、ある状況がその人にとって、とっても苦しい、つらい、ということですね。（皆さんの視線を浴びているので）今の僕の状況がそういう感じです。さっき1階のトイレに行ったんですけど、ふと、今から講演するのがつらくて、このまま帰っちゃおうかなという気持ちになりました。本当に帰っちゃおうと適応障害ということになっちゃうわけですね。

■ギリシャ人は働き者だった

最初は綺麗なスライドを持ってきました。これはギリシャ、アテネです。今年の7月に、聴覚障害教育の会議がアテネでありました。それもですね、国民投票が行われている真っ最中にありました。ギリシャの人達ってどうも怠け者が多くて、借金ばっかり抱えているふうに思われがちですよ。僕もそう思っていました。実際に行ってみたらどうかというと、ギリシャの人達は、確かにお昼過ぎにはもう仕事終わっちゃうんですよ。昼の2時半くらいで終わっちゃう。だけど、とっても暑いんですね。だから午後働いているのは効率が良くない。でもその代わり銀行は朝7時からやっている。だから決してギリシャ人は怠け者でも何でもないわけです。自分達の気候とか生活環境に合わせた暮らしぶりをしているということなんです。そこに行ってみて初めて、ギリシャの人達にはギリシャの人達の考え方とか想いがあるんだなと感じました。

今からいくつか聴覚障害の方のお話をさせていただきます。テストをするとテストの上で点数が低いとか高いとかという話が出てくるけれど、それも多くは聞こえている人達の基準で考える評価ばかりなんですね。だから、何故数値が低いのか、数値が低いことがどのように生きにくさに繋がっているってということなどを深く考えていく必要があると思っています。今日は発達障害が1つのテーマということなんですけれど、僕が今関わっている子ども達は、知的にはあまり重い障害がない。知的な面では比較的ノーマルだけど、いわゆる発達障害を抱えている子ども達に関わっています。今日の話は、そういう子達が主たる話題になってくると思います。だからそこに知的障害も加わって、というふうになってくると、さらに複雑な問題が出てくるとことは当然あるんですね。

■聴覚障害が発達に及ぼす影響

最初は聴覚障害が発達障害に及ぼす影響ということで話をしていきたいと思います。発達障害を

考える時に、聞こえないということが、発達に色々と影響を及ぼすんですね。そのことを無視して、発達障害だ、発達障害だと言っている、いやいや聞こえない人にとってみれば、そういうことが普通なんですよということも、いっぱいあるわけです。いわゆる発達障害と絡めて特に関係してくるのが、1つは社会性の問題です。もう1つは言語獲得の問題です。

まず社会性の方から見ていきたいと思うんですけど、社会性という言葉は、自閉症が注目されるようになってからよく聞かれるようになった言葉です。社会性とは実は非常に多様な言葉で、1つの定義というのはまだないんですね。ただ、ここに示したように、「人間関係を形成し、円滑に維持するための社会生活を送る上で欠かせない特質」、だとか「文化や発達段階に応じて求められる対人的行動」。あるいは、「その場の空気が読めること」。これ結構上手な定義じゃないかなと思うんですけど、そんなふうに言われたりします。例えば、中村理事長さんが森さんと「ああ久しぶりだねえ」と言って抱き合ったりすると、たぶん、日本人からすると「ちょっとおかしいんじゃない？」とドン引きされることになると思うんですね。だけどこれがロシアに行くと抱き合って抱擁するというのは、普通の挨拶になりますよね。だから文化において求められる対人行動というのも随分変わってきます。こういう能力は誰が教えてくれるのかというと、人と人が関わる中で、無意図的に自然に身につけていくものなんですね。例えば、じゃれっこをしているのか、ケンカをしているのか、どれぐらい強く叩けばケンカになっちゃうのかなどはお母さんや学校の先生は教えられないです。45度以上手を上げると痛いからケンカになるよ、なんていうふうなことを指導しても意味がないわけです。実際に関わって、じゃれっこからケンカをして、これぐらい強く叩くと相手が痛がるのか、自分も痛いとか、そういう経験を積み重ねて初めて身につけていくものなんですよ。ところが、コミュニケーション自体に制限がある環境にいると、多様な集団に参加していく機会の不足を招きやすいわけですね。例えば、聞こえない子どもばかりが集まるコミュニケーションが困らない大きな集団があればいいですけど、聞こえないのは自分だけという環境にいると、深く人と関わるのが少なくなっちゃうわけです。そうすると対人的な経験の乏しさを招く状況が起こりやすいです。今、ろう学校の中でも東京のろう学校は非常に子どもが増えているんですね。予定より増えているぐらいで、非常に大きな集団になっているんです。けれども、地方ではどんどん小さくなっていて二極化しています。小さい所に行くと、もう小学校4年生なのに、ドッチボールでボールが当たって負けたって、ずっと次の時間も泣いていたりとか、普通「もう4年生だったらそんなに泣かないでしょ」ということをいつまでもこだわって泣いていたり。あるいは、友達のことを「これ良くないよ」と言う時も、中学生くらいになると、相手の気持ちも考えつつ言い方を工夫したりとかあるけど、すごくストレートな物の言い方をして、ケンカになっちゃうたりとかね。お山の大将ってスライドに書きましたけど、あるろう学校では、本当に人数が少なく、一学年3人ぐらいしかいない。そうすると幼稚部に入った時に、自分のクラスの友達、AさんとB君と自分の3人だけ。小学部に上がっても3人だけ。中学部行っても3人だけ、みたいになっちゃうわけですね。そうするとクラスの中で話し合いしましょうと言っても、意見を言うのはいつもお山の大将の子で、他の2人はうんうんって言って終わり、ということがずっと続いているんですね。そのろう学校で、それは良くないということで、各学年のお山の大将の子だけを引っ張ってきて、それで話し合いさせて、残りのうんうんと言っている子達でまたグループ作って話し合いさせる、という活動をしたんです。そしたらどうなったと思いますか。そのお山の大将の子達の中の1人が「その時間には参加しない」と言い始めました。それで、何で参加しないのと言ったら、「だって自分が意見を言った時に周りの子がうんうんって言わない」と。普通、自分が意見を言って、「それいいね」と言ってもらえる時もあるけれど、「いや僕は違う意見だよ」「もっとこうするといいんじゃない

い」などいろいろな意見が出るのが普通ですよ。けどそういうことを経験してきてないから、違う意見を言われたりすると、それをどうしていいのかわからない、自分の気持ちの中でどうおさめていいのかわからないという経験が非常に不足していることがあるのです。もちろんこういうことは、聴覚障害者の全てに起こることでは決してないです。皆さんのお友達にも沢山いらっしゃると思いますけど、聞こえなくても社会性に優れて、気遣いもできて、人間的にも豊かな方ももちろん沢山います。けど、環境的にはこういうことが起こりやすいというのは1つ踏まえておく必要があると思うんですね。これは、対人的な不器用さがあることがイコール発達障害ではないということを示しています。聴覚障害がゆえに起こる環境面がもたらしている問題なのですね。



そしてもう1つ、言語獲得の問題があります。スライドに示した文章を見てください。「妻は帰ったら君に電話をかけるからね」と「妻が帰ったら君に電話をかけるからね」という文章があります。「妻は」のほうは、電話をするのは妻です。「妻は帰ったら君に電話しますよ」という意味です。「妻が」の方は、電話をするのは誰でしょう？これは妻以外のご主人か誰かですよ。たぶんご主人が地方に単身赴任して、仲の良い女の子ができた。でもこの週末、家内が出てきちゃったので妻が帰ったら君に電話をするからね、とそんな感じですよ。問題は、何で皆さんが「は」と「が」の違いで電話をする人が違うと読み取ったかということです。別の例で「僕は水を飲みます」と言う時に、水を飲むのは「僕」、「僕が水を飲みます」も、水を飲むのは「僕」ですよ。けど、今示している例では、電話をする人が変わったんですよ。「何で？」と言われると、ちょっと説明に困っちゃいますよね。実は、聞こえている人達のほとんどは、日本語を学習していないんです。言語獲得とは、学習では説明できない無意識的な言語ルールの獲得のことです。言語的なルールの獲得が言語獲得の本質なんです。だから、教えてもらってないけど自然にできるようになる。それも条件を満たしていれば、一定レベルの言語を運用する力がつく。これが言語獲得ですよ。言語獲得の条件は3つだけです。1つ目は周囲にその言語が沢山あること。2つ目は言語獲得だけできるだけの知的な能力があること。3つ目はその言語を受容することができること。音声言語だったら「聞く」ことができる。手話のような視覚言語だったら「見る」ことができるということです。聴覚障害があると、聞こえないために自然に言語獲得ができないとなるわけです。手話に関しても、1つ目の、手話が沢山ある環境は非常に少ないですよ。そういうところで、本当の意味で使いやすい言葉を獲得することに努力が必要になってくるということです。

言語に関して言うと、「9歳の峠」という言葉があるんですね。よく「9歳の壁」という言葉が本で使われたりしますが、元々の言葉は「峠」です。「壁」と言うともう超えられないですよ。「9歳の峠」というのは、「ろう児の学力水準は普通児並みのスケールで見ると、9歳レベルの峠で疲労困憊している。」という言葉がはじまりです。これは東京教育大、今の筑波大の附属の校長先生をされていた萩原先生がおっしゃった言葉です。峠は越えていくんだけど、聞こえない子ども達は皆苦労している、そういう意味ですよ。問題は、何で9歳なのかということです。9歳ぐらいで何が変わるんだろう。大体小学校でいうと3、4年生くらいですよ。そうすると、国語で扱う内容などは、小学校1年生2年生の時は自分自身が経験したようなことが書いてある。だから自分の経験を言葉で表す内容が多いです。ところが3、4年生になってくると、虫の世界の話だとか、自分が経験するというよりも、言葉から新しい知識を獲得していくような内容になってきます。ま

た、アンビバレンスなんてスライドに書きましたけど、良い者が勝って悪者が負けるみたいなものじゃなくて、悪者にもそうする理由があったんだというような内容に変わってくるわけですね。また、算数なども、余りが出る割り算とか、ちょっと分かりにくいものが出てきます。即ち、抽象的で直感的には理解しづらい内容が多い、言葉から新しい知識を得る、そういう内容になってきます。こここのところに転換してくためには、言葉の力のある程度スムーズに使えるようになっておく必要があるわけですね。言葉の力に後押しされながら、もう1人の自分が存在するようになります。ここでいう「言葉」は音声日本語でもそうだし、手話でもいい。要するに自分の心の中で、ああでもない、こうでもないと試行錯誤する力ですね。これは言葉の力と非常に関係すると言われていています。前に進もうとする自分と、「いやちょっと待て」と言っているもう1人の自分ですね。もう1人の自分ができてくることで、子ども達はどういうふうに変ってくるかということ、自分以外の視点を気にするようになってきます。だから良かったらすごく威張るようになるし、悪かったら逆にすごい劣等感というような気持ちになる。そういうことが結局、相手の気持ちを理解したり、自分自身の目標を持ったりすることに繋がってきます。だから言葉の問題がスムーズに獲得できない、扱えないというのは、課題としては大きいということなんですね。ただコミュニケーションができないとか、書けないとか読めないだけの問題ではなくなってきます。

■発達障害を合併する聴覚障害児はどのくらいいるのか

その上で、発達障害のほうに戻りますが、どのくらい発達障害を併せ持っていると言われる人達がいるのか。聴覚障害の子、あるいは聴覚障害の大人の人全てをアンケート対象にすることはなかなかできないので、全国のろう学校にろう学校の校長会と一緒にアンケートをさせてもらったことがあります。ろう学校の中にもいわゆる重複障害の学級がありますけど、今回は、そのクラスの子どもは除いています。ろう学校で通常に勉強している子達、そして、日本語の問題もありますから、ご両親のうちどちらかが外国人の方だとか、あるいはろう学校に上がるまでに聞こえない子としてのきちんとした教育を受ける経験がなかった子達も外しています。普通にろう学校に通っている子達を対象にやったアンケートは、文部科学省が全国の小中学校に発達障害学習面だとか、行動面に著しい困難があるという子ども達がどれくらいいるのかを調査したアンケートです。聞こえる子ども達は、6.3%。次では6.4%というぐらいの数です。ところが、ろう学校の子ども達に2007年と2012年と2回調査しましたが、どちらも、32%とか34%、大体1/3ぐらいの子どもが、項目で引っかかってくるというふうになります。特に「対人関係やこだわり等」というところが、聞こえる子どもが0.8%に対して7.1%と出ています。大体9倍近い値になってくるわけですね。もちろんこの中には、さっき言った対人関係の経験不足から起こってくるっていうものも含まれているとは思いますが、発達障害的な要因をその子自身の中に持っている子達の割合が少なくはないということを表していると思うんですね。

■自閉症の概念の変遷

発達障害というのは、読み書きの困難だとか、つい立ち上がって歩いちゃうとか、いろいろなタイプがあります。その中でも、先程聴覚障害ソーシャルワーカー協会の方も挨拶されていましたが、特に大人になってからも支援が必要になる、支援が難しいというふうになりやすい。

自閉症スペクトラム、ASDと略します、ASDと言われるものについて今日特に取り上げて話をしていきたいと思います。本当は物事を解決していくためには、その原因を特定して、どういう状態になるのかをきちんと解釈して、適切な指導だとか治療をして、そして予防をはかることをやって

いくことが大事なんです。ところが、ASDはどれも実はあまり明確になってないんです。

ASDの概念そのものはどんどん変わってきています。今からそれを紹介したいと思います。まず、数ですね。今から35年ぐらい前は、聞こえる人達1万人の中で4~5人しかいないと言われていたのが、10年後には15人ぐらいと言われるようになって、2010年になると1万人になり、27.3%から千人に3人弱です。聴覚障害はよく言われるのは千人に1人って言われるんです。前は聴覚障害の方が多かったのに、今は自閉の方が多いというふうになってきています。何で増えているのかですが、実は、その原因はやはり分かってないんです。ただし、今注目されていることの1つとして、あるウイルスがあります。それがサイトメガロウイルスといわれるもの。サイトメガロウイルスは胎児がいる時に、お母さんが感染すると、感音性難聴になります。そして自閉を伴うといわれているんですね。聴覚障害児の20%ぐらいはサイトメガロウイルスが原因だというふうに言われています。なぜ増加しているかという、僕は今53歳ですが、僕と同級生ぐらいの人は20歳の時にサイトメガロウイルスを身体に持っていた(キャリア)んです。たぶん日本の衛生状態が悪かったんだと思うんですけど。汚いものを食べたりしていたのかもしれないですね。その後どんどん衛生状態が良くなってきて、今20代の女性でサイトメガロウイルスのキャリアは50%ぐらいと言われています。そうすると妊娠した時に感染する確率はどんどん増えているというふうに考えられるわけです。

そして原因だけじゃなくて、症状自体も確定しきれてない。時代とともに変わっている面があります。最初に自閉症ということを行ったのは、カナーという人です。この人は、顔は賢そうなのに自分の中にもったような感じの子ども達の一群がいる。それに対して自閉症と名前を付けたんですね。先天的な知的障害があるわけではなく心を閉ざしているだけだろうとみたということです。アスペルガーという言葉も聞かれたことあるかと思うんですけど、カナーが報告した翌年に、オーストリアのアスペルガーという先生が、カナーの言っている子達より症状は軽い、言葉なんかはちゃんと持っているけど、やっぱり対人関係で上手くいかない子ども達がいるという報告をしているんですね。ただオーストリアはドイツ領でナチスドイツと一緒にいたわけですよ。だから、戦争負けている方の国だったので、その後しばらく注目されないで放ったらかしになりました。最初にカナーが報告した子ども達の家庭は、割と豊かな家庭で、きちんとしているお母さんが多かったらしいです。それで、お母さんの子育てが原因なんじゃないかと考えました。冷蔵庫マザー理論という言葉があります。「冷蔵庫のように冷たいお母さん」、これが原因だと言われたりしたこともあります。だったらじゃあもうそんなことじゃなくて、もう何でもかんでも受け入れてください、というような方法で自閉の子に関わったけれど、全然変わらない。また、その「冷蔵庫マザー」と言われているお母さんが育てている子どもも、その上のお兄ちゃんや下の妹は、自閉ではなく全く問題ないということがあり、別にお母さんのせいじゃないよね、となってきたわけですね。今は、先天性の脳の障害と考えられています。ただし、男女比を見ると、圧倒的に男の子に自閉が多いんです。考えてみると、日曜日に家族と一言もしゃべらないで、お父さんがひたすら車を洗っているという様子を見ると、その人はもしかして自閉かなと思ったりもしますよね、これは冗談ですよ。男女比に差があることと、自閉の子がいると実はその両親だとか、おじさん、おばさん、おじいさんの中にも割合としては多いことから、今は遺伝要因の強い脳の障害と考えられています。確定ではありません。さっき言ったウイルスが原因だという説もあり、いろいろなんです。

80年代ぐらいになってくると、ウイングという人が出てきます。ウイングさんは自分の娘が自閉症なんですね。だからある意味当事者意識を持って自閉のことを見えています。それまでは、イギリスでは知的障害のある自閉の人しか支援の対象になってなかったのが、知的に障害がなくても、対

人関係とか人との関わりの中でとても苦労することがあるんだと、それに対してきちんと支援しないといけないという動きになるんですね。さっきのアスペルガーの研究なんかも再発掘して、評価のし直しをやった人です。このウイングさんの言った自閉の特徴が、その後広く認識されていくこととなります。1つは「社会性の障害」。対人関係があんまり上手くないということですね。それから2番目は「コミュニケーションの障害」です。自閉があると言語獲得が遅れる場合も少なくありません。3番目は、「興味関心の幅が狭い」。言い方を考えるとこだわりが強いというようなことですね。こういう3つの特徴がありますと言われたわけですね。

聞こえなくて、ASDで、自閉症的な子達と関わっていて、色んなタイプがあるなと思うんですね。僕自身の印象としては大きく3つに分かれます。1つはいかにも自閉っていう子ですね。人への関心がそもそも薄い。情動行動、好きなタオルがあると、その好きなタオルをずっと触っているような面が強い。見た目でも、ああ自閉、ASD的だなと感じるタイプの子ですね。もう1つのタイプは、人は結構好きなんです。人には関わってくるんだけど、自分の中にルールがあってそれを押し付けちゃう。あるいは自分なりの楽しみ方みたいなのを押し付けちゃう。だから一番トラブルが多いタイプです。それから3番目は皆がいても、その中に積極的に入っていく感じじゃない。ただ問いかけると、受容的にはボソボソ答えるというような感じですね。こういうふうに3つくらいに分かれるイメージを僕は持っています。

これは精神科のお医者さんとかに説明していただくのがいいと思いますけれども、実は2013年に、精神医学の診断基準で、アメリカのDSMというのがありました。その第五版、一番新しいバージョンが出ました。そうすると、今まで自閉症スペクトラム、ASDと言っていたものを、ある部分は「社会的コミュニケーション障害」と区分しましょう、となりました。社会性の問題と興味関心と、知覚異常ですね。ある音を聞くと頭が痛くなっちゃうとか、あるいは、何か触るとそれがすごく嫌に感じるとか、そういう知覚過敏、逆に血が出ていても気付いてないみたいな鈍麻とか、そういうものが強くある場合だけをASDと言いましょと。むしろそういう特徴は比較的軽くて、ただ人との関わりが不器用だとか上手くないのは「社会的コミュニケーション障害」と分けましょう、となってきました。だから、概念的にも動いていて、分かりにくいことがあるわけです。いずれにしても人との関わり、あるいは集団との関わりの中で苦労していく、スムーズに参加できないことを持っている一群の聴覚障害の人達がいることは間違いないし、その数は、もしかしたら経験不足も含めてかもしれないけど、聴こえる人達よりも割合としては多いことは間違いないことなわけです。だから、そういう人達にきちんとした支援をしていくことはとても重要です。

■ASDを合併することの困難と発達段階別の支援

適応障害という言葉ですけど、「ある特定の状況や出来事がある人にとってもつらく堪え難く感じられ、そのために、気分や行動面に症状があらわれるもの」と言われています。例えば抑うつな気分。抑うつな気分だと不安感が強くなるため、涙もろくなったり、過剰に心配したり、神経が過敏になったりします。こういうものを適応障害といいます。ASDがあると、ある環境がその人にとってつらいことが分かりにくくなります。「え？こんなことが何でつらいの？」と周りが思うようなことを、本人は「つらい」と受け取っていることが少なくないわけね。だから、支援する側から見た時に、「何でつらくなっているのか」が分かりにくいです。自分の経験に置き換えてということでは分かりにくかったりする。それからもう1つは、本当につらくなっているのに、それを表現する手段を上手に持ってないことですね。言葉が巧みで今自分はこういう気持ちなんだってことをストレートに伝えられればいんだけど、そういうことが苦手だと適切な対応が遅れたり、得られに

くかったりしてくるわけです。

ASDの子達の発達段階においての特徴として、どういうのがあるか。国立の精神研が出しているんですけど、大体2歳くらいまでに、例えば、「共同注意」。共同注意とは、「(紙コップを手で持ち上げながら)これ、紙コップなんですよ」と僕が言ったとしましょう。そしたら皆さんはこの紙コップを見ますよね。僕も紙コップに注目しますよね。こういうふうにあるものに対して注意をお互いに注意を向け合う、こういうことを「共同注意」と言います。そういうことがなかなか得られにくい。それから、アイコンタクトです。目が合わないということがもう2歳くらいまでに起こってきます。それから6歳、小学校に上がる前は関わりを持たせても、人との関わりを維持できない。あるいは関わろうとしないことがはっきりしてきます。それから、非言語的なコミュニケーション手段、簡単にいうと、例えば表情。友達が今嬉しそうにしているとか、ちょっと辛そうにしている。5~6歳になると皆分かるようなものだけど、こういうことがなかなか読み取れないで場違いなことをしてしまうことが起こってくるわけですね。特にここが大事なんですけど、学童期、小学校3年生ぐらいになってくると、自分と他人の違いを感じ始めます。ここは後で丁寧に説明したいと思います。青年期になってくると、同じ仲間と群れる、ある集団の帰属意識ですね。こういうのを持てることは大事なんですけれども、なかなか持てない。そうすると、引きこもりが起りやすくなってきます。引きこもりのピークは、聞こえる青年で今18歳から20歳ぐらいと言われているんですね。またファンタジーの世界に逃げ込むと言うこともあります。自分自身の心の中にもう一つの自己像を求めるんですね。本当は幼稚な思考なのですが、ファンタジーの中では自分は何でもできると。例えばオリンピックに出たら当然金メダルだし、勉強したら東大に行って卒業してみたいな、だからどっちも俺はできるんだみたいなの、ちょっと夢の世界に浸っているわけで、現実から逃避しているわけです。ある種の防衛機制ですよ。自分自身のつらさを押さえ込むための手段じゃないかと言われてはいますが、そういうものが起こってきたりします。

それから女性のASDは、比率的少ないんですけど、女性でASDの人はその困難が一層見えにくい面もあるのですね。例えば、軽い人でも話し合いの中にどう入ればいいのかというそのタイミングが分からないとか、結局何を話せばいいのかが分かんないことが多い。

さっきの小学校3年生ぐらいで自分と他人の差を感じる頃が大事だと言いました。今日ここにいらっしゃる方達は成人の支援をしている人達が多いと思う。成人になってからも支援はもちろん大事です。だけど本当は、より早期からきちんとした環境を作っていくことで、成人になってからの問題を軽減するというか、そういうことが本当はできるはずなんです。そのポイントになるのが3年生、早い子で2年生、遅い子で5年生くらいまでだと思っただけなんです。自分と他の違いを意識し始める時期です。

例えば、ろう学校の中も、皆はもっと楽にコミュニケーションしているのに、自分はどうもそうじゃないらしいぞ、と気づき始める。自分だけができないということをきちんと意識し始める。葉なんか飲んでいて、皆飲んでないんだな、自分だけが飲んでいる、自分だけが違う、と感じ始めるわけです。この時期に結構トラブルが起こってくるんですね。トラブルは、学校への行き渋りだったり、あるいは友達とのケンカが増えたりというようなことですね。この時に、トラブル起こしているから我がままだとか、良くないとか、そういう観点からの関わりばかりになっちゃうと、「本当は違っていいんだよ」と言ってもらえないといけないのに、そういう経験を得られないまま過ごすことになっちゃうわけね。大切な存在として受け入れてもらうという経験がこの時すごく大事です。トラブルを起こしているのは、そういう「訴え」なんだと捉えてもらえるかどうか大事なことなんです。

「目標値を共有できる丁寧な関わり」とスライドの下から2番目に書きましたけど、ASD的な特徴を持っている子は、例えば、テストをするといったら100点、かけっこしたら1番。それがいい、それ以外は全部ダメ、みたいな考えになっていること多いんですね。「それはできればいいけど、そうとばかりもならないよ」というのが当たり前のことですよ。その時に前のテストは60点だったと。今度は70点取ろうね、70点取るということは本当に大変なことだし、すごいことだし、君にとっていいことなんだよ、というようなことを周りの人がちゃんと子どもと共有できて、そして自分自身の目標を100点じゃなくて、70点が自分の目標だとちゃんと置かしてあげると、70点取れるだけで良かったと本人も思えるし、周りも喜べるわけですね。これが90点取っても本人は100点じゃないと「嫌だ」と思っていて、先生だとか周りの人が90点ですごいねと言っても本人の満足は満たされない、っていうふうになっちゃうわけですね。

それからトラブルに関して言うと、信号に例えると赤信号を無視して渡ったというのはダメと使いやすいよね。でも、赤信号でちゃんと止まっているのを褒めるは難しいんですよ。でも、この時大事なのは、「赤信号で止まれたね」と褒めることにある。そういう観点で子ども達に関われるかが大事です。もしかすると、成人になってからも、同じような状況でずっと繰り返してきている人達にとってみると、「今のそのままで大事な存在だ」と伝える。そして、何を目標に頑張ろうかということも共有する。そしてその人にとってみて、その赤信号で止まっている時をすごく評価する。こういう関わりって、本当は小さい時にやって欲しいけど、大人になってからも大事なかなと思うんですよ。それからそういう意味では、周囲への指導ですね。特に子どもだったら、親御さんに向けて、きちんとそういうふうに対応してくださいねと言うのは大事です。ただ、聞こえる子ども達の中で自分だけが聞こえない状態にいると、聞こえにくいことで補聴器をしている違いというのはあるけど、それに加えて発達障害的なところで、周りの友達と自分が違うんだという気付きは遅れるでしょうし、困難をもたらしたりします。気付くべき時期に気付いた方がいいですよ。気付かないままやり過ぎて、問題が大きくなってから気付くというのはあんまり良くない。発達障害に聴覚障害が加わると、例えば、「対人的に物言いがストレート」という問題があった時に、聞こえる子だったら、「それもしかしたらASDの関係があるんじゃないかしら」とみられるところも聞こえない子となると、「コミュニケーションが上手じゃないからね」、ということで発見が遅れる。そうすると何の対策も打たれない。本人は困難にぶつかる、でもサポートはない。やっぱり自分はダメだ、みたいな気持ちになりやすいんですね。そうすると二次的な課題、精神的な問題も起こしやすくなってきます。特に小学校3年生ぐらいの時に、ここ大事なんだけど、トラブルを起こすと、ふざけているとか、真面目にやってないとか、間違えてばかりいるじゃないか、と結局言われることになるわけですね。そうすると自分で自分のことを否定的に捉える気持ちも強くなってきます。「もう自分はダメなんだ、何やっても良くないんだ」みたいな。僕自身の仕事で例えると、何か研究して発表してもこんなダメ、こっちで発表してもダメ、こっちで発表してもダメダメダメと言われてたら、もう研究していてもダメなんだ、みたいな気持ちになりますよね。それと同じです。継続的にそのような状態にあると抑うつ的にだんだんなってくるということです。そうすると、心理的問題としては引きこもりだとか、子どもだったら学校に行かない、あるいは勉強する意欲がなくなるというふうになってきます。また、行動面では、反社会的な乱暴をはたらいてみたり、ゲームに依存してみたりね。そういう依存的な行動に出てきたりもしやすいわけですね。

中学校、高校、特に高校になってくる中で、小学校時代と大分変わってくることもあるわけです。中・高ぐらいになってきた段階で、さっき言った二次的な困難っていうのを併せ持ってくる子達が増えやすいんですね。それはやっぱり発達障害が学習とか集団参加の失敗経験の積み重ねになって

いて、そこに適切なサポートがないために生じると思います。そうすると学習意欲の低下や集団参加の不適応に留まらず、自己肯定感の低下、そしてうつも起こりやすいわけですね。小学校の時は1人の先生がそのクラスを担当しているから、その子の良い面、悪い面、苦手なところ、得意なところ、結構多様に見ることができますけど、中学校、高校になると教科担任制になるでしょ。見立てがバラバラなままになりやすいんですね。学校ではいわゆる支援会議という、「校内委員会」があるんですけど、そういうのに参加させてもらおうと、発達障害の子に対して、国語の先生はクラスで一番ダメだと怒っている。「態度も悪いし、全然、一生懸命勉強してない」と。でも、美術の先生は、「いやいや、クラスの中でこの子一番だよ。ものすごく集中するし上手だし」と言う。どちらが正しいとか間違っているとかじゃないんだけど、1人の子どもの情報を一元的に扱うことが中学校とか高校になってくると、だんだん難しくなってきます。

それから、小学校は聞こえの教室とか、中学校でも数少なくなってくるけど難聴学級がまだありますけど、高校になるとそのような教室はなく、支援する社会資源がほとんどなくなります。小中学校では支援を受けた経験があるのに、高校になるとハシゴを外されたみたいになっちゃうこともあるわけね。教科担任制だし、先生達の、ニーズのある子ども達に対するサポートの温度差も正直言って中学校、高校になると激しいです。すごく熱心で良い先生もいるし、「本当はうちの高校の子じゃないんだよ」みたいな感じで、対応されてしまう子もいたりとかね。

■支援のために知っておきたいASDを合併する聴覚障害例の特徴

支援のために知っておきたいASDの特徴を簡単に整理しておきたいと思います。これは先程から言っているように言語の遅れとか対人的こだわりが見られるわけです。これらは聞こえないだけでも起こりやすいことで、発達障害が見逃され適切な対応が遅れる可能性が高いということです。聴覚障害と発達障害を併せ持っているんじゃないかという時の大原則は、「あの子は発達障害だから」と言うのではなくて、まずは聞こえない人としてきちんと対応することです。聞こえないということに十分対応する。聞こえない人に対して、その人が十分わかる、十分参加できる、そういう環境をきちんと提供する。その上でも、やっぱり困難があるとなった時に、発達障害の観点からそれに対応していく必要があるわけです。聞こえないことへの対応を曖昧にしたまま発達障害のことをダーッとやり始めていても、それは上手くいかないことが少なくないです。

ASDを合併している子達、人達の特徴みたいなことを簡単に説明してきたいと思うんですけど、談話の分析例を見てもらいたいと思います。言語面。手話を使っている、ASDの困難を持つ聴覚障害のA君とB君。両方ともろう学校に行っている小学校5年生です。この子達に絵の状況を説明させる課題をやりました。どういう課題だったかという、1つは4コマ漫画です。コボちゃんがお手伝いでコップを洗っていた。コップを落としたと思ったら、実は糸がついていて、お父さんが滑り込んだけど、「何だ、落ちなかった」というオチのあるユーモアのある話ですね。それからもう1つは、雨の日は、お花に水をあげる必要なのに、雨の日なのに水をあげていておかしいよねという1枚の状況絵です。このA君とB君にどういう特徴があったかという、項目で特徴あったところにマルがついているので、パッと見た感じですね、同じ聴覚障害で手話使っていて、ASDだと言ったって、言語的に表れてくる特徴はちょっと違う、差があるのは見て分かると思います。B君の方はとにかく事実をどんどん羅列していく。内容と関係ないこともいっぱい言っちゃう。それから、絵全体の話じゃなくて部分的な話が多い。例えば、カタツムリのいる花は紫色で、紫色の花の花びらは何枚あって、みたいな。この絵を説明して欲しいという課題に、あんまり関係ない。2人に共通してないのが、擬音語表現です。これは、自閉のある子達は、例えば「ビューンとなってバーン

ってなったんだよ」みたいな、いわゆる擬音語、擬態語で話を終わらせることが結構多いんですよね。でも、そういうのはやっぱりさすが手話の子の場合は、出てこない。ただ、2人が共通するところがあるんですね。1つは動作主、誰がそれやっているかがあんまり出てこない。それからもう1つは、気持ちを表す言葉もほとんど出てこない。例えば滑り込んできたお父さんが「ああホッとしました」とかそういう表現は出てこない。誰がやっているのか、そして、心の状態を表す言葉も少ないのが共通点なんですね。

ASDの子どもの社会性を育てる方法として、ソーシャルスキルトレーニングというのがあり、状況絵を見て考えるという学習があります。例えば、これはソーシャルスキルトレーニングで使う絵の1つですけど、君がどうしているから皆が迷惑しているのかなということ、この状況をちゃんとつかめるか。そして、もし、後ろで怒っているところに君がいたとしたら、この太郎君には何て言ってあげればいいのかなどを勉強していくものなんですね。これを聞こえているASDの子と、聞こえないASDの子にやりました。そうすると、内容の理解についてはあんまり差がないんですね。個人差はあるけどあんまり差がない。聞こえるから、聞こえないからとかあんまり差がない。ただし、この学習を成立させる時間は、聞こえる子達は大体5分ぐらいで終わっているのに、聞こえない子に同じ内容を勉強させようと思うと、9分かかるんです。約4分差が出てくるんですね。何故かという（スライドを示して）時間と語彙力ですね。言葉の力を見てみると、指導時間との間に非常に高い相関が出てきます。言葉の力が弱い子にこういう指導をするのは手間隙がかかるということなんですね。例えば、今やっている学習活動の中でやると、いちいち、言った言葉を言葉にして付箋で貼ったり、確認したり、そういう作業ですね。もちろん手話も使ってということになりますけど。後で話をしますけど、手話は消えちゃう。消えちゃうコミュニケーション方法は、自閉の人にとってみると、ちょっと安心できないところがあります。いつまでもちゃんと書いて残っているものの方が安心できる手段だったりする。そういう意味でも書いて残して確認することが良かったりします。いずれにしても、聴覚障害を合併すると指導の量とか種類ですね。その指導のために多くの手間隙がかかるということは言えると思います。

聴覚障害とASDを合併するとどういうことを考えないといけないかってことなんですけど、単に視覚手段を導入すればいいということではないです。状況の中で最も確実な手段を選択する。これはさっき言ったけど、意外に書くことが有効だったりします。言葉の力からすると、これ難しいだろうということでも書いてあげた方がいい。例えば、ある作業をしていて、ある事にすごく夢中になって次の活動に移れないみたいな時も、「あと5分で」あるいは「あの時計がこうなったら、こちらですよ」というようなことを書いてあげると、比較的スムーズに移れたりとか。あるいはいつまでもこだわって、「ヤダヤダヤダ」と言っているものも、「分かりました、皆もう怒ってないよ」と書いてあげると、それで安心することができたりと。手話で説明していてもね、手話は時間の経過とともに消えちゃうでしょ。そうすると伝わりきれないというか、その子とか、その状況で、どういう方法がいいのかなというのを、いつも考える必要があるんですね。

それからもう1つは、言語イメージの乏しさが一層深刻になることです。聴覚障害の人達の困難の1つが言葉の意味ネットワークとよく言われるんです。話が違いますけど、今人工内耳が小さい子も含めてどんどん増えているでしょ。小さい子で人工内耳している子達は、発音は結構きれいなわけですね。静かな所でなら、おしゃべりも割とスムーズにできたりします。だけど、言葉の課題として大きいのは、この意味ネットワークが乏しいこととよく言われるのね。意味ネットワークとは、例えばどういうのかと言うと、「みずきさんはウサギのように走った」という文章があって、「みずきさん」という友達を知っている。「ウサギ」という動物も知っている。「走る」という言

葉も知っている。だけど、ウサギという言葉からイメージできるのが、「動物」とか、「耳が長い」とか、「ニンジン食べる」とか、「白い」くらいであったとすると、「みずきさんはウサギのように走った」が、ニンジンをかじって走っているのかな、などのような何か変な理解になったりするわけです。「ウサギ」という言葉を聞けば、「飛び跳ねる」とか、「ウサギとカメ」とか、「お月見」とか、いろんな言葉が浮かんでくるようになって初めて、「あ、ピョンピョンとすばしっこく走ったのかな？」というようなイメージになるわけです。聴覚障害があるとういうことがどうしても制限されやすいと言われていています。その上に、自閉症スペクトラムがくつつくことは、例えば相手の顔を見ないわけですよ。そうすると読話は使わない、手話も見ない、なんてことも起こってくるわけです。そもそもアイコンタクトが取れないことが起きるわけね。デフアイコンタクトという言葉がありますが、手話を使う者同士は暗黙のうちに目が合ったらコミュニケーションを始めましょう、目線外したら1回ちょっとコミュニケーションは休憩、終わりだよ、なんていうことが、自然に行われていると言われます。ところが、目が合わない。確かに今、活動をやっている子ども達も、質問したその時答えなくて、横向いて急に手話を始めて、それよく見たらさっきの質問の答えを言っていたりということもあるわけ。とても分かりにくいわけですね。そうすると、言葉が育っていきにくいです。

それから、共同注意ができない。皆この紙コップに注意を向ける、そこに「紙コップ」という音が聞こえたり、「紙コップ」という指文字があったりとか、手話があったりするから、「紙コップ」という名前を覚えられるわけですよ。ところが注意を向けてないわけだから、その言葉なんかも入らない、となってきます。そのことに加えて、状況の理解も悪いわけですよ。そうすると結果的に、多面的に物事をとらえるということが、益々苦手になりやすいということです。多面的にとらえにくいとは、例えばなんだけど、「今日はまっすぐ帰りなさいよ」と言った。「まっすぐ」とは直線のことだから「まっすぐだと家に帰れません」みたいな、冗談で言っているのかと思ったら本当に思っているみたいなことがあったりとか。かき氷という言葉に対して「食べた時頭がキーンとなって、痛かったのかなあ」って、「あ、何か面白いこと言うね」って思っていたら、その子は「かき氷」って言うといつも「頭痛い」と手話をする。「かき氷頭痛い」というふうに。なぜかというと「かき氷」と「頭痛い」が1つの単語になっているわけです。そうすると、それは、「かき氷」という言葉は、例えば「夏」という言葉と結びついたり、「シロップ」という言葉があったりとか、「冷たい」とかいろんなイメージあるのに、「頭痛い」という、食べて頭痛かったという自分のイメージ、自分の経験からのイメージだけにこだわっていることになったりするわけね。

そして、もっと言うと人に対しても、一面的な見方が強く出やすいです。割と自閉の子達は、機械的な記憶が強かったりします。知的に高い自閉の人達は、機械的記憶は強い。例えば、カレンダーを覚えておくとか、電車の名前を覚えるとか、そういうことについては、通常の人なんかよりもむしろ優秀だったりすることがよくある。そうすると、例えば一度怒られた経験をずっと覚えている。例えば先生が注意した、そのことが自分としては納得できなくて、すごく嫌だったという経験があるとすると。その先生は、その時は怒ったけど、別の時はすごく楽しかったり、人っているいろんな側面があるはずですよ。ところがもうその先生が来ると、「ヤダ！」と言って不適応行動を起こしてしまうことがずっと続きやすいことがあるんです。これは本当にあります。

今、聴覚障害でASDの子達は、ろう学校へ1人での通学は大変なので、送り迎えのヘルパーさんが付く場合があります。ヘルパーさんも悪からずやってくれていると思うんだけど、何かちょっとした時に、ちょっと注意したりすると、もうそのヘルパーさんの時は毎回毎回帰り道でパニック起こしちゃったり、別の人だったら良かったり、そういうことは起こりやすいです。だから、注意だ

とか、抑制をかけるということで、あるいは、良かれと思って関わったことが対象となる人に大きなトラウマになってないか？、自分自身の評価として一面的になってないか？ということには、注意しておく必要があるんですね。そうしないと、その子と次にスムーズに関わりが持てるようになるのにとっても時間がかかったり、苦勞したりすることになってしまいます。

ASDへの支援の特徴は、スケジュールの変更が苦手なことです。スライドは手順表の例です。これはよく言われることですが、見て分かりやすいこと。聞こえるASDの子も含めて、スケジュールは大事にしようってことですね。予定を変更したりするのは苦手です。それから、例えば勉強する場所、着替える場所と区別して構造化してあげる。そうすると分かりやすい。それから指示なんかも具体的にすることが大事です。「ちょっとこの辺で待っていて」とよく言うでしょ。今僕が「あー、忘れ物をした」。それで「ちょっと、この辺で待っていてくださいね」と言われれば、皆さんは多分そのまま座ってればいいんだと理解する。「ここ」というのは座ってればいい、それから「ちょっと」というのも、「10秒とか20秒待ってればいいんだ」と判断するでしょ。ところが状況判断があまり上手くないわけだから、例えばここの事務から「濱田先生、なんか家から大変なことが起こったみたいですよ」と呼ばれた時に僕が「ちょっと待っていてね」と言ったら、椅子に座ってなくていいよね。多分、この部屋の近くにいればいいし、もしかしたら呼ばれて戻ってくるのは5分ぐらいかかるかも分からない、というように、同じ台詞でも意味するところは状況によって変わる言い方ですね。こういう言い方はASDのある人にはわかりにくいんですね。「この椅子で1分間待っていてください」というように具体的に言ってあげた方が安心して待てます。安心できるやり方ですね。それから、できるだけ肯定的な表現ですね。「落ち着きがないね」よりは、「元気だね」と言ってあげた方がいいです。

それから特徴の6番目ですけど、「感覚過敏がある」と「知覚過敏がある」。これについては丁寧にみてあげる必要がありますね。それは、自分から訴えることが上手じゃなかったりするからです。もう少し詳しくみると、対人関係やコミュニケーションにおいては、自分の気持ちを表現するのが苦手なんですね。さっきの4コマ漫画を説明させても、気持ちを表す言葉なんかほとんど出てこない。相手の気持ちになって考える、これも難しい。具体的な経験を積み重ねることで、コミュニケーション能力が育ち、自信を回復するわけです。だけど、逆に失敗とか叱責を受けることを繰り返すとトラウマになっちゃうわけですよ。

それから、こだわりの部分については、こだわりをなくすことは、なかなか難しいです。だけど、現実可能なところに目標値を置いておくみたいなことを、一緒にやっていくことが大事なんですね。「何々は止めなさい」よりは、別の活動「これをこだけ頑張りようね」というようなスケジュールをきちっと守らせるような形で、ある時間の過ごし方を提案していく。この方が「止めなさい」と言うよりも有効だったりする場合があります。それから急なスケジュールの変更はやっぱり苦手ですね。できるだけ予告しておくことなんかやっぱり大事です。丁寧な説明ですね。皆さんも今申し上げたことはたぶんされているかと思うんですけど、こういう中で当事者自身が、今日は予定が変更になった、楽しみにしていたのがダメになった時に「まあ仕方ないか」とか、「まあいっか」と言い出したら、これは大きな成長の証なんですね。もう大喜びですね。だから、「仕方ないね」とか「ま、いっか」とかこっちからもどんどん言って、そういう言葉を引き出せるようにするといいですよ。

それから、知覚の異常に関してですけど、特定の音とか味とか食感だとかに敏感だということですよ。偏食、好き嫌いなんていうのも激しいです。シイタケなんかキノコ類は嫌いだ、口の中でクニャクニャしているものは嫌いだっていうような子が多いかなと思います。あと、手触りなんか

で土が触れない子もいるし、着る服によってはヤダという人もいますね。某社の冬着のヒット商品だけは着られないという人もいます。だから通常感覚からは分かりにくいわけです。さっき、適応障害のことを、ある状況がある人にとって非常に辛い状態だと言いました。冬着を着てつらいと皆がなるなら、そだよねとなるんだけど、「(通常は快適なのに)何がつらいの？」という話になるわけです。そのことを言葉で説明できなかつたりすると、今日は寒いから「この冬着を着てくといいわよ」と言っちゃったりするわけなんですよ。過敏症が強い時は、当面それを避ける。これ鉄則ですね。とにかく、過敏症みたいなことについては、本人の声を丁寧に聞いてみるのが大事です。食べ物も、こういうものを食べたらどうだ、というようなことをその人その人が言える範囲でいいので。あるいは、こういうのを触るとどうか、服はどうか、とかそういう感覚的なものについて、上手に聞き出しておいて支援に繋がるといいなと思いますね。それを知らないでやっていると、本人は非常に不愉快だったりつらかったりということがどうしても出やすいわけですね。

それから、もう1つ支援の中で大事なことは、障害認識です。今日、僕が取り上げている人達の多くは、知的には遅れがないわけですね。そうすると、自分の困難について向き合うこともさせてく必要がある。向き合うために大事なことは何かというと、保護者の障害受容ですね。ここでは障害認識ではなくて障害受容と言っていますけど、ほとんどの親御さんが元々は自分の子どもに発達障害なんてあるとは思ってなかったわけですね。発達障害がないと思っていた子どもだったのが、発達障害がある子どもだと受け止めてかないといけないわけだから、これは、ある意味中途障害のような「渡り」を経験するわけですね。気持ち的な「渡り」を経験するので、この場合は障害受容という言葉が当てはまりやすいかと思います。保護者の障害受容をきちんと支援していくことが大事です。大人の方だったら、親御さんばかりじゃなくて、兄弟だとか、結婚されていたら奥さんだとかそういう人達も対象に含めて支えていくのが大事だと思います。

ASDは、成長と共にその特徴が目立たなくなることはありますが、完全に治るというものでもないですよ。だから、障害認識ができると、適切な支援も得られやすいですね。また本人もそういうものを自分が持っているんだということを、自分が意識できていた方がよく分かんないところで「融通が利かない」とか何とか言われちゃうよりも、自分はそういう特徴があるからというのを知っていることで、自分自身が楽になるということもあります。そういうことを進めていくためには、自分自身がASDであっても自分らしくてそれでいいんだというふうに思えるためには、それを認識してないと。「こういうのは苦手なんですよ」とか、「こういうのが嫌なんだ」とちゃんと伝えられれば、トラブルは減っていくわけですね。ところが、親御さんが障害受容できなくて現実を認めてない、あるいは誤解した関わり方をしていると、自分自身がそのままいいっていう気持ちにはどうしてもなれないので、トラブルの起こし方が反社会的であったり、あるいは自分自身がひたすら我慢して、みたいな形になりやすいわけですね。困っていることを困っていると言えないわけです。だから、やっぱり親御さんとしては、「障害があってもお母さんはあなたを愛しているわよ」ということをちゃんと伝えてくことはいつもいつも大事です。

この間、黒柳徹子さんがインタビューを受けているのを聞いていて、なるほどそうなんだなと思ったんですが。黒柳徹子さんも、ちょっと変わった人ですよ。徹子の部屋が1万回になり、「今度、1万5千回目目指す」って言っていましたが。あの人は、公立小学校に行つてすぐ、「うち来なくていいから」と言われて、トモエ学園という私立の学校に移るわけね。トモエ学園の校長先生から「本当は、君はいい子なんだよ」といつも言われていた。なので、自分自身はずっと「自分はいい子なんだ」と思い込んで過ごしていたそうです。だけど、今思うと「本当は」という言葉が頭に付いていたわけだから結構やらかしてたんだなと思う時もあるそうです。だけど、「『それでい

いんだよ』『あなたはいいい子なんだよ』といつも言われていたから、私は今、こうやっつけられるんだ」とおっしゃっていました。きちんとそのまま大事な存在なんだよということを伝えることがすごく大事です。保護者にも、そういう認識をすることのメリットをきちんと伝えていくことですね。そのためには、やっぱり「家族」は距離が近い。いつも居るから、もう家族も疲れちゃうという状況が多いわけですよ。そういう中では、周りの支援する人なんかは、「先週と比べてこういうことができましたね」とか、「こういうことを我慢できてすごく良かったですよ」とかほんの些細なことでもいいから、どんどん家族に伝えて、家族を元気づけていくことも大事なかなって思います。

■学習活動「ダンボ」の経験から

聴覚障害と発達障害を併せ持っている子達のための「ダンボ」という学習活動をやっています。何で「ダンボ」かという、ダンボってディズニー映画に出てくる象のキャラクターのことで、耳がでかいんですね。耳が大きいから、本人もお母さんもとて悲しい気持ちになるわけです。けど、ダンボの耳が大きいことは実は特徴で、後々はそれで空を飛べたり、皆と違うところがあるからある意味ヒーローになれたというか、いい面もあったわけです。だから、発達障害を持っていることは1つの特徴だし、「それは決して悪いもんじゃなくて、ゾウのダンボの耳と同じで、そのままでもいいんだ」と思って欲しいなと。それで「ダンボ」と名付けて活動をやっているんですね。

先程のソーシャルスキルトレーニングの話ですけれど、実は視覚的な情報が多すぎると、逆にこだわりにつながる場合があります。「聞こえないから視覚的にわかるように」というのは当然のことですよね。ただ、ASDがあると、聞こえている人でも聴覚的入力よりも視覚的情報がより強く入ってくるとよく言われます。個人差はありますよ。だから、皆が皆ってわけではないですが……。1つ失敗例を紹介したいと思うんですが、自閉が重くて、なかなかコミュニケーション、すなわち言葉のキャッチボールができにくい子がいました。その子と何らか話をするために、その前の週にどういった経験をしてきたかを、お母さんからファックスをもらって、それで教材作ったりしてやっていました。その時は丁度学校も遠足で動物園に出かけた週でした。そしたら、「ゾウに興味があって、長い時間前に立ってゾウを見ていた」とお母さんからファックスがきました。それでどうしたかという、折り紙で動物園を作って、ここをこういうふうに通ったとか視覚的にわかるように話をしながら、その遠足の話を引き出そうとしたんですね。ちょうど、折り紙のゾウの所で「ゾウさんどうだったの？」と聞いたんです。そしたらその子は、折り紙のゾウの話しかしないんです。これは視覚的な情報が強すぎるわけです。別に折り紙なんか作らなくてよかったわけです。どれぐらいの情報が一番適切なのか。むしろ視覚的情報の強さをどう引いていくかということなんかも結構大事なことなんですね。

それから、さっき1個ソーシャルスキルの絵を見せましたけど、絵なんかもある部分だけにこだわって全体を見ないことなんか起きやすいんですね。電車の中で、つり革につかまって暴れている子の絵ですけど、この真ん中の子に対して、「こいつ悪魔だ～！悪魔悪魔～」と言い始めて、本当は登場人物の対応を考えさせたいのに、なかなかできなくなります。「ここはどこなの？これは何？」と言うと、「これドア」「ガラス」「新聞紙」とかそういうことばかりになっちゃって、結局やりたい活動に繋がっていかない。それで、最近はどうしているかという、中心テーマは見せないようにして、むしろ周りをしっかり見せて、その後、「じゃあここに皆が見ているけど何があるのかな？」というふうに見せたりという工夫をしたりします。

また、登場人物が多いものなんかもピースに分けて、ピースをまず見て、それを合わせて、じゃあ、全体でどうなんだろうという見せ方をしています。だから、上手に見せると分かるけど、これ

で分かるだろうと思って見せていると、こちらが意図しているところとは全然違うところにこだわって、見ていても理解していないことがあるんですね。本人はそれで理解していると思っているのに、周りの人の理解は違っていたということがあります。するとまたつらい思いをする。そういうことが本当に起こりやすいですね。

気持ちを表す言葉がなかなか出ないというのがありましたけど、気持ちを表すのも、ゼロかイチかみたいな、怒っていないか怒っている、嬉しくないか嬉しいという感じになってしまいます。気持ちというのは、本当は中間があるわけですよ。その中間のどこら辺かっていうことを判断しながら、相手との関わりを作るわけですよ。それで、色々な状況を提示して、それは自分が怒っているとしたら1のレベルかな、5のレベルかな、と考えさせながら、気持ちには中間があることを教えるわけです。中間に応じて、その時に例えばレベル2だったら、その時どうすればいいのかとなるので、仕方がないと言いましょ。3とか4なら、何で嫌なのかを先生にちゃんと嫌だと言いましょ。怒りなら怒りの程度のどこら辺なのかを自分自身がきちんと判断できるようにして、判断した時にはどういうふうに行動したらいいかというのでも示してあげると、知識として、行動が少しずつできるようになってきます。怒っていることは分かっても、どの程度かが適切に判断できないと、他人に対しても表情では理解しにくい。自身の気持ちも全か無かになりやすい。気持ちの程度を自己モニターして、その状況に応じる振る舞いを知識として学ぶ、知識として判断していくように指導していくわけです。

「朝、人に会ったら『おはよう』って言うんだよ」というルールを伝えた。これだけだと誰彼なしに「おはよう」と言ってしまうわけです。誰におはようと言うのかについて指導する1つの方法ですけど、「パーソナルスペース」があります。自分と距離が近い人、どういう人いるのかな、お父さんとかお母さんとか、兄弟、親友のAちゃんとか。あるいは、もうちょっと外だと先生とか、他のクラスメイトとか。その外には会ったことない人、バスの運転手さんとかいうような人がいるわけですよ。こういうものを整理しておいて、一番真ん中の四角のところは「おはよう」でいいよ。ピンクのところは「おはようございます」と言おうね。一番外の所は挨拶しなくていい。そういうふうにご指導してあげると、誰に何を言えばいいのかということも、知識として整理できるわけです。「こんなこと言わなくても分かるでしょ」というものがやはり分かりにくいのです。

ちょっとはしりますけど、事例のA君を紹介しましょう。ろう学校の小学部4年生で知的には遅れがないです。だけど、アスペルガーと診断を受けていました。興味とか知識の偏りが強く、冗談とか比喩が通じない、共感性が乏しい、なんていうのがあるんです。非常に視覚的に分かりやすいような教材を作りながら、動画教材なんかも作りながら、どういう場面にはどういう立ち振る舞いをしていく必要があるのかを学ばせていくと、割とこれが積み上がっていくわけですね。小学校卒業の時どうだったかという、些細な気持ちで前はすごく友達とケンカする。負けるのは嫌だから、前はケガさせちゃうことが多かったんですけど、今は少ない。状況を言葉にすることで正しく理解できるようになってきた。知識として心情の理解もできるようになってきたわけです。ただ、現在でも必ずしも正解がないような状況で、他人の意見を受け入れることにはまだ課題があるんですけど、大分問題自体は低減してきたんですね。今までのダンボの活動でやっていると、IQそのものが90ぐらい、標準値ぐらいの子達は、小学校を終える時にはきちんと関わりをしていくと問題行動自体は減ってきます。どういう時にどう振る舞えばいいのかの学習が積み上がってくるから、そうなりやすいですね。

もう1人、これはろう学校の高等部の子です。ダンボに通っていた子ではないのですが、対人関係を築くのが苦手、自分より弱いものに突然暴力が出るんですね。突然というの、本人とした

ら何か理由があるんでしょうけど、何で暴力が出ちゃうのかよく分からないんですね。学校も、被害者の親御さんの意向もあって、他の子と隔離をして反省文を書かせたりとか、そういう対応ばかりしていたんですね。でも、今まで話をしてきた通り、それだと効果が出ないわけですよ。そこでジョブコーチを入れての支援会議をしました。高等部2年生で、もう実習が始まって、高等部を出たら就職ですよ。この子の課題は学校の中でもあるけれど、社会に出てからどうするかということです。在校時からジョブコーチの人に来てもらって、ソーシャルワーカーで且つジョブコーチの資格も持っている人でしたけど、職場の中での対人関係の調整を期待するということですね。今ジョブコーチというとほとんど発達障害と精神障害のジョブコーチが多いんですね。ところが、聴覚障害者を対象としたジョブコーチはとても少ないんですね。本当は就労の問題なんか考えると、地域の障害者就労支援センターが頑張ることになっているんだけど、そこに、手話のできる人がいるかと言ったら、ほとんどいないのが現状です。だから、状況自体を打開していくためには、課題があるならば、地域の障害者就労支援センターを活用して、そこにいる職員を育てていくことも今後大事なことかなと思います。B君の場合は、仕事を覚えるというよりも、通常通りで流れなくなった時の不適應について周りの人にちゃんと理解してもらって、「こういうふうに対応すればB君は大丈夫ですから」ということをちゃんと知ってもらう。その橋渡しを、ジョブコーチにしてもらいたいということですね。そのためにはジョブコーチさん自身に、B君のことをよく知ってもらう必要があるんで、在校時からちょっと関わってもらうことが理想かなと思っています。

■なぜ発達障害の割合が高く出るのか

これは簡単にですけど、なんで聴覚障害の人で発達障害の人が多いんだろうということですね。発達障害っていうのは、ある意味個性みたいなもんですよ。ある閾値を超えなければ読み書きの困難があったって、「登場人物の気持ちが読めるしいいよね」と言われたり、多動も度を超さなかったら「元気だね」とか、「何でも興味を持っていいね」と言われたりとか。こだわりも度を超さなかったら、「興味を持つことはいいことだ」なんて人に言われたりするわけです。ところが、それが顕在化すると、LDだとかADHDだとか自閉症だなんて言われちゃうわけですね。これが、聞こえる子どもの場合は大体6.5%くらいです。聞こえない人の場合どうだろうということなんだけど、さっき、サイトメガロウイルス感染のことを言いましたけれど、聞こえ、例えば両親が聞こえていて、聞こえない子どもが生まれてくるのは、神経系に何らかのリスクを負っている、プラスαの可能性は、そうではないグループに比べると確率としてはちょっと高くなるだろう、ということはあると思うんですね。だけど、もっと大事なのは、聴覚障害があるとその問題について適切な対応を受けることがなかなかできなくて、そのために、この閾値そのものが下がってしまい、顕在化しやすい。だから34%ぐらいと1/3ぐらいだなんて出やすいのかと思ったりもします。多様で適切な関わりをしていくことで、発達障害がある子達も問題を軽減させていきます。適切な対応があるかどうか、これがとても大事ですね。極端なこと言うと、聞こえないというだけで、店で万引きしても店員に怒られないんです。ろう学校の子達が店で万引きした。そしたら、聞こえる子だったら絶対店の人怒るのに、怒らない。1回目はもしかしたら許すかもしれない。2回目となると、すぐ警察です。だから警察沙汰になる。実際にあった話ですけど、警察に行ってみたら警察の人も、ろう学校の先生とか親御さんが来るまでラーメン食べさせて待っていたというんです。本当は叱るべき人がきちんと叱る、関わるべき人が関わるということが、子どもが社会性を持って成長していく時にとても大事なことになるのに、そういうものが得られにくいことがあるわけです。問題行動はいろいろあるでしょうけれど、問題行動が出るってことは、SOSの表現なんだと捉えることですね。その

問題を押しえつけてなしにするっていうことがいいんじゃないなくて、トラブルが起こっていることは、SOSの表現手段として出ているんだと周りの人が見ることで、きっと変わってくると思います。認知発達だけでなく気持ちの面でも寄り添っていく、当然のことですね。困難を吐き出させられる関係とコミュニケーション方法の確立、これも大事です。そして、やっぱり情動とか、その覚醒、起きてられるかということになってくると、これはお医者さんと薬も含めての連携は大事にして欲しいなと思います。

聴覚障害との合併事例ではないけれども、聞こえる自閉症の人達が自分はどう感じていると手記にしているものが今いっぱい出ているんですね。こういうものを是非読んでいただいて、当事者の声に耳を傾けてもらおうと、関わり方のヒントが沢山得られるかなと思います。

■質疑応答

質問者／お話ありがとうございました。とても勉強させていただきましたが、ろう学校の中で聴覚障害がある子どもが発達障害を持っている時には、先生の今のようなお話の対応で、発達障害に対する支援も教育もしてくださっていると理解して、それが全国的なことなのかどうか。もう1つは、聴覚障害があっても一般学校で勉強しているお子さんに発達障害があった時には、現実的にはどのような状況であるのかをお伺いしたいと思います。

濱田／ご質問ありがとうございました。僕はたまたま「ダンボ」の活動をやっていて、今年10年目なんですけど、そういう活動を全国のろう学校でやるまでには至っていません。ただ、先程挙げたろう学校の全国調査で、各学校、発達障害の問題を課題として取り上げ、課題として認識しているかという問に対しては、2007年の時には9割の学校から返答があって、その中の3/4ぐらいの学校が発達障害を重要な課題と認識していました。また、6割ぐらいの学校がそれについて、校内研修だとかあるいは外部の専門家を呼んで研修を始めていると回答でした。これが2012年になると、ほとんどの学校が発達障害の問題は重い課題だと認識し、それについて研修などを始めている、あるいは今後始めたい、という回答になりました。認識は進んでいるし、取り組みも始まっていると思うんですね。ただ、子どもの状態は非常にまちまちだし、今日は結構簡単に流していきまされたけど、本当の意味で、例えばASDならASDの方のコミュニケーション、それを引き出す関係作りは、とてもスキルが求められることなんですよ。どこでもできていると言われると、まだ途上期かなと思います。

それから、通常の学校の場合には、例えば情緒の通級があったりとか、いろいろな専門家チームがその学校だとかその地域で組みやすい所なんかは、関わってもらって、いい取り組みしている所もあります。ただ、残念ながら多くの場合は、聴覚障害の問題なのか、発達障害の問題なのかという辺りも曖昧なままでやり過ごされている事例も少なくないかなと思っています。

難聴学級と通級指導教室の場合は、全国規模で束ねることが難しいので、地域の差が非常に激しいんですけど、なされてない所は本当に気の毒なことになっている事例もあったと思います。

質問者／お話ありがとうございました。私は仕事でジョブコーチの仕事をしております。本当に、お話の中にあつた通り、ジョブコーチの中で手話ができるというメンバーはほぼいません。実際、私も聞きたいことがいっぱいあって、何を聞こうかなと思ってしまうぐらいなんですけれども、今まで関わられたお子さんが、これから社会に出たら、当然社会に出てからの時間の方が長いわけですよ。今まで関わられた方達がどういったお仕事をされているのかということと、後は、お仕事を

される中で、会社の中でこういった課題や問題が出やすいかということ。聴覚障害と発達障害を併せ持った方は、こういった問題が起こりやすいかということ、どんなフォローをするべきかということですね。ご本人ではやはり限界があって、実際は企業がフォローをするべきかという中で、企業側も環境を作らなくてはならないといけないとは思いますが、こういったところを企業側に求めるのか、主にその3点ですね、お教えいただければと思います。

濱田／先程「ダンボ」っていう取り組みはもう10年目だと話をしましたけれど、まだ就職まで至ってる年齢の子達はそれほど多くはないですね。何人かの例でいうと、知的に高くてASDタイプの子達は意外かもしれませんが大学に行っている子が何人かいます。今、大学生。それから、就職している子は、スーパーマーケットで就職している子がいます。特に大きな問題はなかったんですね。ただ、ここからは僕の想定の話になりますけれど、もうちょっと先々、ダンボの卒業生、三十何人いるんですけど、その子達が今度社会に出たという時に、親と一緒に暮らしている範囲では、かなり落ち着いた暮らしができると思います。けれど、今後親御さんが高齢化してとか、あるいは本来だったら自分達で結婚して独立してということ考えた時にやっぱり一人暮らしできるような、発達障害を持っている子達が安心して暮らせられるような、本当はグループホームとか、そういうのを作りたいなと思っているんですね。ルーチンで動いている時にはそれほどトラブルことは、ダンボの卒業生の場合にはあんまりないです。ただ、世の中には思ってもないことが起こってくるわけですよ。そういう時への対応は、やっぱり1人で対応していくのはなかなか難しいと。そこできちんと、生活の中で支援してくれる人が身近にいると一人暮らしもできるであろうし、より自分のなりたい自分に近づけるかな、と思っているんですね。会社の方とか、場合によっては先程の質問に続くけど通常の学級、あるいは、そういう方とあまり接したことがない方々も含めてなんだけど、聴覚障害と発達障害があると、その困難ってケアしてない状態だと重篤に表れるんですよ。そうすると、見た目は非常に能力が低く見えちゃいます。でも実際にはいっぱいできることがある。だから、先生方もそうだし、企業の方達もそうなんだけど、まず「できる人」として見て欲しい。そういう立場に立てば、じゃあどうすればできるかなというように、きっと見方も変わってくると思うんです。見た目で、この子はできないわ、無理だわ、とならないようにして欲しい。ただし、特に企業なんかは、収益上げないといけない中で、ジョブコーチさんはその間に入ってということでしょうから、やっぱりどういうふうにすればこの子の場合できるかというところを見せられる情報を、就職までにいっぱい持っていて欲しいと思うんですね。そのためには学校にいる時から関わってもらえるといいかと思います。そうしないと、同じ聴覚障害で発達障害があると言ったって、聴覚障害そのものも非常に多様性があるし、その上で発達障害の多様性もとなると、結局一人一人随分課題となることも様子も違う。支援するAさんならAさんのことをジョブコーチさんが十分知ってもらってことが大事かなと思っています。

【ミニレクチャー】

「成人聴覚障害者の適応障害・発達障害に向きあって 心理的支援の実践をもとに」

甲斐 更紗

九州大学基幹教育院 キャンパスライフ・健康支援センター 特任助教

臨床心理士・精神保健福祉士

業績・経歴等

2008年 兵庫教育大学大学院博士課程修了。臨床心理士，精神保健福祉士，Ph.D.

主な業績に共著「聴覚障害者心理臨床2」など。

兵庫県立神戸ろう学校・姫路ろう学校のスクールカウンセリング、兵庫県立聴覚障害者情報センター心理士の臨床を経て現職へ。

(スライド3) 簡単に自己紹介します。私は生まれつき聞こえません。ろう・難聴の方を専門に支援してきました。その経験をもとに九州大学に入職しました。今の仕事について。皆さんもご存知かと思いますが、平成28年度に障害者差別解消法がスタートします。合理的配慮ということが大事なポイントになっています。国立大学は合理的配慮提供が法的義務化になります。それに向けて、大学のほうでも障害学生の学びに対して、例えば、発達障害の学生達の教育を受ける権利、教育をどのように受けたらいいのか。また、内部障害、難病などの学生、視覚障害の学生などに対してきちんと学びの保障を提供する。そのような配慮を的確に行うために正確にアセスメントをすること、そして支援をどのように進めるか計画をすること。私はそのような仕事をしています。私は臨床心理士という資格を持っています。その資格を生かして、今まで聴覚障害者の方達の支援をしていますが、いろいろな誤解が起きています。臨床心理学とかソーシャルワークとは何かとか、なかなか理解が広まらない、曖昧な状態になっています。今日は改めてご説明したいと思います。

(スライド4) 基本的に臨床心理的支援とは、臨床心理学という専門の学問を使って、アセスメントし支援をするという領域です。ろう・難聴者に対して支援をする時に、心理的な面だけを見るといろいろな限界があります。社会との関わりを考えながら、支援をしていかなければいけません。臨床心理士という立場で、社会資源に繋げる。クライアントの生活面をみて、いろいろと調整をしていくということも含めていかなければなりません。1人のクライアントに対して、何らかの問題があったとして、心理学的な知識を使っての支援が必要だったり、また、社会的支援、ソーシャルワーク的な支援が必要だったりします。また、場合によっては他のソーシャルワーカーや別の専門家に繋げることもあります。私の立場では、そのような判断や使い分けをします。なお、私一人が1人のクライアントに対して心理的支援、ソーシャルワーク的支援の両方を兼ねて行うことはありませんので、そのことはご理解いただければと思います。

さて、こちらのスライドをご覧ください。これは「難聴の子ども、大人、親が難聴者である家族（難聴児・者）」、「聞こえる家族」には、心理的な支援が必要な傾向にあり、スライドの右側に位置する「ろうの子どもや大人、親がろう者である家族（ろう児・者）」は、ソーシャルワーク的支援が必要な傾向があるという、私のこれまでの経験を元にした図です。

(スライド5) 支援の状況ですが、三角形で示している一番底辺のところ、地域に対してのアプローチですね。それからその上、「グループ」とあります。ひとつの施設の中にもいくつかのグループがあり、学校の中にもグループがありますね。そのようなグループ、集団に対してのアプローチです。それから、一番上はグループに入ることは難しい、個人的な対応が必要だという

場合の、個人レベルでの支援ということになります。このような3段階に分けて支援をしています。時間がもったいないので、次に進みます。

(スライド6, 7) 2番目のアセスメントと支援というところでは、私が今まで対応してきたろう者、難聴の子ども達、また、大人も含めていろいろと支援をしてきましたが、疑問に思うこともいくつかありましたので、お話ししたいと思います。これはどういうことかと申しますと、皆さん、同じ経験をされたと思いますが、私が対応したろう者の子ども達の例です。最初と最後の結果の2つだけわかる、けれどもプロセス、経過がわからないということがあります。例えば、ろう者が聴者である親と話をする場合、



聞こえる親は手話が使えませんからコミュニケーションが上手くとれません。家族の中でコミュニケーションがとれないままになってしまう。旅行に行くことはわかるけれども、何を持っていくのか、どうやって行くのか、場所はどこなのかわからないまま、ただその子は付いて行くだけで、行って見て「ここだったのか」と結果がわかる。その間のプロセスがわからない、最初と最後しかわからない、そのような苦しい面が起こってくるわけです。結果だけがわかればいいということではないと思います。そのような疑問が呈されました。最初と結果だけが分かり、プロセスがわからない、それをどのようにしたらいいでしょうか。自分だけがわからないという状況に、怒りの感情がこみあげてくるわけですね。本当にそういう状況が多いわけですね。いつもは言われるままに付いていっただけ、自分でわかる、自分の気持ちを伝えるという経験が少ないですね。はじめと結果だけが分かる、その間にいろいろと話をすることが大切なわけです。大切な話が伝わってこない。その間にいろいろな意味があるってことがわかっていない。主体性がないという状態ですね。

(スライド8) これらのことは、聴者、ろう者、難聴者も、成長の過程でとても大事なことです。子どもの時は親に大切に育てられます。親に頼ることができます。そのような気持ちを持っていることが大事ですね。例えば幼児期になって、一人でトイレに行く、わがままを言うなど、自分でやりたいという気持ちが芽生えてきます。そのような時はみんな同じ状態ではありません。いろいろな問題、感情が起きてくる。自分でやりたい、これをしたいという気持ちが起こることは大事なことです。それから小学校に入学する前後の課題ですが、勉強をする、また、勉強をしていろいろと褒めてもらう。そして成功する体験、勉強しなくては駄目だよと言われてしまう経験。学校に入る前後、勉強するというのはどういうことなのか、なぜ勉強が必要なのか、そういうことを考えることも大切です。それから思春期ですが、聞こえない子の場合にはろうの大人と会うということ。この人みたいになりたいなという気持ちが起こる。聞こえる聞こえないということとは関係なく、親の姿を見て、親のようにやってみたい、親のようにになりたい、また親と違う、自分はこうしたいと思う。そういうのがなければ、いつも親の真似をして親に付いて行くだけになってしまう。聞こえない人の場合は、聞こえる親を見て、こんな風にはなれないな、自分とは違うなどはっきり気付くこともいずれ大事になってきます。そのように成長する過程で結婚等もありますが、結婚して次は家庭を作る。また、そこでの課題もあります。また、年を重ねていけばそれなりにいろいろなそれまでの人生の中での経験、次どうしていくか、子ども達に何を残していくかなど、その時その時の課題があります。

その過程の中でコミュニケーションが上手くとれていないと主体性のない自分、自分は言われ

るがままにそのとおりにする、そのとおりに動くだけになってしまいます。自分の考え方を確立して動くということが、ほとんどないという状況が起こってきます。そのような人達との関わりを支援してきました。

(スライド9, 10) 次ですが、発達障害ではないかという話です。話し合いをしている中で、自分自身のことを聞くと、忘れてしまったとか、わからないとか、きちんと順序立てて話をするができないなどがありました。いつ起こった話なのか聞くと、時間軸がなく時間の経過がわからない、昨日のように話されても実際には7年前の話だったとか、起こったことの前かがわからないというようなエピソードがあります。きちんと時間の経過が時系列に沿って話すことが難しい。難聴の子ども達は難しいことが多いです。先程、濱田先生のお話にもあったように一つの絵を一緒に見て、物語を作ってみるということが全くできない。絵を見ても全く絵の内容と関係ない話になってしまうこともあります。普通であれば、次はこのような結果になるのではないかとある程度の想像はできると思いますが、次はどうなっていくのかという想定ができない。時間的に順序立てた理解、認識がなかなか上手くできないという面があります。

(スライド11, 12) そのような問題に対応する中でいろいろな疑問がありました。その中で私が気付いたことなのですが、話を聞いてもわからないまま終わってしまうということをしつかりとアセスメントする、そしてどのように支援したらよいか方法を考える必要があるということです。ろう、難聴の大人を対象とする場合には、必ず、福祉制度に繋げる、公的なサービスは何があるのか、病院に繋がったほうがいいのか、社会との関わりを考える必要があります。暮らしている地域の制度はどのようなものがあるのか、公的な支援はどのようなものがあるのか。そういうものをきちんと調べて繋げていく必要があります。公的な仕組み、制度も大事です。よく「発達障害ではないのか」と言われるのですが、そこで障害の根拠は何かというのは置いておきまして、必要な支援は何か、求められるニーズは何か、というものをきちんと考えなければなりません。こういうニーズがあるから、このような支援が必要である、きちんとそのニーズを見ることが必要です。日常生活にも困ったことがあります。その困ったことはなんなのか。皆さんこのように生活したいという気持ちは持っていますよね。そのような生活のために何が必要なのか、きちんとアセスメントすることが必要です。特に多いのはアセスメントをやったら、結果がわかったから支援をした、それで終わり、ということが多いですね。そうではないんです。支援をしながら、この支援方法は合うのか、別の方法がいいのではないのか、という支援の内容に関してもアセスメントが必要なわけですね。それが大事なんです。支援の効果があるのかどうか、その有効性を評価していくことが大事です。そのためには特性の理解が大事です。相談に来る聞こえない子どもだけでなく大人も来ます。その人達に対して、特性は何なのか、いい面とは何なのか、また、問題点は何なのか、困っていることは何なのかをきちんと理解することが大切です。

次に事例1と事例2について話します。

(スライド13, 14) 事例1について、発達障害の話は置いておきまして、最終的には適応障害という判断を病院にしてもらったらしい例です。この方は全聾です。年齢は20代後半です。もうすぐ30歳になるような人です。デフファミリーで、手話で育ってきた人です。状況が悪くなったきっかけは異動です。その会社で人員削減があり、異動になったのです。そのため、今まで通っていた職場から新しい職場に変わったわけですね。新しい職場にろう者の社員はいますが、今までの職場とは違うので、会社に行きたくない気持ちになったり、めまいがしたり、汗が出たりしたらしいです。不安感もあり、気持ちもどんどん落ちていったというのですが、うつ病ではなかったようです。うつ病とは、毎日というか、仕事が休みの時も気持ちが落ち込んだままのこと

をいうのですが、その人の場合は、ご本人は会社に行こうと思うと気持ちが落ちたり、めまいがしたり、汗が出たりします。でも、土日になると気持ちが楽になるという状況だったそうです。背景としてはっきり分かっていることは、職場が変わって慣れない、そのストレスが元になっているということです。ただ、例えば会社を辞めたら、前の職場に戻ったらストレスは解消されるかというところではないのです。ご本人はろう者です。手話で話ができますが、複雑さと曖昧さの理解が難しい。会って話すのは大丈夫です。しかし、1人でいろいろ考え実践するという限界があるのです。これらは最初のアセスメントでわかったことですが、いい面もあります。ほかの人達と関わりたい、話したいという気持ちを持っているのです。仕事に対しても辞めたい気持ちはなく、一生懸命やりたいと思っています。でも、新しい職場になかなか行けないし、気持ちは落ち込む状況があり、心理カウンセリングを勧めたわけです。自分の気持ちを理解することを目標にお話を進めるわけです。経過として、自分のことを客観的に内省する。自分の気持ちをきちんと表現する。そして、環境調整をする。これは何かというと、新しい職場はいいところですね、ろう者が他にもいて、職場の人達も新しくろう者の社員が入ってくるということで喜んだのもつかの間、その方が落ち込み仕事に行けなくなったということが、職場としても他のろう者社員と違うということに驚いている状態になっています。ご本人の許可をもらって、会社にいろいろなろう者、難聴者がいるという情報を提供しました。家族に対してもいろいろと情報を提供しました。この例の場合はデフファミリーですので、ご本人は親と手話で話ができるのですが、だからといってご本人の状況について理解ができるわけではないんですね。親と話し合っているけど、私が親に会社に行けない理由を問いかけても、「会社にどうして行けないの？」と私が怒られてしまうわけですね。親は「会社に行って欲しい」と言い、「何で休むんだうちの子は！」と怒りました。人の気持ちというのは複雑な面があるということが理解できない部分があります。まだまだ病気の診断はされてない時で、丁寧に状況を説明したら家族もわかったようなわからないような反応でしたが、とにかく、最終的にはご本人が会社に行けるから、親も様子を見てください、安心して下さいという話になったわけです。少しずつ少しずつ支援を続けてきたから変わってきた例です。最終的には会社の中で産業健康相談室からは、彼は適応障害ではないかという診断があったのですが、少しずつ時間が経過して新しい仕事にも慣れてきて、ご本人も会社に通えるようになったという事例でした。

(スライド 15, 16) 次の事例をお話したいと思います。この方は 30 代の難聴者です。この方は女性です。彼女の家族は、両親、兄弟は聴者で本人だけが難聴という家庭環境です。地域の少・中・高校で育ちました。高校卒業後、職業訓練校に通い、就職しました。しかし、転職を繰り返していました。最初に職業訓練校に入った時に、そこで問題が判明されました。それに対して支援方法が皆、わからないため困り、十分な支援ができないまま、という状態で、ご本人は就職と退職を繰り返していました。そこで、どうしてなのかと私のところに持ち込まれました。いい面がたくさんある方でした。日本語には長けていて語彙の数も豊富で、私よりもよく知っていました。ところが、場にそぐわない使い方や、意味が少し違っていたりと語彙数は多いのに使い方や問題があるようでした。それから、見て理解したことをきちんとメモにとる人でした。ところが、計画を立てたり、順序立てて行うのが苦手でした。そして固執性もみられました。これと想ったら突き進んで止められない。例えば、私と会った時に、こちらを見ないで、壁の汚れをじっと見ているのです。また、不安感も持っていました。会った時には、まだ診断名は出ていませんでした。後で医療機関につなげて発達障害という診断を受けました。医療機関では成人の知能検査である WAIS-R 検査を行い、その結果、処理速度の数値が低かったのです。処理速度とは、

仕事の作業のスピードに関わるところです。ご本人は一生懸命にやることはできるのですが、他の事は集中できない側面があるのですね。流れ作業が苦手。彼女は先程話したように、最初に職業訓練校に入った時に、同じ内容の検査を受けています。私がやった検査とほぼ結果は同じでした。今、ご本人は30代ですので、訓練校に入った時は20歳になる前ですね。その長い間が非常にもったいないと感じています。就職と退職を繰り返してきた間に勤めていた会社であったり、ハローワークであったり、人事の人であったり、そういうところから色々な情報がいろいろと入ってきます。

(スライド 16,17) これは聞こえる一般的なアスペルガーの人達の職場での状況の表です。私に関わってきた彼女が今まで働いてきた会社からもらった情報と、「場の空気が読めない・わからない」とか「難しい言葉をやたら使う」「機械的な言い方・動きをする」とか、彼女の場合は夢中になっちゃう部分があるという。ここを見て思ったのは何かというと、発達障害の人達によくある話なんですけど、発達障害の有無は別にして、一般的なろう者、難聴者にもこれらに当てはまる部分があるなと思いました。聞こえないからそういう状況がわからない、どう動いていいかわからない、場の雰囲気をつかめない、というんですね。それは結果的には発達障害の人達の行動と同じような状況になってしまう。でも、そのプロセスが違う。聴覚障害者の場合は、情報が入らないため、わからないため、コミュニケーションがとれないため、こういう状況が起こる。また、聴者のアスペルガーの人は、やはり方法がわからないということで、結果的には同じような状況が起こる。でも、本人は発達障害の特性なのか、聞こえないために起こるものなのか、状況なのか曖昧になってしまう。でも大事なことは、「結果ではなくプロセスを見ていくこと」。結果だけ見るのではなくて、どうしてこういう状況になったのかではなく、流れ、プロセスを丁寧にアセスメントするということが非常に大事かつ必要ではないかなと思っています。

(スライド 18) 事例の経過について、計画を作る力を身につけるための支援、個別支援を行いました。彼女はメモを取る力はあったので、一緒にスケジュール表を作っていました。「メモは好きでしょ?」と話しかけ、「1ヶ月は? 1週間は? 1日は?」と予定を聞くかたちで作っていました。2番目の環境調整というのは、彼女の得意な所、苦手な所は何かを一緒に考えながら、周りに対してそれを伝えていきます。ご本人は難しい語彙は知っているけれど、時々きつい言い方をすることもあります。そういう時は、「別の言い方をしてみる?」と問いかけてご本人の持っている語彙を書き出してみる。そしてご本人に聞きながら語彙を分けていって、語彙の使い方やイメージを考えていき、状況に合った使い方ができるようにして行きました。最終的に、ご本人は自分の力に合った会社に入ることができました。以前は転職を繰り返していましたが、今は継続して働いています。ご本人は、もし問題が起きたら、誰かに会って一緒に解決していこうと思っています。彼女が私に会ったことで、いろいろな方法を身に付けることができ良かったと思っていますし、問題にぶつかった時には支援を得られる場所があるということが、ご本人の中で自信につながっていると思います。

(スライド 19) 今、お話ししたような例は他にもあります。先程の発達障害に似たケースもあります。孤立した状態の方もいます。生育歴をつかむことができいていません。どのようにしてこれまで生きてきたのか、つかめないケースもいくつかあります。

私の考えでは、脳の機能に支障があって発達障害になった例もありますし、教育を受けられなかったなどの環境により発達や精神に問題を抱えるケースもあるかもしれないとも思っています。作られた発達障害、作られた知的障害、作られた精神障害もあるかと思っています。私が言いたいのは、診断名がつかない、けれどもその人なりの世界がその人の中にあります。自分が主体

となって動けない、でも自分の世界の中では自分が主体となって動いているかもしれません。そういう世界を持っている人を私達が見つけても、その人の世界を私達の世界に無理に合わせる必要はないと思っています。例えば相手と私が同じ部屋の中にいるとします。「これは何？」と相手に話しかけて関わりを持つのではなく、それぞれが一人遊びをする。それをずっと繰り返している。「変なおばさんがいる」と向こうが私に気付いて言ってきたら、一緒に同じ何かを見るような関わりをする、そういうようなことがいいと思っています。直接的な関わりではなく、状況に合わせた形。最終的に関係が作れることが大切だと思っています。ズレに気付くことというのは、本人が考えることと周りが考えることにズレがあるということです。本人も周りから見られていることと自分が思っていることが違うなと感じます。そこに気づき、そのズレが何なのか、それを見立てます。どうやって立て直していくのが大切だと思います。

3番目の具体的な物事。午前の濱田先生のお話にもありましたが、「あれ」「これ」「ちょっと待って」「あっちに行こう」という言い方ではなく、「5分待って」「この部屋を出て2番目の部屋に行こう」など具体的な言い方、具体的に行動を説明するということです。4番目の言わなくてもわかるようなこと。見てわかるという暗黙のルールがありますけど、こういう場ではやらない、なぜやらないのか理由もきちんと明示する。明示した上で本人も交流が可能になる場を提供することができます。

(スライド 20) 最後にまとめですが、今までろう者、難聴者の方を支援してきました。ご家族とも接してきました。親はきちんとした診断名を求めます。親の立場では、この子にもしかしたら障害があるのではないかと不安があります。なので診断名を求めます。でも私がひっかかっているのは、診断名は聞いたけれどそれに対して説明があったか聞くと「ない」と答える場合です。親は今後どうすればいいのかわからない状況があります。診断名がついてそれとは別に、できることは何か、できないことは何か、困っていることは何か、得意な面は何かということを見つけていく。それを見つける時にどういうふうに支援していくのか、ということを考えなければいけないのかと思っています。個人的な言い方をすると、診断名はどうでもいいんですね。臨床心理士という立場からは病名の診断はできません。医者だけが診断できます。診断名よりも、この方ができることは何か、得意、不得意は何かを見つけていくのが我々の仕事だと思っています。見つけたら次に何ができるのか、支援方法をどうするのかを提示すること、それは私達がやることだと思っています。発達障害というのは精神的な問題も持ちます。それらは今起きたものではなくて、育つ中で積み重なってきたものもあると思います。幼稚園、小学校で何があったのか、中学校、高校、大学、会社に入ってから何があったのか。それぞれのライフステージを調べていくことも大事だと思います。生育歴を見ていく、できればご家族とも話をしていくことが大切だと思っています。

スライドの下の部分にあります、4つの内容です。ろう、難聴の方は1人暮らしであるとかご家族との関わりがない方が多いので、以前の様子をつかむのは難しい面があります。これが課題になっています。生育歴がつかめなくても今できる方法は何かを考えていきます。専門家の視点です。ご本人にとっては、「専門家が偉そうに言っている」と思うこともあります。我々はそのように思われているかもしれないという自覚が必要だと思います。丁寧な説明をしても、ご本人は「偉そうなことを言っているが何されるかわからない」、「私をバカにしている」という見方をされるかもしれません。そういうことがあると自覚して関わりを持つことが大切だと思います。ろう者、難聴者の場合は主体的になるという経験を持っている人が少ないです。自分が主体的になって動く経験を与えて、身に付けさせるという手立てを考えなければいけないと思っています。

どちらかが一方的にしゃべるのではなく、対話が成立することも重要です。専門家として支援できるかどうか評価する。支援者本人も自分を見つめ直して自分自身の自己評価をすることが大切になります。また、チームワーク、1人ではなくいろいろな立場の専門家、学校や行政などと一緒に連携をとりながら進めていくのが大切になるのかと思います。

(スライド 21) 以上で私の話は終わりますが、参考文献のご紹介をしたいと思います。4つの文献を載せておりますのでお読みいただくと嬉しいです。もう1つ、8月29日は私にとって非常に大切な日です。テンプルさんという方で自閉症の方ですが、動物学で博士号をとり、大学で教鞭をとられています。この方がお生まれになったのが今日です。素晴らしい講演をなさいます。インターネットで調べると動画で見られます。英語でお話されていますが、日本語字幕がついています。自分が自閉症とわかって悩んだ経験や、自閉症だから動物の気持ちがわかると、本で書いておられます。MRIかCTを撮り、その画像を示しながら病気の特徴についてお話されています。帰られましたらインターネットで見てください。当事者の話でとても参考になります。この方は聞こえる方ですが。以上で私の話は終わりにいたします。

■質疑応答

質問者／精神保健福祉士で、行政で働いております。先生のお話を伺って、何度もうなずきながらメモをとっておりました。

先生にお伺いしたいのは、私の仕事の仕方であったり、関わる時の姿勢やポイントについてです。先生の話の中でとても共感したのが、主体性の獲得の難しさです。確かに、生育環境や生育歴を聞くと、言ってもわからないとか、言っても違うとか言われてしまって、結果的に言わないというダブルバインドみたいな状況が起きていて、彼らの中で適応してきた結果、主体性をそぐ形で成長してきたのかなと感じることがあります。社会人になって仕事をしたいとなった時に、ある程度、自分の意向や意思を伝えてくださいとなるのですが、それが何とも面談に出てこない。そういった時に、自分の気持ちを整理したり、自己理解を促していくための面談をとって内偵作業を進めていこうと思うのですが、言葉の壁があってなかなか思うように進まなかったりすることもあります。心理の面での支援なのか、精神保健福祉士としての支援なのかということで領域に悩むこともあるのですが、先生が臨床心理士と精神保健福祉士もお持ちであるというところから、支援をしていく上でご本人の意向をどのように尊重して、主体性をどうやって引き出していたらよいのか、教えていただきと思います。

甲斐／ご質問ありがとうございました。主体性を取り戻すというのは本当に時間がかかることです。すぐに解決するという問題ではありません。1年かけて取り戻せる人もいれば、10年以上かかる方もいます。そこまでかかれるかどうか。今、行政でお仕事をされているんですね。行政の立場でどこまで関われるかという問題もあると思います。自分がいる職場のやり方、体制を考えた上でその方に合った支援をする。自分では難しい場合は他に繋ぐことも考えることも必要だと思います。会った時のコミュニケーション方法はどのようにされていますか。

質問者／市に手話通訳の専任がおりますので、その職員と一緒に入って面談をしています。

甲斐／ありがとうございます。その方が持っているコミュニケーション方法に合わせていくことが非常に大切になります。手話といってもいろいろな手話があります。その方が持っている手話

に合わせる。もしも、手話通訳者が対応できないならば、通訳も変えるというような、厳しいですがそういう考え方も必要だと思います。来られた方がどういう方なのかよくわからない、また、きちんと訴えられないという方の場合には、イエス、ノーで答えられるような質問をしていく。それができるようになってきたら質問の方法を変えていくことも必要かと思います。

質問者／お話ありがとうございました。ジョブコーチをしております。素朴な質問になるのかもしれませんが、その方のアセスメントがどれだけ正しいかということを誰がどう判断するのか疑問に思うところがあります。ましてや、発達障害の場合は、医師がきちんと判断しなければならない時に、コミュニケーション方法はどのようなかというのと、もう1つ、その方の、心がけの問題であって本当に知的なのかなどその辺の判断を先生はどうお考えでしょうか。

甲斐／私の説明に不備があったかもしれませんが、私は、病名はあまり気にしません。もちろん私は診断できませんし、もしやったら違法になりますよね。医師が診断する時に情報が欲しいと言われることはあります。その場合は本人に確認をとった上で、情報提供することはあります。その上で医師が本人と会って診断する。手話通訳をつけるか筆談にするかコミュニケーション方法はいろいろあると思うのですが、派遣のコーディネーターとその人に合った方法を考えて派遣してもらうことはあります。私ができるアセスメントは、本人の得意なこと苦手なこと、生育歴などを調べてつなげていっています。

質問者／ジョブコーチの立場では会社に必ず障害者手帳の関係で病名が必要という時に、本当に正しいのかどうかとはなはだ疑問に思うことと、経験上、見ればもしかしたら発達障害かと思うこともあるんですけど、得意不得意がはっきりしているとか、そういう時に本当のアセスメントはいったい誰が判断できるのかなど。判断すること自体が先生がおっしゃったように本人にとって有益かどうかという問題もありますけど、その辺がどうなんだろうという私の疑問も含めてお伝えさせていただきました。

甲斐／アセスメントというのは、臨床心理士業務の範囲の話ですが、本人が最大限の力を発揮できる環境を作る、そのための整備をする、そのためにアセスメントをするんですね。他のところで、もしかしたらアセスメントがきちんとできなかったために出てきている問題もあるのかもしれませんが。そういう部分については、こちら側が正しいとか間違っているとかそういう手出しすることはできないんですね。ただ、結果として出た内容の経緯を確認することは必要だと思います。情報交換しながら確認はしています。たまたま診断をされたその施設と連携がとれた場合の話ですが。正しいとか間違っているとか、それをはっきりと言うのか言わないのか、そこは難しいところです。ただ、その結果として出てきた内容の経緯を丁寧に確認していくことはやっております。

【実践報告】

(1) 「ろう・難聴の子どもたちにスクールカウンセラーができること」 賀屋 祥子
 東京都教育委員会派遣スクールカウンセラー
 臨床心理士・手話通訳士

よろしくお願ひします。賀屋と申します。今、ご紹介いただいたように、東京都の小学校でスクールカウンセラーをしています。今日はその体験をもとにお話させていただければと思います。実はとっても人見知り、こんな大勢の方々を前にお話するのは初めてなので大変緊張しています。もし、話に漏れている部分があったり、わからない部分がありましたら、後で遠慮なくご質問いただければと思います。それでは始めさせていただきます。

今日、流れはこちらのパワーポイントのとおりになっています。自己紹介とスクールカウンセラーの活動の中でやっていることだったり、できることだったりをお話しして、実際の事例を含めてお話をいたします。後は、私が考えている今後のスクールカウンセラーと、聞こえないお子さんについての課題をお話ししていきたいと思っています。

まず、自己紹介です。現在の仕事は先程もお話ししました東京都の学校でスクールカウンセラーをしています。質問ですが、スクールカウンセラーという名前を聞いたことがある方は……（手が挙がる）あ、嬉しいです。実は10年くらい前までは、「スクールカウンセラーって何？」という質問が結構ありまして、私自身がスクールカウンセラーを目指し始めた時も、「何それ？」と同級生に聞かれた記憶があります。

他にも仕事をいくつか掛け持っていて、市区町村の心理相談員ですとか、児童精神科で子どもの精神的部分のケアをしているカウンセラーをしています。資格としては臨床心理士と手話通訳士の資格を持っています。「なんでこの2つ？」ってよく聞かれます。もともとはスクールカウンセラーを目指して大学に入りました。大学でろう・難聴の学生と出会ったことが手話を始めるきっかけとなっています。そこで手話を覚え始めまして、ろう学校で育ったりとか、あるいは地域の学校で育ったりとかいろいろな学校歴を持っている学生がいて、その体験を聞いたり、他にはろう学校での余暇活動だったり、ボランティアに参加したり、地域の学校から依頼を受けてノートテイクの活動をしていました。その中で、聞こえないお子さん、ろう・難聴のお子さんの心理支援について考えるようになりました。

スクールカウンセラーの名前を聞いたことはある方がたくさんいると思うんですが、学校の中で相談室にいて、子ども達のカウンセリングをしている人っていうイメージを持つ方がかなり多いんじゃないかと思っています。実際の活動はどういうふうな内容かと言うと、週に1回、多い所ですと週に2回、少ない所だと2週間に1回から1カ月に1回という所もあります。子ども達には、学校にいる相談の先生だよと話をしてしています。現在行っている学校は、本当にたまたまなんですが、難聴と言語の通級指導学級が併設している地域の学校です。

ろう学校には行かないのと聞かれるんですが、実は東京都の教育委員会からは特別支援学校にはスクールカウンセラーは派遣されていません。スクールカウンセラー設置しているろう学校あるよと思われる方もいると思うんですが、ろう学校の方で予算を割いてやりくりしていただいているような状況と聞いています。と言いますのも、そもそも、聴覚障害ということの知識以前に、学校の知識をきちんと持っているカウンセラーがとても少ないところと、さらにろう・難聴について専門的理解のあるカウンセラーがまだまだ少ないというのが現状です。

スクールカウンセラーというのは、ずっといられるわけではなくて、教員の先生と一緒に、だ

いたい6年に1回、異動というシステムがあります。まして非常勤なので、安定していないという状況、それが現在の雇用の面での課題かなと思います。

では、実際、そういうスクールカウンセラーなんですが、ろう・難聴の子ども達にできること、こういうことができるのではないかということをお話させていただければと思います。ろう・難聴だけではなく、地域の学校にはいろんなお子さんがいらっしゃいます。先程濱田先生や甲斐先生のお話にありましたように、ASDのお子さんもいますし、弱視のお子さんもいますし、あとは肢体不自由のお子さんもいますし、それこそ普通に元気に通ってきている子どももいれば、学校に来られなくて不登校という状況のお子さんもいますし、学校には通ってきているけれども、家族にいろいろな課題、例えば虐待、経済的に困難だったりという家庭環境にあるお子さんも通っています。厚生労働省の発表だと教室の中にだいたい6.3%くらいASDのお子さんがいるんじゃないかという調査報告が来ているんですが、先生達に言わせると、いやいやもつといる、10%くらいいるんじゃないか、多いところだと20%くらいいるんじゃないかというようなお話をされる先生もいます。なので、いろんなクラス、いろんな状況がありますが、その中だと難聴のお子さんってとっても埋もれやすいんですね。席の調整をすれば、この子は聞こえるからわかるとか、先生と一対一でお話をすればわかっているから大丈夫、と思われがちなお子さんが多いです。そういう中で、本当はそうではないんだよというお子さんもいるので、そういう状況を正しくお伝えしていくのが私の役目かなと思っています。

実際、スクールカウンセラーがどういう動きをしているかと言いますと、皆さんのイメージだと子ども達との面談、親御さん達との面談というのが一番大きいかなと思います。

他には授業も見に行きます。これを親御さん達に話すたびっくりします。うちの子、何か問題があるんですか、と言われるんですが、そうではないんですね。実際の状況を見ないとアセスメントは正しくできないと思っています。診断名とか、ASDならASDの特徴というのは一般的に持っているというものはあるんですけど、とはいえ、お子さん一人一人によって状態が違うので、実際のクラスの状況を見に行き行って確かめる。確かめたり、実際お話ししたりとか、後は、給食を一緒に食べたりもします。そういう中で、クラスの実際のお子さんの状況だったり、クラス全体の状況を見て、先生達とやりとりをさせていただきまします。そのやりとりや、どうしていけばいいかと考えることをコンサルテーションと言います。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんね。

地域の機関とも連携をします。例えば、ASDのお子さんですとか、ろう・難聴のお子さん、弱視のお子さんだったりすると病院との連携を行って、どういう特徴があるのか、医学的な診断の部分ですとか、アセスメントを伺ってどういうふうにしていけばいいのかを考えます。虐待を受けているお子さんですと、児童相談所と連携をとって今後、学校の中でどう見守っていけばいいのか、どうフォローしていけばいいのかというのをお話ししたりします。

資料には載せていませんが、例えば学校の中でケース会議があるのでそれに参加をさせていただいたり、今いる学校は難聴学級併設なので、聞こえに関する授業を学校の中でやっているんですね。その授業の内容検討を一緒にしたりしています。特に、難聴のお子さんがある学級だとクラスの中の受け止め方、実際にどうしていけばいいのか、子ども達の中で疑問が出るので、どうい疑問が出てくるか、授業が終わったあとに、どういう感想が出てくるのか、これからどうしていけばいいのかというのを先生達と考えたりしています。こういう検討ができるスクールカウンセラーというのがなかなかいないので、ろう・難聴のお子さんのいる他の学校のカウンセラーさんから質問が来るようになって、ようやく少しずつ、繋がり始めたかなと思っています。

濱田先生のお話にも出てきましたが、中学校で難聴学級のある地域が実はとっても少ないんで

すね。ろう学校に転学していくお子さんもいるんですが、地域の学校にそのまま進むお子さんに関しては、とても引継ぎが大事になってきます。まして思春期に入ってきて、自分のことをどうすればいいのか友達とのやりとりをどうすればいいのか悩むお子さんもいるので、その部分を丁寧に見ていただけるように引継ぎをしていければと思っていますし、今後の課題と思っています。

スクールカウンセラーだけではなくカウンセラーというのは実際に問題が起きた時に対応すると思われている方が多いと思いますが、スクールカウンセラーは特に予防という視点が大事になってきます。医学的な知識になりますが、一次的予防、二次的予防、三次的予防という三つの段階があります。一次的予防は、こういう問題が起こるんじゃないかと想定をして、それをできるだけ最小限に止めるためにどうすればいいのか考えて、予測して動く段階です。二次的予防は問題が出始めた時に悪化するのを防ぐ段階、三次的予防は問題が本格化してどうしようとなった時に、対応する段階で、ここになると専門機関の対応になってくることが多いです。こうなると、学校の中では一次、二次的予防をすることが多いですし、スクールカウンセラーがここの問題や予防に関与する必要が出てくると思います。

例えば、聞こえには支障がなく ASD の特徴を持っているお子さんでどうしても物に触ってしまうお子さんがいたんですね。クラスのものに触る、新しい物が出てきたら、トコトコ前に出てきて触る、そして友達に触るなよ、って言われて喧嘩になる。

社会科見学に行く前に、事前に先生から、多分いろんな物が見えたりすると思うけれども、触っちゃダメだよ、と全体に説明があったんですね。たまたまその授業を私も一緒に見ていたんですが、その子がぼそっと、「どうせ僕行けないよ」とつぶやいたんです。私が「どうしていけないと思うの?」と聞いたら、「だって僕、触ろうと思わなくても触っちゃうんだもん」と言ったんです。それで、ああ、この子は実は困っていたんだとわかりました。「本当は触りたくなかったのに触っていたの?」と尋ねると、「うん、気付いたら触っちゃってる」と言うのです。これってとっても大事な気付きなんです。3年生か4年生のお子さんだったんですが、自分自身の課題に気付き始める時期でもあったので、このつぶやきを逃したくないんです。私も担任の先生のところ、「この子がこういうつぶやきしていたんですよ」とお話ししたら先生はとってもびっくりしていて、何度ダメと言っても触ってしまうからこの子は絶対に気付いてないんだと思っていたのです。「では、事前に作戦会議をしましょうよ」と言いました。その子にも事前に予告をして3人で作戦会議を開きました。困っているということを知ってもらったのがとても嬉しかったみたいで、「先生から声をかけてもらったら止められる」と言ったので、「じゃあ、もし、3回言って止められなかったら、その場でいじっているものを先生がもらうね。でもそれが悪いということじゃなくて、気付くために必要なことだからね」と言って、3回目までで気付いたら十分に褒めてあげると3人で約束しました。

ここで何が大事かという、私だけではなくて担任の先生とも約束ができたことです。事前に予告をすること、約束をすること、スクールカウンセラーがいなくても日常の生活でできるようになったってことで、この子とっても我慢がきくようになったんですね。「我慢ができたね」って褒めるとニヤッと笑って、「できた?」と聞いてくる。小学校3~4年生ぐらいの段階でこれぐらいの認識ができるようになってくると予後がいいかなと思います。

小さいうちにケアをしてあげる、フォローをしてあげることの大事さというのは、午前や甲斐さんのお話にも出てきましたけれども、1~2年生のうちは環境調整と言って、まわりが気付いて調整してあげることが大事で、保護者の方が気付いて面談に来ます。ただ、3~4年生になると自分で気付き始めるので、そこで本人と話を決めていく、先程のお話に出ていた主体性と



ということが大事になってきます。それが徐々に5～6年生になってくると主体性を伸ばしていくためにこれからどうすればいいかというのを周りも考えてやっていくことが多いですね。

とんでしまいましたが、聞こえないお子さんの教育の場、皆さんも知っている言葉だと思うんですが、ろう学校、難聴学級、あとはインテグレーションと呼ばれる通常学級が存在します。そのインテグレーションのお子さんの中にも支援の必要性は出てきていて、それは2003年の特別支援教育制度というところで発達障害を持つお子さんだけでなくいろいろなニーズを持っているお

子さんがあるんだよ、ということが明文化されています。現在、どれくらいの聞こえないお子さんが通常学級で過ごしているのが計算したところ、少なくとも手帳を持っているお子さんが就学相談受けていて結果的に、難聴学級にも通わず、地域の学校だけで過ごしているお子さんが少なくとも3,800人はいるということが出てきました。おそらく手帳を持っていないお子さんを含めるともっといるんじゃないかと思いますが、あとは、両耳ではなく片側難聴のお子さんも含めるともっとなんじゃないかなと考えています。そんな中で何ができるだろうかと日々考えています。

先程話した、ASDの課題を持っているお子さんも同じなんですが、スクールカウンセラーができることは、学校内や学校外の資源を整理すること、それと学校の中で、特に小学校は担任の先生が大きな力になってくださるので、様子を伝えて連携をはかることとそのほかにちょこちょこお子さんにあわせてできる事があるんじゃないかなと考えます。その中でとっても大事なのが、今の状況の一步先を見据えること。見据えるためには、その子のアセスメントをもとに想像することが大事になってくるかと思います。

ここでもう一つ事例ですが、これも聞こえに課題はなくASDのお子さんです。自発的な言葉が1～2年生の頃はほとんどなかったんですが、4年生になってから急にみんながいじめるとうちの人に言い始めたんだそうです。おうちの人にはびっくりして、クラスでいじめがあると学校にいらしたわけなんですね。お子さんも登校がしにくい状況になっていて、そんな中でスクールカウンセラーにだったらお話ができるとこちに依頼が来ました。先程のお話で言うと、二次的予防から三次的予防のお話になるんですが、子どもと話してみました。「誰にいじめられたの？なんか嫌なことがあったみたいね」と話している中で、なかなか本人から言葉が出てこなかったので、じゃあ例えば○君とか○ちゃんとか言ったら、その子がちっちゃいちっちゃい声で、「名簿をください」と言ったんです。名簿？と思ったんですが、ようやく出た一言だったので名簿を持ってきたらその子がチェックをし始めたんですね。最初、問題だったのは、みんながいじめるという一言だったんですけど、その子は、この子はやさしい、この子はちょっとやさしい、この子はちょっとやさしくない、この子はやさしくない、と○とか△で印をつけ始めました。すごいなあと思いながら見ていて、結果的にはやさしいと付けた子が三分の二ぐらい、やさしくないとかこの子は嫌だとつけたのがたった2～3人だったんですね。でもその子にとったらとっても大きい2～3人だったので、やさしくないというふうにした子に対してもどうすればいいかということも考えましたし、その子に伝えたのは、でも三分の二のやさしくしてくれる子もいるんだね、とお話をしたら、にこっと笑って、教室に行きたいとトコトコ歩き始めたんですね。それもとてもうれしい出来事だったんですが、ただ、予測が自分でできないお子さんだったので、その後に担任の先生に伝えて、教室の中で彼がどう過ごしたらいいのか、どういうふうに彼と付き合ったらいいのか具体的な方針を立てることにしました。その時の状況だけではなくて、一步先の、彼

が教室に入った時の状況も考えていくことが必要な例でした。

ここからは難聴のお子さんの例になってきますが、早期から対応できたお子さんの例で、入学の時から関わっていました。小学校1年生の時に、高度難聴、120 デシベルだったか、ほとんど聞こえない状態だったんですが、人工内耳と併用して、口話はとっても上手な子どもだったんですね。聞こえないのによくわかっているね、と先生達に言われていたんですが、私の中では「本当に？」と思って教室にもまめにいかせてもらうようにしていました。とはいえ、週に1回です。サポートに入ってくださる先生からも、よくわかっているのよ、この子はすごいよ、と言われていたんですが、私の中にはどうしても疑問があったので、よく見ていると、その子は必死で周りを見ているんですね。周りを見ながら、何にも知らない人から見たらほぼ同時なんですけど、ちょっとだけ遅れるんですね。指示が合っているかとずっと不安そうな様子をしていたり、聞きもらしているかなという状況があったので、ちょっとサポートに入ると、聞こえてるもん、わかっているもんと拒否にあたりということがありました。音楽の時間にみんなが一斉に歌い始める状況にびっくりしてしまって、みんなが私に意地悪をすると訴えてきました。周りの子は、意地悪をしているつもりはないので、どうすればいいかなと思うこともよくあったので、先生とも確認をして難聴学級の先生にこの子の様子を一緒に見てもらったり、支援員さんに、もう少し細かく内容を伝えてもらったり、この子の行っている療育機関とも繋がるようにしていました。そうしていくうちに、先生達もこの子が困っている状況に気付いてくれるようになったので、授業中のフォローというのは、こちら側は少しサポートに入るだけで、状況を確認するという立場に徹しました。高学年になるにつれて、コミュニケーションの課題が出てくるので、その時は、また、一歩先を見据えて先生達と繋がっていく必要があるかなと思っています。

こういうふうに関わるお子さんに関してはいいんですが、自己理解をどこで行っていくのか、今は難聴学級の併設校なので先生達と話しやすい環境にはあるんですが、これからこういう理解を広めていくためにはどうしていけばいいのか、私の中でもまだまだ課題です。

高学年から関わり始めたお子さんですと、すでに拒否感が出ていて、周りから聞こえの教室に行っているのを気付かれるのを嫌がるお子さんもいるので、裏方の裏方で作業をしていて、親御さんと繋がりながら本人には直接はできないんだけど、周りがどう動いて関わっていくかを考えることがメインになっていきます。特に ASD 傾向のお子さんですと被害的にとらえるという面も非常に強いので、本人の了解を得たり、本人の自己理解を深めるっていうのが難しい時もあるので、聞こえの教室でゆっくり関わってもらう時にどういう代替を持ち出していけばいいのかというのを検討しながら進めています。この子達がろう学校に転入していく時に、例えばどういう風に引継ぎやサポートをしていったらいいのかというのもまだまだ課題でして、ろう学校の先生とも今後やりとりをさせていただければと思っています。

どうしても環境調整が多くなってしまいう仕事なんですけど、本当はもっと子ども達が自己理解を深めるような支援をしていけたらと思っています。特に中高生から面談を申し込んだり困ってくるお子さん多いんですが、小学校3～4年生の段階からフォローできると予後が違ってくるかなと思っています。来年度から障害者差別解消法がスタートしまして、合理的配慮として学校側では整えようとしているんですが、そちらと心理的支援の兼ね合いをどうしていけばいいのか、というのはスクールカウンセラーとしても今後課題になってくるかと思っています。私自身も聞こえるカウンセラーなので、この子達がどういう状況に感じているのか、というところをもっともっと考えながら聞きながら進めていかなければと思っています。ちょっと最後の方、駆け足になってしまいましたが、これで報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【実践報告】

(2) 「精神障害雇用トータルサポーターとして感じていること」

稲 淳子

日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会 会長

社会福祉士・精神保健福祉士

ご紹介いただきました、日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会の稲と申します。今日は 30 分間の時間をいただきました、ありがとうございます。主に 2 つのことをお話ししたいと思います。

自己紹介と協会の活動について、私の職場で発達障害を持っている聞こえない方に対する就労関係からの支援の例をお話ししたいと思います。関係ないように見えるかもしれませんが、私がお話ししたいのは、立場が違っていても、ソーシャルワークとしての聴覚障害者への支援、基本は同じであるということをお話ししたいと思います。

まず、私の自己紹介からです。私の職場は、このパワーポイントをご覧くださいればわかると思いますが、大阪ろうあ会館という大阪府の情報提供施設が入っているところで働いております。今日、お話しする内容は、大阪の労働局委託である、精神障害者雇用トータルサポーター、これはご存知でしょうか。これは国の制度で全国のハローワークに設置されています。社会福祉士、心理士などが配置されています。その中で聞こえないのは私一人です。全国には今、大阪だけ。実際の活動は、本当にいろいろなことがあります。

まず、日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会についてお話ししたいと思います。パンフレットが配られていると思いますのでご覧くださいとおわかりになると思います。協会が設立されたのは、2006 年です。きっかけは、私が資格を取ってから最初にぶつかった問題は、福祉の現場に行った時の支援のことではなく私自身のことでした。私は資格を取ったのでその資格を活かした仕事をしたいと思いましたが、仕事がありません。情報保障ありません。そういうところから始まりました。聞こえない人を支援する仲間が集まって、悩みやこんな例があるよと話す場がない。それをきっかけにしてソーシャルワーカー協会を作りました。皆さんもご存知のように今、全国に派遣する「全国聴覚障害者相談支援事業 聴覚サポート『なかま』」というのがあります。東日本大震災をきっかけに、メンタルケア支援をするために東北へ行きました。ソーシャルワーカー協会や東京都聴覚障害者連盟などの聴覚障害者団体、また医療関係従事者が集まって支援にあたりました。そして、2 年前から全国に対しても派遣を始めています。先程、スクールカウンセラーをされている賀屋さんの講演がありましたが、ろう学校の子供達の問題にも対応しています。ろう学校からコミュニケーションが取れない子がいると依頼があって、スクールソーシャルワーカーとして、いくつかのろう学校に行き、小・中・高等部の子ども達と会っています。学校の体制として、きちんとカウンセラーを配置することができるようになるまで、その間のつなぎとして、ソーシャルワーカー協会としてできる範囲で支援をしているところです。具体的な話をするには時間がありませんので省略しますが、ホームページもありますのでご覧ください。

では、私の仕事についてのお話をしたいと思います。こちらに（パワーポイント）お示したものは、ソーシャルワーカー協会の活動の基本です。私の仕事も同じです。資格を取ったきっかけというのは、2000 年頃だったと思いますが、ある精神的な課題を持つ方のケースでした。隣家から煙がきたと、怒って怒鳴り込んだり、警察を呼んだりしました。私は、当時資格はありませんでしたが、ホームヘルパーとして関わっていました。この方の課題について、支援者、例えば精神科の医師、看護師、ケースワーカー、手話通訳者、保健師などが集まって、施設に入れた方がいいのか、入院した方がいいのかという相談が始まりました。その時に私は、この方は精神の



病気ではないのではないかと、なかなかコミュニケーションがとれない、さみしいという気持ちの表れではないかとお話ししましたが、参加された方からは、聞こえない者同士だからかばっているのですねと言われました。とても怒りを感じ、かばっているのではなく、この方の気持ちを代弁しているんだと言いました。これをきっかけに、資格を取ろうと思ったのです。

パワーポイントにいくつかまとめてあります。これはほんの一部ですけれども、実際、精神的な課題があると、市役所からお話をいただいたり、病院から持ち込まれたり、ハローワークから持ち込まれたりします。例えばうつ病とか、躁うつ病とか、統合失調症とか、言われる人ですが、話してみると本当にそうなのかと思う例がいくつかありました。別の専門の先生にお話を聞きますと、誤診の可能性もあるとも言われました。誤診されるのはコミュニケーションの問題なのかもしれません。しかし、自分の気持ちを言葉にして話すことができない場合もあります。代わりに行動で表す、それが周りから見ると、暴れているとか、おかしいとか、すぐに病院に連れていきましょと、入院となった例がいくつかありました。

ハローワークにいると仕事を探したいというろう者がたくさんきます。当然、みんな大人です。話を聞いてみますと、入院していたとか、退院して仕事を探したいと医師の就労可能という証明書、診断書を持ってくる。私は、仕事ができる、できないを判断する立場ではありません。まずは、その方が働きやすい環境はどういう状況か、できる仕事は、何なのかなど話をします。支援者は本人を見てコミュニケーションが難しい、通じない。例えば、家の中の間取りを尋ねると、お風呂と台所と寝る部屋があると答える。実際、別の支援者が家に行ってみると、ゴミ屋敷なんです。通じないところがあると行ってみてわかります。そのようにコミュニケーションの問題がいろいろあります。支援者は、手話はできるし、手話通訳も兼ねながら話をする。でもなかなか通じないので支援困難事例として見るわけです。私は困難事例と見る前に、本人がどういう人なのか、今までの経緯などを聞きたいのです。けれども発達障害や精神的な課題な

どいろいろ持っているために関わりが持てないとか、午前の講演の中にもなかなか対人関係を作れないというような話がありましたね。それと同じような感じですか。やはり関係を作れない、こじれたまま重くなって私のところにいらっしゃる例がほとんどです。本人が1人で来る例は1割くらいでしょうか。9割は関係者が話を持ち込んできます。会社の社長や家族、通訳者、生活支援センター、病院などです。本人が自分で来る例は本当に少ないのが現状です。精神的課題を持っている、持っていないと気付くのは別に、何をやっても上手くいかない、何を言っても通じない、何をやってもトラブルになる、それはどうしてなのかと悩み、社会との関わりも嫌だ、怒って引きこもってしまう、または犯罪に手を染めてしまう、酒、パチンコなど何かに依存するという状態になってしまう。先程のゴミ屋敷の例もそうですが、ゴミを集めてきてしまう。周囲は迷惑だが、本人は意に介さずという状況です。持ち込まれた話は重いものばかりで悩みます。

ハローワークというところは仕事を探すだけでなく、障害者がスムーズに職場で定着できる、働けるようにサポートをすることも担っています。先程お話ししました職場定着支援というのは、仕事に入ってからだけではなく、入る前の生活支援も行っています。ところが残念なことに生活支援はハローワークの仕事ではありません。なので、他の相談支援所または障害者施設と繋げていくということになります。

相談はこのようなところ（パワーポイント8）から来ます。特に、最近多いと感じるのは、A型就労支援施設。B型就労支援施設とは別の新しい制度があります。2年くらい前からどんどん増えてきています。そこに入るろう者も増えていきます。しかし、A型の場合はジョブコーチが入りません。なので、A型には支援員がいるのですが、数が増えるのに支援員が追いつかない状況があり、経験のない支援員が支援を行うことが増えていきます。

A型に勤めているろう者が私のところに来て、支援員からいじめられた、という相談も受けています。A型は良い面もありますが、ろう者には情報保障がないので、なかなか馴染めないということもあります。特別支援学校からの依頼もあります。特別支援学校を卒業した生徒はハローワークを通さずに、学校の教員が会社と直接交渉をして採用するシステムになっています。職場でトラブルがあると教員が出向いて解決します。発達障害を持つ人達の場合は、これがなかなか根本的な解決にならないという状況があります。学校の教員も困って、ハローワークでも困って、障害者職業センターから相談が来るという例がたくさんあります。特別支援学校を卒業した子ども達は、社会に出て初めて自分の障害がはっきりと出てしまうという面があると思います。学校内では友達と教員だけですので、変なことをしてもさほど問題とはなりません。それが社会に出て同じようなことをすると誰も目をつぶってはくれません。どうして約束が守れないのかなどと怒られてしまいます。18歳で卒業し就労した生徒の母親が、1年後に相談にやってきました。娘の問題に手をこまねいていて、どうしてこのようになるのかわからないというので話を聞いてみました。当然職場ではいろいろなことを学ぶわけですが、その生徒さんは言葉もしゃべれるし書くこともできる、筆談には問題ありません。言われたことはわかるのですが、同じところでミスを繰り返してしまいます。それで何度も怒られる。本人は、何回も怒られると母に訴える。また、他には、服装も問題があり、会社が身振りを交えて、その服はダメ、周囲の人の服を示して、これと同じようにするようにと説明しました。本人は、わかったとは言っていたのですが、翌日、上はきちんと他の人と同じようなシャツを着てきたのですが、下は相変わらずでした。社長は、「コミュニケーションというのは本人にとってわかることがコミュニケーションで、手話だけで通じるわけではないんですね」とおっしゃっていました。発達障害の特徴がある人だったので、服装の説明は、上のことだけではなく、下に身につけるものはどういう服がいいのか、ブレスレット、帽子と一つ一つすべて説明が必要でした。何度も繰り返し説明してようやく理解してもらえました。会社の社長とも話をし、怒るだけでは効果がないということはわかっていただけました。サポートをしながらハローワークの職員、ろうあ会館の専門職などみんな一緒に話をすることも何回かありました。発達障害だから配慮をお願いしますというだけではなかなか難しいものです。雇う側も何を配慮したらいいのかわかりません。ですので、働く状況を見て、話しを聞いて、本人の生活背景も大切にしたい支援が必要です。ハローワークのサポートだけでは難しいので生活支援員と連携をしながら、生活面と就労面は車の両輪としてサポートすることが増えてきたと感じています。

ジョブコーチについて、大阪ろうあ会館の場合は、手話ができる人が二人いて会社訪問などをおこなっています。訪問先でトラブルがあって、それが私のところに持ち込まれることがあります。発達障害が疑われる場合は、私も会社に同行して、本人に会うこともあります。すると視線が定まらず話がなかなか通じない人でした。会社の規則が守れないという会社の方からのお話で、守れることと守れないことがあるとのことでした。職場は銀行でセキュリティが厳しく、出入り口では警備員が鞆のチェックをします。警備員の前では鞆を開けなければならないのですが、その人は鞆を開けないので、警備員ともめてしまうということでした。その度に何度も通訳を呼ぶ

ことになってしまいます。ジョブコーチも手に負えず、私が出向いたわけですが、本人の言い分は鞆は個人のものだから開けたくないとのことでした。

発達障害者に対して、治そうとしたり、変えようとすることはできません。本人が働きやすい職場環境を私達が整える、どう、整えるか相談する。ハローワークワークでできること、ジョブコーチができること、センターとしてできることがありますので、連携して進めています。

大阪障害者職業センターでは職業評価を行っています。本人が働きにくい面が何かを検査して調べることができ、それをふまえて支援をしていきます。本人の行動に対して、我々が持っている社会的通念、常識で判断してしまっているのではないかと思うことがあります。私達の常識を彼らに合わせてもらうようにしているのではないかと思うのです。タバコが好きで一日3本吸う人がいました。肺に悪いから1本に減らして欲しいといっても、それはもちろん聞き入れない。すると常識を守れない人と決めつけてしまいます。しかし、そうではなかった。よく聞くと、昼間だけ3本吸って、夜は吸わない。それならいいと褒めることができました。本人が持つ主体性、言葉の数、幅、先程の合った語彙も把握していきながら対話をしていくと、本人が求めていること、本人として当たり前のことが私達こちら側には合わない、ということがわかります。支援者の常識を押し付けていいのか、また、という時にどうするのかと考えさせられます。

もう一つ、発達障害の事例です。アスペルガーの診断を受けた40代の女性です。職場で対人関係のトラブルがあり、会社としても困っていました。親との関係がキーワードでした。職場定着支援として親の理解を得たいと話をしようとしたのですが、親は、もう娘は40歳にもなるし、自分も80歳だし親が出る必要はないと断りました。サポートする立場としては親との関係を作れなくなってしまい、当事者の対人関係のこじれの修正が難しくなっています。

現場ではいろんなことがあり、ここでは話さきれず、今日ご紹介したのはほんの一部です。

最後に、関わりの力を育てることの大切さと難しさです。関わりの力は支援者が作ってあげるのではなく、本人が持てる範囲で持てるように力を身につけてもらうためにどういう配慮ができるかをいつも考えなければならないと思っています。

大阪では、声が出せて筆談も上手な人は仕事力が高いと見られる、そういう見方がまだまだ多いです。そういう場合はハローワークと一緒に動きながら、発達障害の聴覚障害者は、特殊かもしれないが、例えば、仕事に対して非常に真面目、休みもなく通っているなど、いい面を出して、会社に理解を求めて話していくなど、毎日、あちこち出向いて頑張っています。これで終わります。ありがとうございました。

■質疑応答

質問者／賀屋さんにお聞きします。客観的、専門的立場での援助ができる、コメントができるスクールカウンセラーって大切だと日々思っています。

いくつか課題があるとのことでしたね。6年毎の交替があるため同じポジションにいられないということについて問題提起してらっしゃるかどうかお伺いしたいと思います。

賀屋／ご質問ありがとうございます。6年毎の異動という課題は教育委員会にもあげております。もう一つはこのスクールカウンセラーという制度と言いますが、契約自体が一年毎なんです。ご存じない方のほうが多いと思います。これ自体も課題ではありまして、継続して雇用していただけるように、また、週にいける回数を増やしていただけないかということは都道府県にもお願いをしています。少しずつ学校にも働きかけて学校や保護者の方からも声をいただけるようお願い

している段階です。予算の兼ね合いですとか、成果も短期的に出せる仕事ではないので、その部分も課題があるのでどういうふうに成果を出していけばいいかというのもあります。

質問者／協力機関との連携についてのお話もありましたが、江戸川でスクールカウンセラーの先生達と月に1回勉強会をやっています。結果的にいろんな人が学ぶということもあって、今個人情報非常に難しい時代になったんですが、連携することで早期に問題解決できることもあるので、場を離れたところで連携を持っているかどうかと、スクールカウンセラー協会みたいな組織はあるのでしょうか。もしあれば問題等をそういうところで吸い上げることはあるのでしょうか。

賀屋／ご質問ありがとうございます。一つ目の連携に関して、カウンセラーの中でも意見が分かれているところです。個人情報、守秘義務というところでなかなか情報を出せないという部分もあるのですが、私自身の考えはクライアントの課題を解決したり、改善に向かったりしていく中で、関係機関と連携する時には、集団守秘を用いて、ここの部分に関しては情報を出さずに裏で動くことがあります。できる場合はご本人の許可をとって、みんなで一緒にやっていきましょうということを経験しながらやっていくと結果的には情報を共有しやすいと思っています。なので、ご本人に許可を得ながら、緊急性がある場合は集団守秘を使って動くというやり方をします。

2点目ですが、スクールカウンセラーの団体があるかということですが、これも大きな課題です。スクールカウンセラーは非常勤でかつ、一人職場とよく言われます。学校には基本的にカウンセラーは1人なので、一人ぼっちで動く部分が多いです。少しずつ、区や市で集まる機会を作るようになってきている実態もあるのですが、あくまで市区町村での小さな自治体で動ける範囲でやっているもので、私のように東京都のカウンセラーになると千人規模になるので問題共有は難しいですね。ただ、全国でスクールカウンセラーをやっている仲間はたくさんいるので年に1回集まって課題を共有し、どういうふうに活動していくのかを今考えているところです。

質問者／稲さんに質問です。差し支えない範囲で結構なんですが、鞆の中を自分のだから見せません、と言った方について、事の顛末がどのようになったのか、教えてください。

稲／彼女は自分のルールにこだわって、自分のことは他の人には見せない、盗られるから気をつけなさいと誰かに言われたのを覚えていたため、「見せない」というルールを持っていました。会社に採用されて1回目の時はジョブコーチと一緒にしたので、問題はありませんでした。ジョブコーチが見せてといたら簡単に見せました。ジョブコーチの期間が終わって1人で出勤した時には、会社から見せてと言われても見せない。どうして自分のものを見せなければならないのか、警備の人ではなく、ジョブコーチに見せていたという意味だったのか、その後、職場に入って挨拶をして仕事が始まって、勤務終了まで見ていた時に、おかしいと思うところがありました。例えば仕事の途中で席を立って、別の席に座って仕事をする、しばらくすると別の席に移動する。それを見ていて、落ちつかないのかと思いました。それを上司に話すと、「そうなんです。ちょっとおかしいと思っていました」と言われました。会社とジョブコーチと私で話しをしました。発達障害にあてはまると思われる行動が多々あり、ジョブコーチから会社にアドバイスして、会社から親に連絡して来てもらいました。その時に、親から発達障害ということを知ったことで、会社も対処を考えてくれました。鞆の方は、やはり、開けてみせることができませんでしたので、警備の方に顔を覚えてもらい、顔パスにしてもらっています。

【実践報告】

(3) 「実践例報告 精神保健福祉相談支援事業の取り組みから」

森 せい子

聴覚障害者情報文化センター 施設長
精神保健福祉士・介護支援専門員

こんにちは。森です。今日の研修会のテーマであります発達障害ケースです。ケースがたくさんある中で、発達障害者支援という路線に乗って、時間をかけて自覚もでき、周りの理解も始まり、まあまあスムーズに歩き始めたケースを簡単にお伝えしたいと思います。

最初に相談にお見えになるまで、ずっと課題を背負いながら我慢されてきたのですが、聴覚障害の面では非常に軽く、障害に周りも気付かないし、本人も自分の障害というのをきちんと教わらないで聴覚障害ということもよくわからないまま育った方のケースです。聞こえの問題と、人と関わるのが苦手という課題がありました。私のところにご縁があって、ご家族と一緒ににお見えになって、第一声が出るまでに時間がすごくかかりました。やっと、ご本人とお話が始まって、長い間本当は辛かったとか、苦しかったとか、誰にも言えないできたと、ぼろぼろと話が出ていき、少しずつ、関わりを持ち始めました。

その方の場合、例えば、みんな楽しそうに何かワイワイ話している。何を話しているかわからないから苦しいのではなくて、そういう場面を見ただけで、もう、その場から消えたいみたいな苦しい気持ちが生まれるということをしづつ話してくれるようになりました。時間がかかりました。1時間ほとんど言葉の交換がない時もありました。向こうは黙っている。こっちも黙っている。こちらが目をおとすと、じいっと見て、こちらが目を上げると視線を逸らす。そんな繰り返しの中で、言葉によらない表情やしぐさとかボディランゲージなどを通して、空気を作ったり、空間を共有しました。もしかしたら、発達障害向け対応スキルが必要かなと思いつつ、その方との面接を重ねていきました。

発達障害者支援センターという専門機関が東京都に1箇所ありますが、そこに電話して、情報収集し、親御さんに状態を説明しました。支援センターで具体的に何をやっているかという、相談以外には特に明確な支援像がつかめない感じでした。更に聴覚障害の問題があると話す支援センター職員の反応が悪くなりました。

まず、ご家族・ご両親との面接の場で、やんわりと発達障害の話をしましたら、やんわりと真綿にくるんだような言い方で話したのですが、それだけでも、心外という気持ちが強く伝わってきました。実は、幼いころからほかの子と違うなと思ってきたが、障害者なんて本人に告げること等できないというようなこともおっしゃっていました。親御さん達の思いとか考えとか、時間をかけてお話を伺って、とにかく、対応する時間をたくさんたくさん取りました。一般的な情報として発達障害に関する情報をプリントして、チェック項目をなぞりながら具体的に伺ってみると、ほとんどできないとおっしゃるのです。今はそのような傾向がある方に支援が受けられますよ、と言うと、やっと専門的な支援を考えてくださるようになりました。すぐに病院ではなく、発達障害支援センターにきちんと相談に行った上で、病院に繋がって、今は、本人は、その病院の中の仕組みに支えられています。親の期待に全然応えられなくて申し訳ないとか、親の期待に



近づけない自分が情けなくて、苦しんでいたわけです。私との信頼関係を作るまでも長い時間を必要としました。手話通訳の同席も拒みませんでしたのでしばらくは筆談でした。なので、面談は全部、筆談。私は殴り書きみたいな汚い字を書くんですけど、向こうはピシーと綺麗に書いて、私が書くと、冷ややか〜な目で見られたりして。字が汚くてごめんなさいとか、漢字を教えてもらったりとか、そんなやり取りの中で、森さんは聴覚障害が重いんだな、可哀想だな、ちょっと話してみるかな、みたいなそういう気持ちからか少しずつ心を開いてくれたような気がします。

聴覚障害の「障害」、発達障害の「障害」という言葉や、精神科、病院などのイメージが本人も家族もすごく抵抗があったので、そこらへんを乗り越える、これが意外と、その前のプロセスに時間をかけてじっくり進めたからか、親御さんの協力もあり、するりと乗り越えて、「病院へ行ってきました」「ほっとしました」と報告が入りました。本人曰く「これからの自分の道が見えました」とのことで、嬉しい驚きでした。

支援プロセスの中に、「人と会えない」という部分をボランティアとか手話通訳とか、いろいろな方達に少しずつ繋いだり、お手玉をしたりもしました。そんなことを混ぜながら、やってきました。

やはり、自分がダメだと、自分ができない、なんでも不安でしょうがないし、いつもいつも別れの時には、ぎこちない挨拶して帰るんですけど、それはそれでいいんじゃないということで、そのままを受け入れながらできることを増やしていけたらよいなど、細く長く応援し続けていきたいと思っています。

■発達障害を考える

私は、発達障害という症候群はとても幅が広いと思うのですが、お会いした方々は知的レベルの高い「ろう」とか、知的レベルの高い「難聴」「中失」の方が多いような感じがするんですね。いろいろな要素をミックスした例が多すぎて、今日は時間の関係で報告できませんが、取り組みの一部でも報告ができたらいいなと思っています。

まず、信頼関係作りに年単位を要しました。1週間に1回くらいの面接です。そして、変わってきたのは、その方の緊張がほぐれていったということです。リラックスしてくれるような、まだまだですけど。そして、今日は午前中の濱田先生のご講演も本当に素晴らしくて、その中のお話で、本人と周りとの関わり、環境がすごく大事ということを改めて感じました。私達支援者としては、温かい目を見て、せかせかせずに、その人のペースで時間の枠をきちんと作って、人としての繋がりを積み重ねていくことのお手伝いをしていくことが役割だと思います。今回の例を通して、これから押し寄せてくるだろう発達障害の視点からの支援の準備ができたかなと、それは神様からのプレゼントだったのかなというふうに思いました。片倉先生がいつも教えてくださいますが、私達含めみんな「発達デコボコ」ですし、性質は違いますので、それが社会の中で本人が苦しくて上手くいかない時に、やっぱり一人で悩むのではなくて、みんなで一緒に支えあっていけたらいいなと思います。

■活動支援 映像報告

私共のセンターでは、毎週土曜日、精神障害とか精神の課題を抱える方達のグループワークをやっています。その様子を、今日もささやかながら報告したいと思います。映像を流します。私達は当事者だけに目がいきがちですけれども、その方の環境とか、ご家族の方への理解もきちんとしなければならぬし、そのご家族の力も借りながら、一緒に悩みながらご本人の様子が少し

でも良くなっていくということを目指さなければならないと思っています。この映像には当センターの家族教室の参加者にインタビューをして、ご家族の思いを語っていただいた部分があります。それから、資料にはこの家族教室に参加できなかった方々の文章も載せています。では映像をご覧くださいと思います。

■映像1 家族へのインタビュー「家族の思い」

・「私一人じゃないんだ」という気持ちの楽さができて、毎回、参加者に会うのが楽しみになって、やっぱり遠慮なくできて、すごく救われる場所になっています。ここに参加することで、とても落ち着くことができますし、いろんな立場のお母さん方とお話ができます。素晴らしい場だと思っておりますので、こういう場が増えて欲しいと思います。また、この家族教室がずっと続いて欲しいと切に願います。

・中途失聴と精神的なものに気付くまで、10年くらいかかっています。心の病を持っている人が行く場所がそもそも少ない中で、また、耳が聞こえないということで更に絞られて、でも、聴覚と精神障害について話ができる場を知り、喜びを感じました。前から、娘がおかしいというか、今も自分で病気を認められないのですけれど、いろいろな気付かされたというか、情報があって良かったです。子どもが聴覚障害で苦労して育てていて、今、また別の問題が起きてしまって、それが何が原因なのか？今、本人は生きづらい状況ですので、なんとか、それが解決できたらと。これからもこういう会がもっと頻繁にあれば、気持ちが楽になります。

・気難しい子どもで、どこに行くこともできず、ここに来ることだけが楽しみなんですね。朝もグズグズ言うんですけど、上機嫌で帰ってきてくれて、いろいろ話してくれるので、ホッとしています。本人は勤めていないので、ほとんど家にいるわけです。週に1・2回、外出してくれば、私自身ほっとできるんですけども、その時間だけは。娘がいるからって、どうってことはないんですけど。私の場合は、子どもがいるとなんかずっと緊張している状態なんですね。ですから、助かっています。

■映像2 こころのグループワーク映像「メンバーの思い」

・私がグループワークの活動で、一番参加したいのはSSTです。自分は精神的に幼くて、大人になるのが難しいと思っています。同級生と比べると、自分は子どもだなあと、思います。社会で困ることがたくさんあるから。もしかしたら、自然のことかもしれないけど、ここで練習できるのが良いと思います。

・今では、「私は耳が悪いです」ということや、耳につけている補聴器を見られても、平気になりました。自分にとって、良い場所です。参加者も個性があって、とても良いと思う。自分にとって良い場所です。いろいろな人に会えて、視野が広がると思う。

・人と自分との距離を置くことを学びました。人との交流の方法。例えば、話したいと思った相手の反応が悪い時は、相手の気持ちを考え、自分から引くことを学びました。それが社会参加に繋がると思いました。ここに来ると元気になります。

・いろいろ学べること。下手だけど、コミュニケーションをとって、ここに来ると悩みとか話せます。

■映像2 こころのグループワーク映像「活動の様子」

本日の練習は、「無視された時、どうするか？」。メンバーからたくさん意見が出ました。

ロールプレイを通して、無視されたことに理由があることを知ります。この日は相談役メンバーが大変上手な対応をしました。練習が終わると、各自、ノートに記録します。ノート作りも真剣です。

レクリエーションの一コマ。遊びとなると、目の色が変わるメンバー。この日は UNO を楽しみました。いらなくなった T シャツを裁断して、布わらじ作りです。素敵なわらじが編みあがっていきます。

野外活動です。双葉会診療所院長の手話のできる精神科医片倉先生の畑にみんなで押しかけました。とれたての野菜をみんなで料理しました。みんな夢中で食べ始めます。おいしいね。日頃からお世話になっている先生にメンバーからプレゼントです。今日は、農作業体験をさせていただき、ありがとうございました。たくさんのおいしい野菜をありがとうございました。わらじに先生の足が入って良かったあ。雨の時のために、先生が用意してくださったゲームです。ならば景品は、レトルトカレーとチョコレート。名付けて、カレーボーリング。見事、景品をゲットです、片倉先生と片倉先生のご家族。J-CODA の皆さん。ボランティアスタッフの皆さん。たくさんの方に支えていただきました。

J-CODA というのは、聞こえない親から生まれた聞こえる子ども。コーダと言います。コーダの全国組織で、そのコーダの皆さんがボランティアでお手伝いくださいました。たくさんの方に支えていただきました。以上報告を終わります。ありがとうございました。

【講評】

司会／それでは、講評をお願いしたいとします。長年、聴覚障害者の精神福祉について関わってくださった先生がお出でですのでお願いします。まず、元筑波大学大学院教授の奥野英子様、講評をお願いいたします。

奥野／講評をする機会をいただきまして、ありがとうございました。聴覚障害者の精神保健福祉を考える研修会5回目ということで、今日の発表内容も本当に素晴らしい内容でした。今回は5名の先生がたが、実際にご自分が取り組んでらっしゃる実践を通してお話してくださいました。それぞれの内容について、学ぶべきことがたくさんあって素晴らしい内容でした。

また、このような素晴らしい企画を立ててくださいました情報文化センターの職員の皆様、また、森さん達に感謝したいと思います。更に、3名の手話通訳者、それから4～5名のパソコン通訳の方、この方達も日本一の能力を持った方達が支援してくださっていると思いました。そういう意味で、情報保障に関わってくださった皆様に心からお礼を申し上げます。

次に、ちょっと辛口のコメントをさせていただきたいと思います。今回、5名の先生方が素晴らしい内容を発表してくださいました。実践の場になかった者にとっては、少し難しい内容だったと思います。発表の内容について、ほとんどの皆様がパワーポイントの資料をご用意くださいましたが、そのパワーポイントの内容とここで話してくださった内容とが少し違っているとか、パワーポイントになかったり、話さない内容がこのパワーポイントの資料に入っていたりということもありました。参加者の方が真剣に聞いて、そこからたくさんのことを学びたいと思っていますので、話して下さっている内容がパワーポイントになかったりしたことについては、残念だなと思いました。その原因は、きっと、事務局に印刷するものを送った後、内容を精査された結果、より良い内容でお話をしてくださったせいだとは思いますが、やはり、話して下さった内容とぴったり合ったパワーポイントを示していただけると、参加している者にとっては、より分かりやすいように感じました。

次に、聴覚障害のある方への相談支援という事業が全国的にも、まだ十分に行われていない状況についてです。今後、どのような体制になるのかなど私はいつも思っていますが、全国の都道府県にある聴覚障害者情報提供施設において、聴覚障害のある方への相談支援をしていくことが日本の制度としては、一番良いかもしれません。しかし、各県に1箇所しかないという中では十分ではなく、また、障害者総合支援法になってから、相談支援事業が様々な場で行われるようになっていますが、その事業の中で聴覚障害のある方への相談支援がきちんとできる体制がこれからできていかなければいけないと思います。

単に聴覚障害のある方に対してだけではなく、例えば、知的障害を併せ持つ方、精神障害を併せ持つ方、また、今回のテーマにあります発達障害を持つ方、更には、高次脳機能障害を持つ方というように、聴覚障害のうえに、更に他の障害を併せ持つ方への相談支援は本当に難しいと思います。これらについて、今後、日本全国で、そのシステム作りが非常に重要だと思いますので、それに向けて関係機関が協議する必要があると思います。今、日本は経済的に非常に厳しい状況ですから難しい面がありますが、全国で聴覚障害を持ちながら、更に別の障害を併せ持った方達への支援体制を作るということと、そこで相談にあたる方達の能力を高めていくこと、これが非常に重要な課題だと思います。素人では相談支援はできないので、専門家としての資格を持った相談支援ができる人、聴覚障害のある方がプロの相談員になることが、一番理想的だと思います。手話ができない相談支援員に対しては手話通訳をつけるとか、いろいろ考えていくことが、いっ

ばいあると思います。また、いろいろな事例を通して、皆さんが支援をする力を身につけるために、この研修会は今後も重要な役割を持っていると思い、頑張っけて欲しいと思います。それでは、私の講評は以上とさせていただきます。ありがとうございました。

司会／ありがとうございました。もうひと方、講評をいただきたいと思います。一般社団法人ゆうわ代表筒井優子様、お願いいたします。

筒井／今日は、一日ありがとうございました。今、一番、聴覚障害者にとって話題となっている発達障害と適応障害を主題テーマに挙げられていたというのは、とても良かったと思います。今回の企画、素晴らしかったですね。

前半の濱田先生の基調講演の中には、問題点が幅広く網羅されて、臨床経験にダンボでしたっけ？具体的な活動支援の内容を細かくしていただいたというのは、私達臨床に携わっている者としては非常に役に立ち、明日からの臨床に活かれます。それから 10 年経っている経過、これから成人になる方もおり、あと何年後かに再度発表していただけたらいいなと思いました。

午後の4つのテーマ、実践報告で 30 分ずつ3時間でしたが、各場所、ポジションにおいて、その専門性が違うところで、いろんな援助がされていることを具体的に提示していただけて、とても良かったなと思っております。できたら、今度、具体的な問題について皆さんで現場で抱えている問題を提起していただき、話し合いができたならもっと実り多い研修会になったのではないかと思います。以上です。

司会／どうもありがとうございました。先程、質問で第一人、手が挙がっていたようです。高岡さん、もしございましたらお願いします。

高岡／皆さん、お疲れ様です。提供員の皆様もありがとうございました。私自身が聴覚障害者、乳児の時から難聴ですので、私も発達障害に該当するのか、あれもそうだな、あれもそうだな、と思うことがいっぱいありまして、どう受け止めたらいいのか、ちょっとうーん、となっております。

私は、東京の手話通訳等派遣センターでセンター長をしております。来年の春から、障害者差別禁止法とか改正障害者雇用促進法が施行されまして、各自治体では、意思疎通支援事業の派遣予算を増やすとか、意思疎通以外の通訳の配置とか、いろいろと予算も工夫しているよ、というようにことを耳にしております。皆様のお仕事の中で、通訳の確保でどのように苦勞されているのか、どの制度を使えばいいのか、いろいろと悩まれていることと思うのですが、そういったことをどんどんお寄せいただくと、制度の補完の方法ですとか、新しい制度を求める必要性があるとか、いろいろなことがわかってきますので、皆様のお仕事に役に立つような派遣、それから制度作りといったものができるように私も考えていきたいと思っております。何かありましたら、森さんのほうへお寄せいただいております。よろしく申し上げます。

【閉会挨拶】

司会／ありがとうございました。それでは最後に、聴力障害者情報文化センター聴覚障害者情報提供施設施設長 森せい子より閉会の挨拶をさせていただきたいと思います。

森／皆様、本当に今日一日お疲れ様でした。ありがとうございました。

お詫びしなければならないのですが、先程、奥野先生からご指摘いただきました点ですが、私の方から、まず、皆様にご説明しなければならないことが抜けておりました。大変申し訳ありません。資料の中に載せてあるパワーポイントの内容とお話する内容が、ちょっと異なるということをご承知おきいただきたいということをお話することが漏れました。今後は、このようなことがないように、頑張りたいと思います。ありがとうございました。

今日は濱田先生の素晴らしいご講演から始まり、皆様にいろいろな現場での例などを聞いていただいて、見ていただいたわけですが、私はたくさんの方が、全国、北海道から九州まで、ここに駆けつけてくださるということが、本当に嬉しくて感謝の極みであります。こうした研修会や集まりをこれからも重ねていくことで、私達のネットワーク、それから、この研修会は専門職だけの集まりではありませんので、ご家族の立場の方や当事者の方、療育関係者の方や病院の方達、いろいろな方達が、自由に参加できる会ですので、そうした点を良い点として、これからもいろいろな立場の方が平等に学べる機会を作れるよう、頑張っていきたいと思います。

今日のテーマの発達障害。これは、小さい時からきちんと個別に見て、療育していく必要がある、それが大事だということをお話させていただきました。今日、ろう学校の先生達がいらっしゃいます。是非、目の前にいる子ども達の教育をよろしくお願いします。

私達は、今、本当は小さい時に、見て、守って、育てて療育していかなければならない子ども達を見落としてきたところがあると思います。そうした方達が大人になって、精神科の門を叩くという例で、問題として、トラブルとなってから相談に連れて来られるのではなくて、予防ができればいいですね。今、成人になっている聴覚障害者で発達障害の問題で本当に苦しんでいる方達のケアは、今、専門職が本当に日夜頑張っているところです。生まれてくる子どもさん達を、ろう学校の先生、難聴学校のカウンセラーの先生、どうぞよろしく申し上げますと言いたいです。

これからも、発達障害の問題を持つ聴覚障害者のライフステージも 20代、30代、40代～50、60、70と、いろいろと変わっていきますが、「聴覚障害」理解と療育・支援が大事なポイント、これをきちんと見てあげる必要があるという濱田先生の教えを基本に頭に入れて支援していきたいと思いました。

今日は、本当にありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願いします。

【資料編】

資料1 【基調講演】

「発達障害を有する聴覚障害者の困難と支援」

濱田 豊彦

聴覚障害者の精神保健福祉を考える研修会2015
2015. 8. 29

発達障害を有する聴覚障害者の 困難と支援 ～聴覚障害者の発達と適応障害を考える～

東京学芸大学
濱田 豊彦

1

本日の内容

- 1. 聴覚障害が発達に及ぼす影響
- 2. どのくらいの割合で該当？
- 3. ASD(自閉スペクトラム症)を取り上げて
- 4. 支援のために知っておきたい特徴
- 5. 事例とその指導・支援

2

聴覚障害が発達に及ぼす影響

社会性と言語獲得

3

社会性とは

- 人間関係を形成し、円滑に維持するための社会生活を送る上で欠かせない特質
- 文化や発達段階に応じて求められる対人的行動
- 「その場の空気が読めること」

↓

人と人が関わる中で無意図的に身につける

4

コミュニケーションに制限のある環境

多様な集団への参加不足を招きやすい

↓

対人経験の乏しさを招きやすい

小4になっても泣いている……
ストレートな物言い……
お山の大将

5

言語獲得の本質

妻(は)帰ったら、君に電話をかけるね

妻(が)帰ったら、君に電話をかけるね

電話をかける人がどうしてかわるの???

学習では説明できない無意識的な言語ルール
の獲得こそが言語獲得の本質

6

「言語獲得」の条件

「言語獲得」の条件は以下の3つ

- 1) 周囲に言語があふれている
- 2) 言語獲得できる知的能力がある
- 3) その言語受容することができる

7

「9歳の峠」

「聾児の学力水準は普通児なみのスケールでみると、9歳レベルの峠で疲労こんぱいしている」

東京教育大学附属聾学校長
萩原浅五郎(1964)

8

9歳(小学3, 4年)になると

- 国語: 日常的に経験しない事象(虫の世界、アンビバレンスな心情)など
- 算数: 分数、余りのある割り算など
文章題の複雑に
- 抽象的で直感的には、理解しづらい
- 言葉から新しい知識を得る

9

ことばの力に後押しされながら 「もう一人の自分」が存在するように

ことばの力が育つことで、心の中で試行錯誤する力(ああでもない、こうでもないと考える力)がみにつく。
前進しようとする自分とそれに抑制をかけるもう一人の自分が存在するように。

「もう一人の自分」の存在

→自分以外の視点(客観性)を生む

友達の視線が気になる(劣等感、優越感)

他人の心を推量し、共感性(思いやり)も強まる

10

どのくらいの割合で該当?

全国ろう学校調査から

11

小中学部

2002年に文部科学省が実施した、アンケート(通常の学級に6.3%)を聾学校の子どもたちに校長会と共同で実施。

有効回答数: ろう学校の単一障害学級に在籍し、2年以上の遅れのある者や保護者が外国籍等の者を除いた、小学部が1172人、中学部が808人を対象。

12

学習面や行動面で著しい困難を示すと
担任教師が回答した児童生徒の割合

	聴覚障害児 2012	聴覚障害児 2007	聴児 (2002)
学習面か行動面で著しい困難を示す	34.2%	32.1%	6.3%
「聞く」「読む」「書く」「話す」「計算する」「推論する」に著しい困難を示す	28.9%	29.9%	4.5%
「不注意」又は「多動性-衝動性」に著しい困難を示す	10.8%	5.7%	2.5%
「対人関係やこだわり等」に著しい困難を示す	7.1%	4.8%	0.8%

13

特にASDを取り上げて

- 発達障害の中でも周囲が戸惑い困難を感じるのが、自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害(ASD)を伴うタイプ

14

問題を解決するには

その原因を特定し、
症状の解釈を確立し、
指導法・治療法を確立し、
予防法を確立すること

ASDの場合どれも明確になっていない

15

自閉症の頻度増加

1980年代までは10000人中4~5人

1990年代は10000人中15人程度

2010年代は10000人中27.3人

IQ70以上25.3%, 85以上13.7%

(横浜市総合リハビリテーションセンター)

16

増加の原因は未確定だが

サイトメガロウイルス(CMV)は胎児に、感音難聴の他、神経学的障害(自閉含む)を合併する。

CMV感染は、胎内感染では最も頻度の高い(1000人に1人)とされ、幼児の聴覚障害の約20%が先天性サイトメガロウイルス感染によるとも言われている。

CMVのノンキャリアが若年層に増加している

文献: 福田論(2010)ウイルス性難聴 小川郁編「よくわかる聴覚障害
—難聴と耳鳴のすべて」永井書店

17

自閉症の概念も時代と共に

- 症状の解釈も確定し切れていない

18

原因と概念(症状)の変遷

- 1943年、アメリカの児童精神科医である**レオ・カナー**が、「聡明な容貌・常同行動・高い記憶力・機械操作の愛好」などを特徴とする一群の幼児に対し、統合失調症の一症状を表す用語である「自閉」という言葉を用い、「自閉症」と名づけた。

→ことばがなく、生活水準の高い家庭の子ども11名。「先天的な知的障害があるわけではなく、心を閉ざしているだけであり、本来は聡明なのだろう」

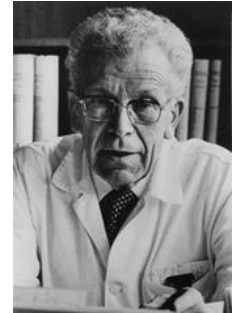


Leo Kanner (1955):
世界初の児童精神科医

19

アスペルガー障害

- 1944年、オーストリアのウィーン大学の小児科医**ハンス・アスペルガー**が、カナーの報告よりも一見軽度ではある(言語発達に遅れのない)が、共通点がある一群の子供たちのことを報告した。



Hans Asperger

- 敗戦国のため注目されず

20

自閉症の原因は、生得的な素質と育児環境との複合作用(カナー)

- 1960年代ごろまで、精神分析家のブルーノ・ベッテルハイムらにより後天的原因説(「冷蔵庫マザー」理論)が唱えられた。

しかし→

- ◆「絶対受容」という治療方針が取られたが治療効果なし
- ◆同じように育てられた兄弟の多くに自閉症なし

母親の性格や育て方が自閉症の原因ではない

21

原因は遺伝か？

1960年代後半、**ラター**によって、自閉症は先天性の脳障害説が発表。現在でも自閉症の原因は諸説あるが、主流はラターの説。

男女差(4:1)や保護者面接すると??

→近親者の発生頻度5~10倍

遺伝要因の強い脳の障害

(国立精神・神経センター)

22

スペクトラム(連続)

- 1980年頃までイギリスでは、知的障害のある自閉症児にしか福祉の手が差し伸べられていなかったが、自閉症の本質は知的障害や言語障害ではなく対人関係の障害であるため、高機能自閉症も支援の対象にするべきだと訴える。
- 当事者意識の中から真実が見えてくる



• Lorna Wing: 自閉症の娘がいる。アスペルガーの論文を英訳して再発表し、高機能自閉症の存在を広く知らせた

23

ウイングの「三つ組みの障害」

広く理解されている自閉症スペクトラム(ASD)の概念

ウイングの3つ組(三徴候)

1. 社会性の障害(対人関係の適応の障害)
2. コミュニケーションの障害(言語機能・語用論の障害)
3. 想像力の障害とこだわり行動・常同行動(興味関心が著しく限定されて同じような無意味な動作を反復する)

24

発達障害を合併する聴障児と接しているの印象

3つに大別

- 1) 人への関心弱く、常同行動や特定のものへの関心強いタイプ(見てすぐ分かる)
- 2) 人好きな面もあるが、自分の中のルールを押しつけるタイプ
- 3) 受動的には応じるタイプ

25

神経発達症群/神経発達障害群(DSM-5) (Neurodevelopmental Disorders) 2013年

1. 知的能力障害群
2. コミュニケーション症群/コミュニケーション障害群
3. 自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害
4. 注意欠如・多動症/注意欠如・多動性障害
5. 限局性学習症/限局性学習障害
6. 運動症群/運動障害群
7. チック症群/チック障害群
8. 他の神経発達症群/他の神経発達障害

26

DSM-5ではASDを

- 1. 社会的コミュニケーションおよび相互的関係性における持続的障害。
- 2. 興味関心の限定および反復的なこだわり行動・常同行動
- 3. 知覚異常.....知覚過敏性あるいは知覚鈍感性

※こだわり行動や興味関心の限局(想像力の障害)が目立たない症例については、自閉症スペクトラムとは分けて社会的コミュニケーション障害として診断するようになっている。

27

適応障害とは、

- ある特定の状況や出来事が、その人にとってとてもつらく耐えがたく感じられ、そのために気分や行動面に症状が現れるものです。たとえば憂うつな気分や不安感が強くなるため、涙もろくなったり、過剰に心配したり、神経が過敏になったりします。(厚生労働省)

ASDがあると、辛くなる原因が独特
辛さの表現が独特

↓
適切な対応が得られにくい

28

ASDの年齢ごとの特徴

国立精神・神経センター精神保健研究所(2010)

2歳まで:

運動面が順調に成長するのに対し、コミュニケーションと愛着の形成遅れる(共同注意、アイコンタクト)

6歳まで:

対人関係を維持できない(しない)。

機械的記憶が強くても非言語コミュ(表情など)苦手。

児童期:

特に3年生ころから自他の相異を意識しはじめる

29

年齢ごとの特徴

青年・成人(男):

- 思春期特有の帰属意識や一体感が、暗黙のルールを読み取るのが苦手なために形成できない。
- 引きこもり始める年齢のピーク(18-20歳)
- 自己愛や万能的なファンタジー
→ 自己の肥大化(ある種の防衛機制)

30

年齢ごとの特徴

- 青年期・成人(女) :
- 「話のタイミングが分からない」「何を話せばいいかが分からない」等のストレスあり。
- コミュニティへの参加できない。
- 困難が見えにくいことが多い。

31

特に自他の差異を感じる頃の対応大切

- みんなはもっと楽にコミュ出来ている
- 自分だけが出来ない
- どうして自分だけ薬を飲むのかな

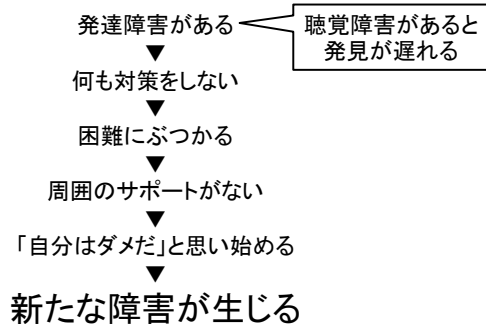
→トラブルの増加

「大切な存在として受けとめてもらう」経験
目標値を共有できる丁寧な関わり
(赤信号で止まれたことを褒めるのは難しい)
周囲への指導も重要(保護者も)

聴者の中で孤立していると、自他の差異を気づきにくい

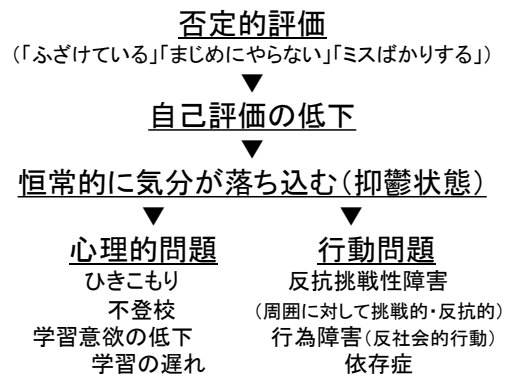
32

二次障害



33

二次障害



34

中等教育期ならではの課題

- 1) 二次障害を持つものが増加
発達障害が学習や集団参加の失敗経験の積み重ねを作る
→学習意欲の低下や集団への不適應にとどまらず、自己肯定感の低下や鬱も
- 2) 教科担任制: 情報の一元化が難しい
- 3) 資源の減少(通級指導教室等がない)
- 4) 小中では支援を受けた経験を持つ者も
- 5) 教員間の温度差が大きい

35

支援のために知っておきたい特徴

36

聴覚障害＋発達障害

聴覚障害：言語獲得や社会性の発達に影響有り



「言語の遅れ」「多動」「不注意」「対人・こだわり」等の原因
がつかみにくい



適切な対応が遅れる

まず従来の聴覚障害児教育の知見を大切に

37

ASDの合併事例の言語の特徴

- ASD様の困難を併せ持つ聴覚障害児A児とB児（共に聾学校小学5年で、主たるコミュニケーション手段は手話）の談話を分析した。
- 談話課題：ビデオからスクリプト作成して分析
 - 1) お風呂の入り方
 - 2) 4コマ漫画
 - 3) 状況絵

38



39

	ASD児の説明傾向チェックリスト	A児	B児
①	行動の事実を羅列		○
②	内容と関係のない不適切な発言が多い		○
③	部分的なエピソード・箇所だけの語り		○
④	擬音のみの表現		
⑤	動作主の明確に言及していない	○	○
⑥	誰の言動なのか、不明確	○	
⑦	時系列的な順序を示さない		○
⑧	心的状態の表出の少なさ	○	○

堀口昂誉(2014)

40

ASD合併児の指導は難しい

ソーシャルスキルトレーニングの場面を
自閉症スペクトラム(知的障害なし)の子どもで
聴覚障害の有無を比較してみた

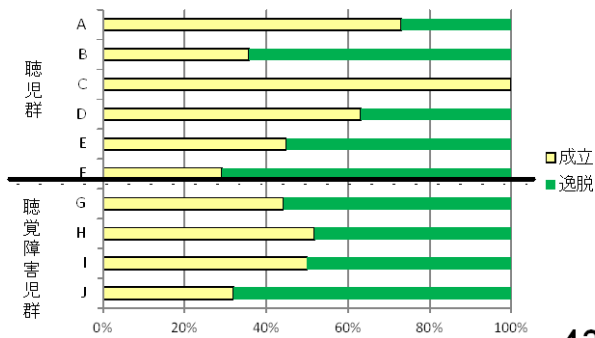
41

ソーシャルスキルトレーニング(SST)



42

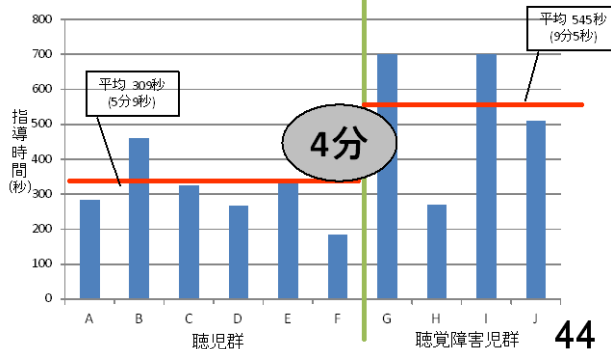
2) ソーシャルスキルトレーニング(SST)
やりとり成立率



43

1) SST指導場面における
聴児と聴覚障害児群の相違点

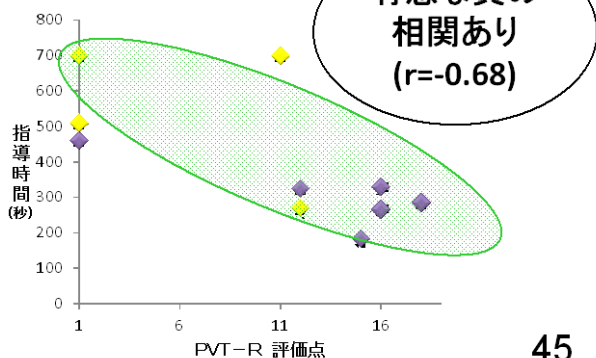
i) 指導時間



44

語彙力とSST指導における困難場面

指導時間



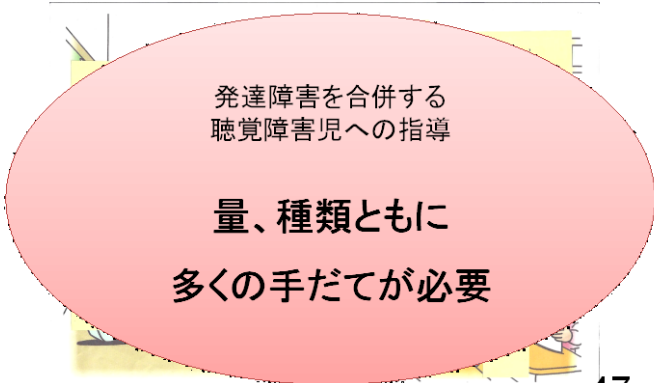
45

SST指導場面における聴児と聴覚障害児群の相違点
補助的な手立ての種類



46

SST指導場面における聴児と聴覚障害児群の相違点
補助的な手立ての種類



47

合併すると

- 言語手段の多様性
→単に視覚手段の導入と言うことなく、状況の中で最も確実な手段の選択を適宜する必要
→指導の手立てが多様で時間もかかる
- 言語イメージの乏しさが一層深刻
→聴障児の意味ネットワークは貧弱

48

語彙のイメージが乏しいと

は う ミ
し さ ズ
っ ぎ キ
た の さ
ん
よ う
う は
に

49

意味ネットワーク

ミズキさんは うさぎのように 走った

50

意味ネットワーク

ミズキさんは うさぎのように 走った

51

合併すると

- 言語手段の多様性
 - 単に視覚手段の導入と言うことでなく、状況の中で **最も確実な手段の選択**を適宜する必要
 - 指導の手立てが多様で時間もかかる
- 言語イメージの乏しさが一層深刻
 - 聴障児の**意味ネットワーク**は貧弱
 - 視線が合わない(読話、手話、テアアイコンタクト)
 - 共同注意ができないため一層言葉が育ちにくい
 - そのことに加え、状況の理解も悪くなる
 - 結果的に、**多面的に物事を捉えにくくなる**

52

多面的に捉えにくい

- 真っ直ぐに家に帰りなさい
- かき氷+頭痛い
- 一度叱られた人をトラウマの対象に

53

ASDへの支援の基本

54

ASDへの基本的な対応

- 1) 手順表など、視覚的な提示の活用を
- 2) スケジュールの尊重 予告を頻繁に行う
- 3) 学習手順、学習の場等を決めて指導する
(構造化)
- 4) 明確・具体的な言葉をかけを(×「ちょっと、この辺で待って」 ジョークが通じにくい)
- 5) 肯定表現で伝える(×「落ち着きがないね」)
- 6) 感覚過敏のあることに留意する

55

対人関係やコミュニケーション

- 自分の気持ちを表現するのが苦手
- 相手の気持ちになって考えるのが難しい
- 具体的な対人経験を積み重ねることで、コミュニケーション能力が育ち、自信を回復
(逆に失敗や叱責をトラウマにすることも)

56

こだわりの問題

- こだわりをゼロにすることは不可能。現実的に達成可能なところに目標を置く必要
→「やめなさい」というより、一定の時間に決まったスケジュールをこなすように習慣付けを
 - 急なスケジュールの変更は苦手
→できるだけ予告し、ていねいに説明を
- ※「しかたない」「まあ、いいか」に肯定的評価を

57

知覚の異常への対応

- 特定の音や味、触覚に敏感
→特定の音が苦手、偏食が強い、土が触れない(ヒートテック)など
- 過敏性が強いときには、当面それを避けさせることも必要(ストレスが強くなる)
→本人の声を聞くこと大切

58

障害認識(保護者の障害受容支援)

- ASDは、成長とともにその特徴が目立たなくなることはあっても、治癒するということはない
→認識することで適切な支援も求められる
- 本人にとっても楽であることが少なくない
- 親が子の障害を受け入れていることが大前提
→「(障害があっても)、お母さんはあなたを愛している」
「本当は、君は良い子なんだよ(窓際のトットちゃん)」
→保護者に、認識のメリットを伝える。
(家族の気づかない子どもの良い面をほめる)

59

ダンボでの、 教材の見せ方の工夫

60

SSTの教材やるとき

- 視覚情報が多すぎると、混乱したり、こだわりにつながったりする。

例1) 折り紙の動物園

例2) 絵の部分だけに注意を向けてしまい、全体を把握できない

61

SSTの教材やるとき

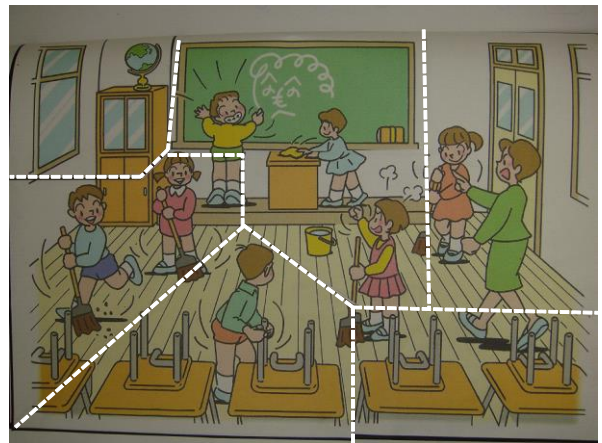


62



まず、周囲に目を向けさせて、そのあとテーマの部分を見せる

63



絵をカットして、部分で確認してから全体を……

64

気持ちには中間があるよ

気持ち 「イライラ (おこった時)」

レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5

怒っていることは分かってもどの程度かが適切に判断できない。
 他人に対しても表情では理解しにくい
 自身の子持ちも全か無かになりやすい。

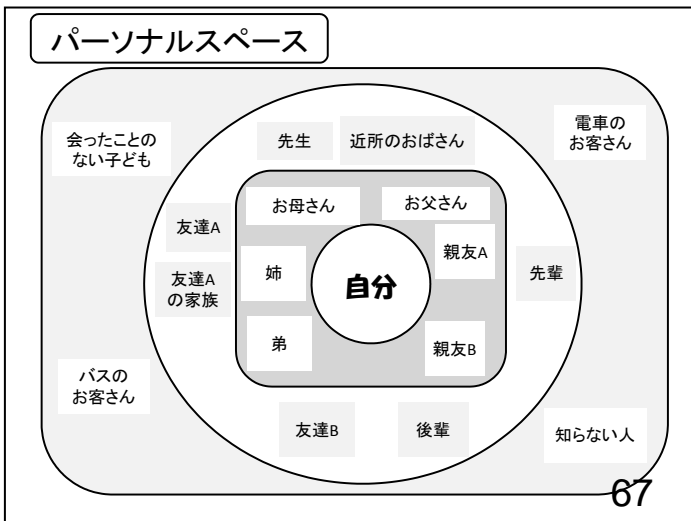
気持ちの程度を自己モニターして、
 その状況に応じた振る舞いを知識として学ぶ

65

パーソナルスペース

「朝、人にあつたら「おはよう」と言いましょう」というルールだけでは、誰にでも挨拶してしまい、うまく対応できない

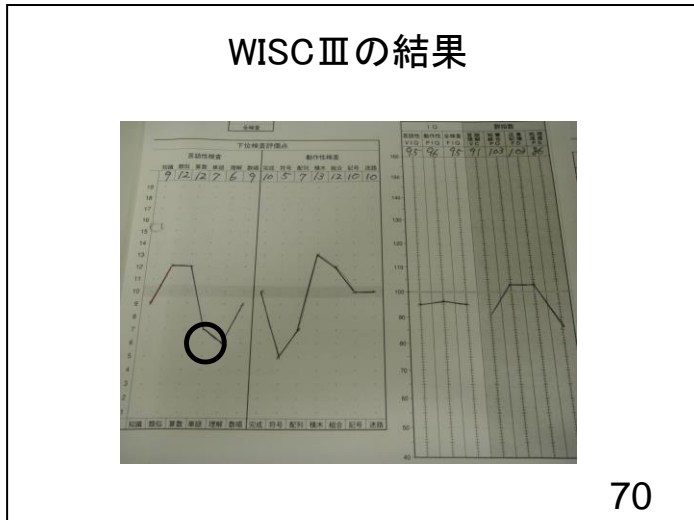
66



事例とその指導・支援

68

- ### A児
- 小学部4年 男児 両側約90dB
 - WISC-Ⅲ 動作性IQ「95」
言語性IQ「96」
群指数:「処理速度」若干弱い
 - アスペルガーの診断あり
 - 興味や知識の偏り(毒、死、深海魚)
 - 冗談や比喩が理解しにくい(友達を傷つける)
 - 共感性が乏しい
- 69



【1年目】「電車での一人通学を安全に行えるように、交通マナーやトラブルの対処法について知識を整理する」

日付	テーマ
12/2	学校へいこう 例) 信号が点滅している時はどうすればよいか等
12/23	電車内でお腹が痛くなったら席を譲る/譲られる 例) 赤ちゃんを抱いたお母さんがいた時はどうすればよいか等
1/20	急に電車が止まったら 例) 電車が動かなくなったらどうすればよいか等
2/17	友達と一緒に電車に乗っている時 例) 電車の中でおしゃべりする時の声の大きさ等
3/3	帰り道には誘惑がいっぱい 例) 買い食いをしたくなった時どうすればよいか等

聴覚障害のあるA児にも理解しやすく、興味を引く
⇒パワーポイントでの動画教材

71

- ### その後の状況
- 些細な気持ちの行き違いから、友達を傷つけることがままあったが、現在は全くない。
 - 状況を言語することで、正しく理解できるようになってきた。知識として心情の理解も。
 - 必ずしも正解がないような状況で、他人の考えを許容することは、まだ苦手。
- 環境が整うとIQが90以上の子ども達の多くは小学校を卒業する頃にかなり問題が軽減
- 72

ジョブコーチの活用(B児)

- 高等部2年 男児 重度難聴
- 主たるコミュニケーション手段は手話
- 言語力は高くないがPCを用いてのポスター作りなどの作業能力は高い
- 対人関係を築くのが苦手で、自分より弱い者への突然の暴力



- 学校も苦慮(隔離・反省文など)→効果無し



ジョブコーチを入れての支援会議

73

ジョブコーチの活用

※在校時からB児のことを知ってもらい、職場の人間関係調整を期待

- 聴覚障害者を対象とした手話に長けたジョブコーチはほとんどいない。



(学校等から)地域の障害者就労支援センター等に働きかけて聴覚障害に対応できる人材を育てる必要がある

74

なぜ聴覚障害児で困難のある者が多いのか？

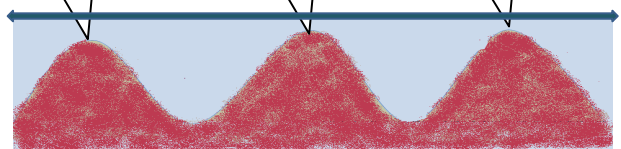
75

困難が顕在化してはじめて発達障害という

読み書きの苦手さも度を越さなければ……
登場人物の気持ちをよく分かって理解しているわね。

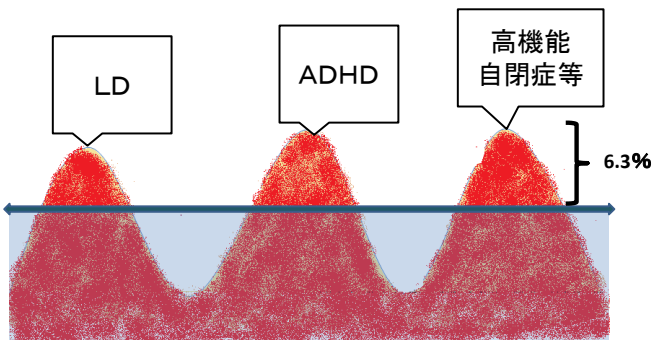
多動も度を越さなければ……
いろんなことに興味を持ってすてきなね。

こだわりも度を越さなければ……
興味を持ったことへの集中はすごいね！



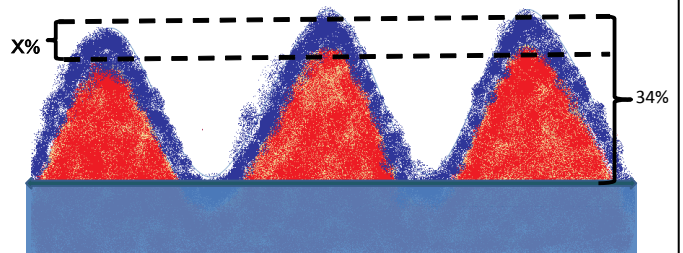
76

ところが顕在化してしまうと……



77

聴覚障害があると、適切な対応を受ける機会が制限され、発達障害を顕在化させる閾値が低くなるのではないかと。

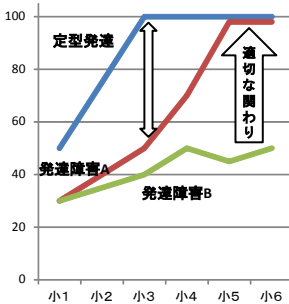


78

多様で適切な関わりが不足しがち

発達障害は無くなるわけではないが、成長とともに困難が表面化しなくなることは少なくない。

適切に関わってもらえる
(叱るべき時には叱る等)環境
を子どもの周囲に作る
気持ちを受けとめる環境



79

安全感・安心感の保持

- 「問題」は、排除したり除去したりすべきものではなく、子どもと環境(保護者や支援者・教師・友人など)との間に、なにかがうまくいっていないサイン(SOSの表現)だという視点が必要
- 認知発達だけでなく情緒的困難に注目
- 困難をはき出させられる, 関係とコミュニケーション方法の確立
- 情動・覚醒のコントロールには医療の協力も

80

当事者の声に耳を傾けて

私は自分の感情がはっきりわからない。理解もできなければ、表現もなかなかできない。
だからいつも、まわりの人たちに誤解されているという思い、なじめないという思いを味わってきた。(中略)私はただ、まわりの世界がなかなか把握できないだけなのだ。

私の障害、私の個性
(ウェンディ・ローソン)



81

資料2 【ミニレクチャー】

「成人聴覚障害者の適応障害・発達障害に向きあって 心理的支援の実践をもとに」

甲斐 更紗

聴覚障害者の精神保健福祉を考える研修会2015

成人聴覚障害者の 適応障害・発達 障害に向き合っ て—心理的支援の 実践をもとに—





甲斐更紗（かいさらさ）
九州大学基幹教育院

今日のストーリー

	内容
1. はじめに	自己紹介 自分の専門性
2. アセスメントと支援	やり残された発達課題 断片的なエピソードから
3. 事例	事例1 事例2
4. 具体的への直結	
5. 終わりに	

1. はじめに

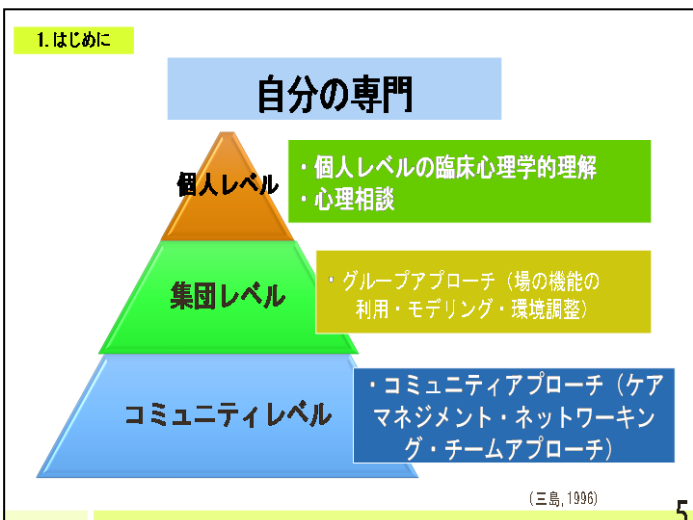
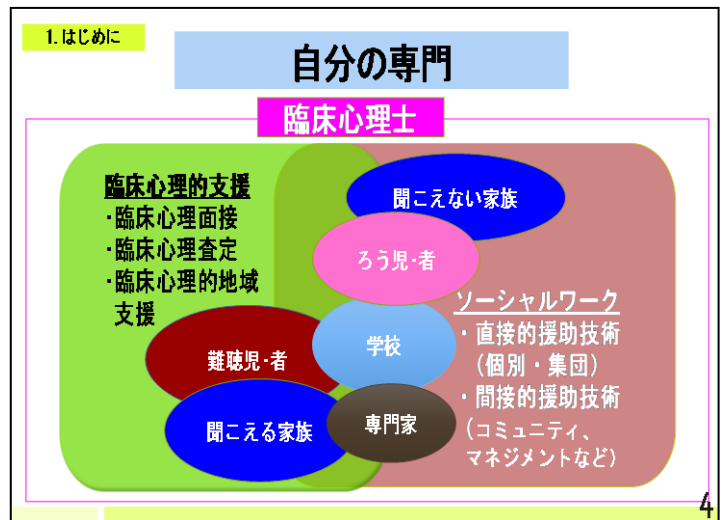
自己紹介

- 宮崎県出身/ろう学校育ち
臨床心理士/精神保健福祉士/
博士(学校教育学)
- 専門: 臨床心理学,
特別支援教育

現職:
九州大学基幹教育院 キャンパス
ライフ・健康支援センター
コミュニケーション・バリアフリー
支援室 特任助教

これまでの臨床歴:
情報提供施設, ろう学校,
大学附属センター療育, 病院



2. アセスメントと支援

やり残された発達課題～エピソード1～

どうして最初と最後だけ?

結果のみ知ればいいのか?

2. アセスメントと支援

やり残された発達課題

- 途中の経過が分からないまま処理してきた苦しみ
- 突然の感情の爆発

↓

- 自分の気持ちや自分が体験したことを他者に話す経験がない
- 自分がこれまで過ごしてきたものに対して意味があると認識していない

主体のなさ

7

2. アセスメントと支援

やり残された発達課題

発達段階	E. H. Eriksonの発達課題
乳児期	信頼 対 不信
幼児期	自律性 対 恥、疑惑
就学前期	自発性 対 罪悪感
学童期	勤勉性 対 劣等感
思春・青年期	同一性確立 対 同一性拡散
成人期	親密さ 対 孤独
中年期	生殖性 対 停滞
老人期	統合 対 絶望

主体性の再構成／主体性の確立

8

2. アセスメントと支援

断片的なエピソードから～エピソード2～

忘れた

順番が分からない

いつの話？

9


2. アセスメントと支援

断片的なエピソードから

- 時系列に語ることの難しさ

↓

- 結果を予測したり、時間的な順序の認識に問題がある？



10

2. アセスメントと支援

公的な仕組み → 発達障害児者としての支援が受けられるようにするためのアセスメント

- 医学的診断
- 医学的診断をサポートする心理的アセスメント (自閉症スペクトラム、ADHD、LDなどの障害種別ごとの診断、気づき、スクリーニング)

↓

診断がなくとも支援ニーズがある限り支援は必要 → 精神保健福祉手帳、療育手帳の取得、障害年金の受給、障害者福祉サービス利用

↓

実際に日常生活の中で困っていることを減じてQOLを高めるための有効な支援を実施するためのアセスメント

- 日常生活での適応行動の把握 (何ができ、何ができないか)
- 個別の支援計画の作成 (日常生活の暮らしのためのアセスメント)
- 障害特性の把握

↓

支援

↓

支援評価のアセスメントは定期的に行っていく → 実際の支援の有効性の評価

- 日常生活の適応行動の変化
- 主観的幸福感、QOL、他者とのつながりの変化など

(辻井,2013)

11

2. アセスメントと支援

公的な仕組み → 発達障害児者としての支援が受けられるようにするためのアセスメント

- 医学的診断
- 医学的診断をサポートする心理的アセスメント (自閉症スペクトラム、ADHD、LDなどの障害種別ごとの診断、気づき、スクリーニング)

↓

診断がなくとも支援ニーズがある限り支援は必要 → 精神保健福祉手帳、療育手帳の取得、障害年金の受給、障害者福祉サービス利用

↓

実際に日常生活の中で困っていることを減じてQOLを高めるための有効な支援を実施するためのアセスメント

- 日常生活での適応行動の把握 (何ができ、何ができないか)
- 個別の支援計画の作成 (日常生活の暮らしのためのアセスメント)
- 障害特性の把握

↓

支援

↓

支援評価のアセスメントは定期的に行っていく → 実際の支援の有効性の評価

- 日常生活の適応行動の変化
- 主観的幸福感、QOL、他者とのつながりの変化など

特性の理解

(辻井,2013)

12

3. 事例

事例 1 : 背景

- 事例紹介

13

3. 事例

事例 1 : 経過

- 自己理解への支援
- 自分の気持ちの表現
- 環境調整
- 家族とのかかわり

14

3. 事例

事例 2 : 背景

- 事例紹介

15

3. 事例

事例 2 :

職場におけるASD (PDD) 者の精神行動特性 (広沢, 2015)

	精神行動特性	周囲からの印象 (具体例)
1	人の気持ちを読めない	「人を人とも思わない」「暴君のようだ」
2	場の空気を読めない	「気が利かない」「嘘をつけない」「物事をダイレクトに言い過ぎる」
3	暗黙のルールがわからない	「自己流」
4	気持ちが自然に通じ合えない	「阿吽の呼吸が通じない」「理屈っぽい・理詰め」
5	自分というものが無い	「ただいるだけの人」「日和見」
6	言っていることがよくわからない	「だらだら喋る」「話が行ったり来たりする」「思ったことを何でも口にする」「ちぐはぐな会話」
7	きわめて不器用	「ひとつのことに集中すると他に目がいけない」「すぐに行動に移せない」
8	応用が利きにくい (経験化不全)	「不器用」「何度教えてもわからない」
9	機械のような人	「何でも言葉で確かめる」「メモへの嗜癖」「歩くコンピューター (リスト作り)」
10	きわめて頑な	「気が利かない」「拘り定規」

16

3. 事例

事例 2 :

職場におけるASD (PDD) 者の精神行動特性 (広沢, 2015)

	精神行動特性	周囲からの印象 (具体例)
1	人の気持ちを読めない	「人を人とも思わない」「暴君のようだ」
2	場の空気を読めない	「気が利かない」「嘘をつけない」「物事をダイレクトに言い過ぎる」
3	暗黙のルールがわからない	「自己流」
4	気持ちが自然に通じ合えない	「阿吽の呼吸が通じない」「理屈っぽい・理詰め」
5	自分というものが無い	「ただいるだけの人」「日和見」
6	言っていることがよくわからない	「だらだら喋る」「話が行ったり来たりする」「思ったことを何でも口にする」「ちぐはぐな会話」
7	きわめて不器用	「ひとつのことに集中すると他に目がいけない」「すぐに行動に移せない」
8	応用が利きにくい (経験化不全)	「不器用」「何度教えてもわからない」
9	機械のような人	「何でも言葉で確かめる」「メモへの嗜癖」「歩くコンピューター (リスト作り)」
10	きわめて頑な	「気が利かない」「拘り定規」

結果ではなく
プロセスをみて
いくこと

17

3. 事例

事例 2 : 経過

- 計画能力育成を目的とした個別支援
- 環境調整
独特な感覚の表現 ⇨ やわらかい言い方へ

18

4. 具体的への直結

- 作られた発達障害？作られた知的障害？作られた精神障害？



- 間接的なコミュニケーション
- ずれに気づくことと見立てること
- 具体的な物事を通したりフレクシオン
- 「暗黙のルール」ではなく、明示すべきことを明示した上で、質の高い交流が可能になる「場」を提供

19

5. おわりに

- 灰色診断 (青木・村上, 2015)
- 過去のライフステージごとの変遷のアセスメント (井上, 2013)
- 生育歴の把握
- 専門家の視点は本人にとって侵襲的になることも



- 主観的体験の意味づけ
- 対話の成立
- 自己評価
- チームワーク

20

参考文献

- 青木省三・村上伸治 (2015) 大人の発達障害を診るということ 診断や対応に迷う症例から考える. 医学書院
- 広沢正孝 (2015) おとなの発達障害とその支援、そだちの科学、24、p87-91.
- 井上雅彦 (2013) ライフステージを踏まえた支援のためのアセスメント、臨床心理学、13 (4)、p484-486.
- 辻井正次 (2013) わが国における発達障害児者の障害にわたる支援の枠組み、臨床心理学、13 (4)、p463-467.

21

資料3 【実践報告】

(1) 「ろう・難聴の子どもたちにスクールカウンセラーができること」 賀屋 祥子

ろう・難聴の子どもたちに
スクールカウンセラーができること

東京都派遣スクールカウンセラー
賀屋 祥子

2015/8/29 聴覚障害者の精神保健福祉を考える
研修会2015 1

今日お話しすること

- 1 自己紹介
- 2 SCができること
- 3 活動例
- 4 今後の課題

2015/8/29 聴覚障害者の精神保健福祉を考える
研修会2015 2

①自己紹介

- 職業：東京都スクールカウンセラー
自治体の教育心理相談員、児童精神科心理士
- 資格：臨床心理士、手話通訳士
- 心理と手話：
 - ・元々、スクールカウンセラーを目指し大学へ。
 - ・大学でろう・難聴の学生と出会ったことが手話を始めるきっかけ。
 - ・彼らの学校歴やその中で体験を聞いたり、ろう学校の余暇活動でのボランティアや通常学級でのNT活動をしったりする中で、ろう・難聴者の心理支援について考えるようになった。

2015/8/29 聴覚障害者の精神保健福祉を考える
研修会2015 3

スクールカウンセラー(SC)って？

- ・週に1回（自治体によっては隔週や週2回）学校に勤務している相談の先生。
- ・派遣先：難聴言語通級指導学級併設の通常級。
東京都教育委員会からは特別支援学校にSCがほとんど派遣されていない現状
⇒学校を専門とする心理職の不足
⇒ろう・難聴について専門的理解のある心理職はさらに不足。
⇒異動というシステム

2015/8/29 聴覚障害者の精神保健福祉を考える
研修会2015 4

②ろう難聴の子どもたちにSCができること

2015/8/29 聴覚障害者の精神保健福祉を考える
研修会2015 5

問題への対応と予防という考え方

2015/8/29 聴覚障害者の精神保健福祉を考える
研修会2015 6

○相談機関・医療機関は二次予防・三次予防の機能が強い。

○OSCは相談がメイン、と思われがちな仕事。けれど、実際は一次予防・二次予防の機能がとても強い。



2015/8/29

聴覚障害者の精神保健福祉を考える
研修会2015

7

○聴覚障害児の教育の場

「ろう学校」、「難聴学級」、**インテグレーション**と呼ばれる「通常学級」が存在する(根本, 2006)

○インテグレーションする聴覚障害児の支援

ろう学校数の減少, 障害の早期発見, 早期教育の効果, 2007年度より開始した**特別支援教育制度**がその要因として挙げられる(木村, 2003;美濃・鳥越, 2007)。

LD,ADHD,高機能自閉症を含め, **障害のある児童生徒一人ひとりの教育的ニーズを把握し, 適切な必要な支援を行なう。**
(文部科学省, 2003)

2015/8/29

聴覚障害者の精神保健福祉を考える
研修会2015

8

校種別にみた聞こえない・聞こえにくい子どもたちの在籍数

ろう学校 [106校]	難聴学級	通級	
幼稚部 1,215			
小学部 3,099	小学校 933	小学校 1,704	
中学部 1,909	中学校 385	中学校 352	
高等部 2,310			
計 8,533	合計 1,318	合計 2,056(人)	

ろう学校・難聴学級に在籍する子どもの数は約12,000名。
0~18歳の聴覚障害児の数は約15,800名(平成24年度、内閣府)
少なくとも約3,800名は通常学級のみで過ごしている。

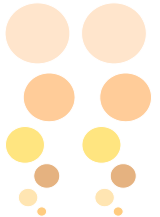
2015/8/29

聴覚障害者の精神保健福祉を考える
研修会2015

9

②ろう難聴の子どもたちにSCができること

- ・在籍が通常級である中で…
 - ・言葉の教育がメインになりがちなか中
 - ・アイデンティティ発達途上である中で
- ⇒何ができるだろうか？



2015/8/29

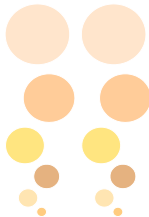
聴覚障害者の精神保健福祉を考える
研修会2015

10

○内外の資源を整理する
⇒資源はもの、だけではない。人や、場所。

○担任に様子を伝える

○その他にできること



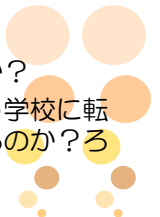
2015/8/29

聴覚障害者の精神保健福祉を考える
研修会2015

11

④事例から考える課題

- ・色々な選択肢を提示するものの…
⇒自己理解をどこで行っていくのか？
- ・多文化モデルの導入しやすい環境
⇒他の学校でも行えるのか？
- ・子ども自身の抵抗が強い場合は？
- ・こちら側の押し付けになっていないか？
- ・通常級に通っていた子どもたちがろう学校に転入した場合、どのような変遷をたどるのか？ろう学校での心理的サポートは？



2015/8/29

聴覚障害者の精神保健福祉を考える
研修会2015

12

④今後の課題

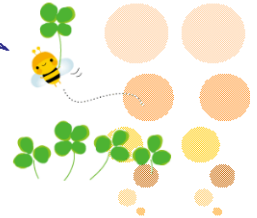
- 通常級、特に小学校であがってくる課題の多くは学習や環境調整
 - ⇒心理的支援の多くは中高生以上から開始。しかし、現実には幼少時からの自己理解や周りの理解がアイデンティティ発達にはとても大切。
 - ⇒修論時のインタビューから感じること
- 合理的配慮と文化モデルの間に思うこと。
- 聴の支援者の限界

2015/8/29

聴覚障害者の精神保健福祉を考える
研修会2015

13

ご清聴
ありがとうございました



2015/8/29

聴覚障害者の精神保健福祉を考える
研修会2015

14

資料4 【実践報告】

(2) 「精神障害雇用トータルサポーターとして感じていること」

稲 淳子

支援事例から

精神障害者雇用トータルサポーターとして思うこと



精神保健福祉士・社会福祉士 稲 淳子
2015. 8. 29

1

- ・精神障害者雇用トータルサポーター
大阪東・西・梅田ハローワーク
- ・大阪ろうあ会館
「聞こえないひとのための心の相談」
「グループワーク」
- ・重複聴覚障害者施設 カウンセリング
大阪府「なかまの里」「あいらぶ工房」
京都府「いこいの村」
- ・地域の精神保健相談
- ・他に活動として
「日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会」
- ・法定成年後見人

2

一般社団法人
日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会

聴覚障害者とコミュニケーションができる、
社会福祉士、精神保健福祉士の集まりです。

普通に学校に行きたい、働きたい、生活したいと思っても、色々な原因でその思いがかなえられていない聴覚障害児・若本人や関係者と一緒に考え、さまざまな専門家と協働して、その解決に向けて支援します。

3

聴覚サポート「なかま」

精神的にショックを受けている
仕事をなくしてしまつた
生活が苦しくなった

でも、大震災前の普通の生活に戻りたい！

このような聴覚障害者の自立努力を、聴覚障害の特性を熟知し、手話やその聴覚障害者に合ったコミュニケーション手段が使える社会福祉士・精神保健福祉士が、側面からサポートいたします。

「困ったこと」なんでも相談ください。

- 住宅・生活相談
- 心の相談
- 発達相談
- 医療の相談
- 介護相談
- 福祉の相談等

聴覚サポート「なかま」
現地コーディネーター 小海
TEL: 022(293)5531
FAX: 022(293)4023
メール: nakama@jaswdh.org

4

全国聴覚障害者相談支援事業

聴覚サポート「なかま」

毎日の生活の中で... 精神的に疲れてしまつた
職場でコミュニケーションがうまくいかなかった
子どもが障害者になつてしまった

でも、
当たり前に生活したい、進学したい、就職したい！

このような聴覚障害者の自立への願いを、同じ聴覚障害者もつちか、聞こえる人でも手話をはじめ聴覚障害者とコミュニケーションのできる、社会福祉士や精神保健福祉士が、側面からサポートします。

「困ったこと」なんでも相談してください。

- 就学相談
- 心の相談
- 発達相談
- 医療の相談
- 介護相談
- 福祉の相談等

聴覚サポート「なかま」
派遣コーディネーター 矢野
TEL: 03(5464)6058
FAX: 03(5464)6059
メール: nakama@jaswdh.org

5

精神課題を抱える聴覚障害者への支援で感じたこと

- ・適切な精神医療保健福祉サービスなど社会資源の不充分さ
- ・治療の必要性がないのに、精神科病院に長期入院、誤診
- ・忘れられた自分の手話、言葉、社会性の喪失
- ・対人関係の構築の障害、弊害

支援者には...

- ・コミュニケーションの多様性がコミュニケーションの困難さと捉えてしまうため症状がわかりにくい、把握しにくい、困難ケースと捉えてしまう
- ・コミュニケーションの困難さを、聴覚障害という障害だけに注目してしまいがち

6

関わりがもてなくなる
コミュニケーションができない



相談時は、
人間関係が悪化
こじれが修復できない状態

7

- ・ 特別支援学校から
- ・ 事業所から
- ・ 障害者職業センターから
- ・ ハローワークから
- ・ ジョブコーチから
- ・ 他

8

家庭、教育場面では、
「配慮された」コミュニケーション環境

- ・ 聴覚障害を知っている
- ・ 情報保障は一応ある
- ・ 「わかった？」とか、「わかるように話す」「言葉を置き換える」幼少期からの習慣で当たり前になっている

9

就労場面は配慮され難い環境

- ・ 聴覚障害があるというだけで理解されにくい
- ・ 周囲は、不自由、不便と感じている
- ・ 面と向かって言いにくい、言わない
- ・ 仕事上大きな支障がない限りは指摘しない

10

聴覚障害者に対する専門的な相談支援

- ◆ 「聴覚障害」の特性を把握、理解
- ◆ 直接的なコミュニケーション手段を用いる
- ◆ 専門資格を有することで社会的地位・信用

11

資料5 【実践報告】

(3) 「実践例報告 精神保健福祉相談支援事業の取り組みから」

森 せい子

精神保健福祉相談支援事業の
取り組みから

社会福祉法人聴力障害者情報文化センター
森せい子

1

ケースワーク～発達障害～

辛さがわかりづらい
ずっとずっと苦しかった・・・
という気持ちに寄り添って

2

聴覚障害者の発達障害

初めの相談では

「仕事をみつけない」

「聴覚障害では問題ないが仕事が見つからない」

よくよく話を聞いてみると

「人とうまく関われない」

「思うように話せない 声が出てこない」

「何を言っているのか、理解が遅い」

・・・もしかしたら・・・発達障害という見方が必要

どうやって切り出すか・・・

3

信頼関係づくりに時間を

- とりとめのない話から お手玉なども
- グループ活動に誘ってみたり
- 家族関係をそれとなく把握しつつ
- 家族の中で苦しいんだよね 実は・・・結構

4

一般論としての話から

- 自らの気づき
- 専門機関 病院への照会
- 精神疾患？ショック！→不安を軽く
- 自分を見つめていこう
- 自分を肯定していこう
- できることを役割として

5

やっと前に進めるように

- | | |
|-------|--|
| 本人の思い | 目標ができた
自信はもてないけれど
理解してくれる人がいる |
| 家族の思い | 幼いころからの育てにくさや
発達傾向がようやく理解でき
た。ホッとした。 |
| 支援者の目 | できることを伸ばすこと
周囲の理解を深めるには |

6

こころのグループワーク実践

• SSTのその後

メンバーは誰でもウエルカム！
人前で話すことが上手に！
自分のことは棚に上げて人の心配
人の振り見てわがふり直せ
議論・反対意見もなんのその

7

- わらじ作り 廃物利用の作業療法
片倉先生へ感謝をこめて大きなわらじを編みました！
- レクリエーション 楽しむというより勝負師達
負けず嫌い 負ける練習
- SST（社会生活技能トレーニング）
人は言葉と態度、目で気持ちを通わせるものよ。
殴る前に逃げよう
- 知恵アップ 説明文やお金の計算など生きて
いくために必要なこと 意外とできていない

8

野外活動等

- 片倉農園におじゃましています 毎年
- 調理 クリスマス会 初詣 花見
- 活動はみんなで話し合っ
あ〜でもない こ〜でもない と
- 家族教室 ご家族の思い

9

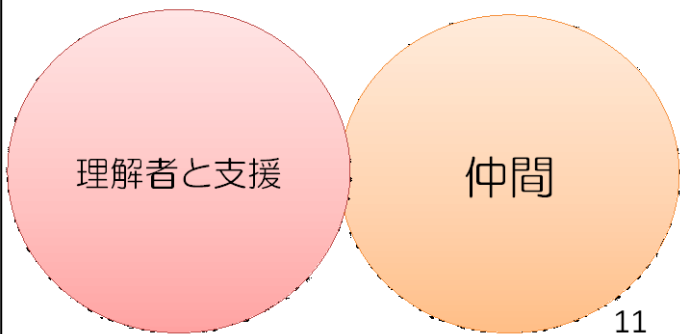
こころのグループワーク2015

一年のダイジェスト版

映像をご覧ください

10

みんな 聴覚障害とともに
発達デコボコかもしれないけれど
わかりづらいことがあるけれど



11

できること頑張れることを探して
疲れた時は休みながら
お互いを認めあって支えあって



12

資料 6

聴覚障害と精神的な問題を抱えるご家族の声

グループワークや家族教室に参加してくださっているご家族の方に声をいただきました。プライバシー保護のために一部修正している部分もありますが、ご本人の許可の上ほぼ原文のまま掲載しています。

◆ Aさん

癒しの場・家族教室

見栄っ張りや、世間体を気にする私にとって、精神を病んでいる娘のことを洗いざらい話すことはなかなか難しいことでした。困難にぶつかった時は、どう解決すればよいかを今迄の体験から思い起こして乗り越えてきました。正直、その場凌ぎということも多々ありました。数年前の研修会で情文センターの存在を知り、連絡を取り、快く受け入れていただき現在に至っています。

生き生きと明るい表情で張り切ってグループワークに通い始めた娘でしたが、最近足が遠のいています。ひとつ乗り越えると、また次の山が控えているという、気が遠くなるような道のりですが、そんな娘をセンターの職員の方々が全面的にバックアップして下さり、家族のためには家族教室を開催していただくという恩恵に与っております。

第一回目の家族教室では少し身構えましたが、回を重ねるにつれ本音で語れるようになりました。自分の思いを口にする。聞いてくれる同じ思いの人がいる。頼れる人もいる。壁にぶつかった時、私に任せて！と、とびっきりの大らかさと笑顔で包んで下さる職員もいます。かつて保護者会は敷居が高く、重い気持ちで帰路に着いていた私ですが、センターを出る時は心も足取りも軽くなっているのです。

しかし近頃は、全てを投げ出したい！どうにでもなれ！と弱気になることが増えました。これから年老いて行くと共に体力、気力の衰えは否めません。また、先に逝った後の不安も大きいですが、自分をコントロールしながら地道にやっていかねばなりません。

いつの日か、親子共々こんなに成長しましたと報告し、職員の皆様の笑顔を見せていただける日が来ると信じて歩みたいと思っています。家族教室がいつまでも癒しの場でありますように。

◆ Bさん

精神的な病気は病院で薬を処方されても、症状を抑えるだけで根本的な治療とはなりません。手話をコミュニケーション手段とする難聴者はカウンセリング等治療を手話で対応してもらえないという壁がたちはだかります。手話対応でグループワークや個別相談で SST、ロールプレイ、認知行動療法などをしてくださる情文センターは本当に貴重な存在です。まさに困った時の駆け込み寺的存在です。職員の皆さんの暖かい支援の下、息子の居場所となっています。

情文センターでは当事者の家族のための家族教室も開催されています。

手話のできる精神科医、精神保健福祉士、通訳士の方々と交えて、家族としての悩み等話し合い有意義な時間を共有しています。参加することで悩み苦しんでいるのは自分だけではないと気持ちが楽になります。情文センター皆さんが一丸となって頑張ってくださいていること本当に感謝しています。地域にも情文センターのような手話対応可能な支援機関ができることや、難聴者が通う病院、作業所、介護施設等に手話通訳者が常勤として所属しているようになることを願っています。

手話通訳士が国家資格になって社会的地位の確立がされ、生計をたてていける職業になれば、もっと活動できるようになるのではないかと思います。

◆ Cさん

『不安』漠然とした言葉。そして終わる事のない永遠の禅問答。幸福な家庭生活を送っていると思われる健常者達でさえ（隣の芝生は青い）この不安の二文字は心の隅に抱えてたりもするでしょう。

我家の買ったばかりの冷蔵庫の下段三段目の野菜室は私の投げた器小皿でボコボコです。

何年前であろうか？三年前？四年前？その年の秋頃から統失の症状（彼女は躁が強くて）が強くて長く続き、一方的妄想言動で母の私に誹謗、中傷攻撃の毎日。その内容は……中略……自分を認めていない、おまけに邪魔している、強制してくるとか、書き続ければこれでもかと思う言葉で止まる事なく攻撃し続けるのです。

これは病気だから、病気だから、一番本人が辛いのだからと思いつつも私の心のバランスは完全に崩れた結果、ボコボコ冷蔵庫となったのです。それについて、数ヵ月後に、夫が「どうしたんだ！これは！」これが現状です。又、娘自身その時の記憶は今としてはないのでしょう。当然口にしない迄も夫婦間にも気まずい空気が流れて、「お前がかまうからだほっとけ病気なんだから……」「ほっとける事と幾ら病気でもそれはそれ、ほっとけない事もある」とのやりとり……。『木の芽時』が来る前後は注意とは思ってましたが、秋にも、つまり年二回の強い躁の症状となると正直会話すらない一日を送るのが精一杯の私の体です。その度クリニックの薬が体に合う迄、奇妙な言動に振り回され、情文の方々にも充分お分かりかと思いません。

さて、この重複障害の彼女も安定状態となると、母親が老いて行く姿を己に写して将来の不安を口にします。親亡き後の安定した生活を真摯に先々一人になってしまふ事を前提に考えて伝えて来るのです。又、本人は自分は「知的障害者」ではないと強く否定していますのでそう扱われる事に強い拒絶をします。都会ではなく、ストレスの少ない静かな所で共同生活を送れる所とか本人も考えたりする様ですが、それなりの年齢が来る迄はやはりこの年二回の躁の状態が強くて出て来る事が前提だと、それにどれだけ他人（スタッフ）が対処できるものなのか疑問です。この親ですら、もしかしたら遠慮のない親だから直更なのかとか？と思ったりもしてしまうのが現実。統失という病気（彼女は重い方なのか）は薬は手離せないのですから（それを相当理解してあげられる人達が居る場所 24 時間対応が現実には差しせま（精神病院ではなく）っています。認知症の両親を持ち介護ホームに 10 年以上通い続けている私としては全くダブッて見えるのです。十人十色の重複障害者に対応できるスタッフの育成と施設兼仕事場を早急に欲する所です。重度聴力障害者統合失調症者の母親より

◆Dさん

どんなに変でも、どんなに変わったことをしておかしな子だと思われても、かわいい息子なんです。あの子の為に子どもは一人と決めたのです。私達がいなくなったらどうなっちゃうのでしょうか？病院の居心地が悪くなさそうなのでこのまま長く入院してもよいのかもしれない……。中略……。私、息子が自分より先に死んで欲しいと思うのです。それが一番安心します。もちろん変なことはしませんけどね……。一秒でもいいから自分より先に逝って欲しいのです。お世話になっている心理職の方から、おそらく自閉症だったのに育て方を間違えましたねと言われて……。そんなこと今言われても……。どうしようもないですよ……。もう手遅れですよ……。今更そんなこと言われてもどうしようもないです。こうして家庭訪問もして下さるし、私達親も年をとる一方ですから何が何だか考えが堂々巡りで……。こういう状況を社会のみなさんにどんどん知ってもらいたいです。何とかして欲しいです。

◆Eさん

父親の言葉

親亡き後のグループホームでの生活を望んでいるが性格の起伏がはげしいので、心配です。現在福祉的就労で働いていますが、ひとり生活は難しいと思うので、その点の御指導をお願いしたいと思います。

母親の言葉

親亡き後の生活が心配です。逆に親が長生きしても 子どもに世話をかけるようなことでは本人に苦勞をかけてしまい、これもまた心配のたねです。本人が健康で長生きできるか それも心配です。兄がいますが、少し離れて暮らしているので数えるぐらいしか交流がありません。面倒はみると思いますが、同居は無理と思います。衣食住は ひとりで何とかできても、社会とのつながりがスムーズにできるか、不便さもあるので障害者の方々と共同生活ができれば理想ですが、少し性格が几帳面すぎて他人さまと生活ができるのか、難しい面もあります。情文センターでの行事や勉強会などに参加して社会性も少しずつ身につけ学習能力もびっくりする程向上しており、こういう生活の場を持たたことを有難いことだと思い、御指導の先生に感謝しております。

◆Fさん（書くのが苦手なのでと電話をくださったご家族）

娘が嬉しそうに情文センターに通っています。病状も安定して元気です。ありがたいことです。他の聞こえる兄弟も同じような課題を抱えています。聴覚障害があることでこのようなセンターに参加できていることは返ってよいことかもしれません。



社会福祉法人 聴力障害者情報文化センター

聴覚障害者情報提供施設

〒153-0053 東京都目黒区五本木1-8-3
FAX 03-6833-5005
TEL 03-6833-5004
E-mail soudan@jyoubun-center.or.jp
URL <http://www.jyoubun-center.or.jp/>



東急東横線 祐天寺駅西口より徒歩4分

